

た

**吉賀大眉** (たいが・たいび/1915～1991年)

山口県生れ。1932年萩商業学校を出て商工省京都陶磁器試験所に入所。ここで沼田一雅に出会って陶彫を学ぶ。38年東京美術学校彫刻科卒。38年新文展で入選。40年沼田一雅の窯に通い師事したほか、板谷波山、清水六和などにも指導を受け、同17年には加藤土師萌の窯に通う。55、56年日展で北斗賞、57年日展で特選および北斗賞。58年日展で特選、61年同会会員。69年改組日展で内閣総理大臣賞。81年日展出品作で日本芸術院賞、82日本芸術院会員。現代工芸美術家協会副会長。「大眉白」と呼ばれる白釉、「大眉井戸」と呼ばれる井戸茶碗など、独自の技法、作風。萩焼に現代感覚を生かした新たな世界を開いた。1990年文化功労賞。山口県で没、76歳。陶芸家、萩焼作家

**タイガー立石・立石紘一・大河亞** (たいがー・たていし・たていし・こういち/1941～1998年)

福岡県生れ。1963年武蔵野美術大学短期大学芸術デザイン科卒。64年中西夏之、荒川修作、工藤哲巳らとヤング・セブン展(南画廊、東京)。88年美術の中の4つの観光展-篠原有司男・立石紘一・中村宏・横尾忠則(池袋・西武百貨店ギャラリー)。69～82年伊・ミラノに移住、71～74年オリベッティ社エツレ・ソットサス工業デザイン研究所嘱託。84年絵本「とらのゆめ」(こどものとも344号、福音館書店)刊行。90年、立石大河亞に改名。94、99年個展(田川市美術館)。97年 LET'S GO 浮世絵(三鷹市美術ギャラリー)。98年まんがの時代(東京都現代美術館、他)。1998年没、56歳。2008年個展(埼玉県立近代美術館)。洋画家、漫画、絵本、陶芸

**平 勇雄** (たいら・いさお/1907～1976年)

岡山県生れ。鍋井克之・中村善策に師事。一水会会員・日展会友。1976年没、69歳。洋画家

**多比良久人** (たいら・ひさと/1915～1997年)

長崎県生れ。1935年長崎師範学校卒。同校研究科(洋画)修了。35年光風会展連続出品、連続入選。白日会展出品、56年白日会展賞、準会員、後会員、78年白日会会長長崎支部長。37～59年島原第一小学校・島原第一中学校に勤務。59～66年県教育委員会指導主事。66年長崎市教育委員会及び学校長歴任。77年県展実行委員会副委員長、78年事務局長。1997年没、82歳。洋画家、美教

**平 昌子** (たいら・まさこ/1974～2020年)

大阪生れ。建築事務所に勤務した後、2000年建築プロデュース会社で広報に転身し、アートギャラリーを経て、09年に「TAIRA MASAKO PRESS OFFICE」を立ち上げた。「横浜トリエンナーレ」や「G-tokyo」「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭」「札幌国際芸術祭」「あいちトリエンナーレ」「岡山芸術交流」など国内の芸術祭やアートイベントのPRを手掛け、ヴェネツィア・ビエンナーレの国際美術展・建築展では日本館を担当するなど、パブリシストとしてアート業界と建築業界に貢献した。ビームス創造研究所のクリエイティブディレクター 南雲浩二郎氏はパートナーで、2人の暮らしは雑誌の企画などで取り上げられていた。2020年没、46歳。パブリシスト、「TAIRA MASAKO PRESS OFFICE」主宰

**蛇 雄** (だ お/1948年～)

愛知県生れ。1964年星城高等学校を中途退学。74年独学で油彩画を描き始める。美術文化協会の画家・近藤正治、城景都らの芸術グループ・南蛮美術に参加。77年初個展を岡崎で開催。以後、個展を中心に発表し、ニューヨーク、香港など海外でも開催。2002年画集『DAO 深海のヴィーナスたち』(蛇雄志有の会)出版。05年愛・地球博で愛知万博日本館の館長迎賓室に作品展示。海上自衛隊横須賀地方総監部シンボルマーク作成。11年アートギャラリー・松平(豊田市)がオープンし、作品を常設展示(～2015年)。水彩画家

**多賀 新** (たが・あらた/1946年～)

北海道生れ。1969年銅版画を独学。のち、深沢幸雄に師事。73、74年版画グランプリ展で受賞。74年シロタ画廊で個展開催。以降北海道、東京、京都で個展開催。81年台湾等海外でも個展開催。83～84年文化庁派遣在外芸術家研修員として米、独に滞在、個展開催。幻想とエロチズム表現。2001年北海道立帯広美術館で個展開催。05年市川市市民文化特別賞。版画家

**互井開一** (たがい・かいいち/1904～1967年)

埼玉県生れ。1924年埼玉師範学校卒。32年日本水彩画会展、太平洋画会展に入選。34年光風会展、35年二科展に入選。36～48年官展に水彩画を出品。41年青樹社で個展。47～48年白日会会員。49年新水彩作家協会創立委員長、55年三軌会と改称、同会委員長。水彩画の主体性を確立に専念。53、58年日本橋、白木屋で個展。62年東京電機大学主任講師。

66年銀座松屋で個展。東京で没、63歳。水彩画家

**高井鴻山** (たかい・こうざん/1805～1883年)

長野県生れ。京都で書を貫名海屋、画を岸駒父子、詩文を梁川星巖、儒学を佐藤一斎に学ぶ。大塩平八郎や佐久間象山とも交遊し、晩年の葛飾北斎を小布施に招いた。一方、窮民の救済に尽力し、尊王攘夷・公武合体を唱えた。維新後、高矣義塾を開く。1883年没、78歳。江戸、明治時代の儒学者、浮世絵師

**高井貞二** (たかい・ていじ/1911～1986年)

大阪生れ。1930年上京、二科展に入選。二科展には毎年出品。雑誌の挿絵制作。38年九室会の結成に参加。40年二科展特待賞。43年文展で岡田賞。戦後、45年行動美術展の設立に参加。54年渡米、NYに住み抽象作家として活躍。63年二紀会委員。73年ウイントロップ女子大学客員教授。79年和歌山県立近代美術館で「高井貞二展」開催。86年没、75歳。洋画家、挿絵

**高井寛二** (たかい・かんじ/1922～2005年)

岡山県生れ。1944年東京芸術大学美術学部油絵。50年行動美術協会、創立期会員。行動美術協会の中心メンバー。56年朝日新聞新人選抜招待(三越)。71年日本画壇全貌展に招待(彩壺堂企画)。84年亀谷美術館素描展に招待出品、亀谷美術館企画。日本画壇200人展に招待、彩壺堂企画。東京で没、83歳。洋画家

**高岡徳太郎** (たかおか・とくたろう/1902～1991年)

大阪生れ。天彩学舎で松原三五郎に師事。上京。本郷洋画研究所に入り岡田三郎助に師事。1924年大阪に帰り、信濃橋洋画研究所に入所。第11回二科展に初入選。31年第18回二科展で二科賞。34年～35年渡仏。第22回二科展で推奨。36年二科会会員。41年新生活美術第2回展に出品。53年第38回二科展で会員努力賞、二科会退会。55年鈴木信太郎らと一陽会を創立、同会常任委員。91年10月10日東京で没、享年89歳。(佐)洋画家

**高木志朗** (たかぎ・しろう/1934年～)

青森県生れ。武蔵野美術大学入学、独学で版画制作に没頭、退学。1958年グレンヘン色彩版画トリエンナーレ受賞。67年サンパウロ・ビエンナーレ展で日本版画協会展受賞、国展受賞。68年クラコウ国際版画ビエンナーレ「人間と社会」部門 グランプリ受賞。71年頃から津軽の風景を題材とし白と黒をメインに表現する作品を多く発表。版画家

**高木隆行** (たかぎ・たかゆき/1959年～)

愛知県生れ。1983年多摩美術大学卒。81年日本版画協会展、81年国画会展に出品、82年中部国画会展で中部国画会賞、83年新人賞。82年版画グランプリ展に出品、83年グランプリ賞。82年中日展で佳作賞。版画家、日本版画協会準会員、木版とコログラフの併用。版画家

**高木 俱** (たかぎ・とも/1924～2016年)

東京生まれ。多摩造形芸術専門学校中退。1949年より沼津に住む。58年より個展、グループ展多数。59年資生堂ギャラリーで個展。62年～75年アルミレリーフ及び壁画制作。81年アジア現代作家展招待(バーレーン王国)。89年裾野アートハウスで個展。2016年没、92歳。(水口)洋画家

**高木背水** (たかぎ・はいすい/1877～1943年)

佐賀県生れ。1993年頃岡田三郎助を知り、94年大幸館画塾に入る。98年白馬会洋画研究所に学ぶ。99年白馬会展に出品。1904～6年渡米、コロンビア大学美術科に学ぶ。07年文展に出品。10年渡英。12年文展に出品。13年太平洋画会展に出品、宮内省買上げ。15～19年朝鮮半島で制作。22年朝鮮美術協会展設立に尽力。28年帝展に出品。37年銀座青樹社で回顧展。東京で没、66歳。洋画家

**高木背水 II** (たかぎ・はいすい/1877～1943年)

佐賀市生れ。本名誠一。1889年上京。94年大幸館に通う。一時、東京英語学校に学ぶ。97年鍋島侯爵家の玄関番書生として仕える。98年白馬会洋画研究所に通う。99年第4回白馬会展に出品。以後5～6回展、11～13回展に出品。1904～06年岩村透、白滝幾之助らと渡米。07年東京勸業博覧会に出品、第1回文展に出品。10～12年渡英、滞在中、ジェームス・クイン、レオナルド・ヒルに師事、ロイヤル・アカデミーに出品。36年朝鮮美術展の設立に尽力。文展、帝展、白日会展、太平洋画会展に出品。37年回顧展を銀座、青樹社で開催。43年5月12日没、享年66歳。(佐)洋画家

**高木晴太郎** (たかぎ・はるたろう/1912～1977年)

名古屋市生れ。辻永に師事。1932年光風会展に入選。42年光風会会員。34年二部会展に入選。51年日展で特選、朝倉賞。名古屋市で没、65歳。洋画家

**高木勇次** (たかぎ・ゆうじ/1911～1999年)

栃木県生れ。1926年春陽会洋画研究所に通う。31年春陽展に入選、以降連続出品、春陽展で春陽会

賞。40年春陽会会友。41年足利にて秋光会を主宰、のち49年、春創会、56年、春陽会栃木県支部に改名)。56年春陽会会員。64～65年渡欧。99年没、88歳。洋画家

#### 高木保之助 (たかぎ・やすのすけ/1891～1941年)

東京生れ。1901年川端玉章に師事。19年同校日本画科選科卒。松岡映丘に師事し、映丘画塾の「木之華社」に同人として参加。23年新興大和絵会参加。19、28、29年帝展で特選、30年帝展推薦。35年国画院同人。東台邦画会、日本画院に出品。大和絵の伝統を継ぐ花鳥画を得意とした。版画も制作。1941年没、50歳。日本画家、版画家

#### 高木義夫 (たかぎ・よしお/1923～2001年)

東京生れ。1941年伊東深水に師事。59、61年日展特選。63年日展菊華賞。69年日展白寿賞。76年高山辰雄に師事。78年日展総理大臣賞。92年勲三等瑞宝章。日本美術院同人、同理事。東京で没、78歳。(出典 わ眼) 日本画家

#### 高久靄厓 (たかく・あいがい/1796～1843年)

栃木県生れ。別号に疎林外史・如樵等。高久隆古は養嗣子。初め郷里の画家平出雪耕等に学び、のち江戸に出て谷文晁に入門。池大雅・伊孚九に私淑し、独特な南宗画様式を確立する。立原杏所、菊池淡雅らの知遇を得、また渡辺華山、椿椿山らと親交を結んだ。1843年没、48歳。江戸後期の南画家

#### 高崎 剛 (たかさき・たけし/1902～1932年)

東京生れ。1924年横浜から日本郵船の箱根丸で渡仏。高野三三男、岡田謙三、岡上りうが同行。25年「巴里週報」第一号の発行人になる、編集人は石黒敬七。26年第2回在巴里日本人美術家展に出品。27年日本美術展覧会に出品。藤田が将来を属目し、薩摩が注目した鬼才。28年リュウダゲールのアトリエに横手貞美と共に住む、各展覧会に出品。29年アンリ・ブロカが主宰した挿画入り月刊誌「パリ-モンパルナス」4月号に藤田の周辺画家についての記述がありその筆頭に、高崎剛は生粋の江戸っ子であり、小柄、腕白、素晴らしい画家で大酒飲みである。パリで没、30歳。洋画家

#### 高崎元尚 (たかさき・もとなお/1923～2017年)

高知県生れ。1949年東京美術学校彫刻科卒、土佐中学校・高等学校に勤務。51年モダンアート展出品、54年新人賞、57年会員。58年抽象絵画の展開展出品(東京国立近代美術館)。64年代表作「装置」を制作。66年ジャパン・アート・フェスティバル出品作

家となり渡米。66～72年具体美術協会会員。79年吉原治良と具体のその後展出品(兵庫県立近代美術館)。92年具体美術協会の作家たち展出品(宮城県美術館)。2016年高崎元尚展(香美市立美術館)、NHK「日曜美術館」アートシーンで紹介。2017年高知県立美術館で「高崎元尚新作展 一破壊COLLAPSE一」を開催。2017年没、84歳。具体、インスタ、美教

#### 高沢圭一 (たかざわ・けいいち/1914～1984年)

群馬県生れ。1936年日本大学芸術学部中退。1939年聖戦美術展で朝日新聞社賞。藤田嗣治の知遇を得る。74年パリのヴァン・ドーム画廊で個展。75年ル・サロン展受賞。75～82年婦人公論の表紙絵。日本随筆家協会賞。美人画で有名。神奈川県で没、69歳。洋画家、挿絵、版画

#### 高島雲峰 (たかしま・うんぼう/1894～1987年)

山形県生れ。1915年太平洋画会研究所で洋画を学ぶ。17年に帰郷し、小松雪涯に日本画を学ぶ。19年山内多門の画塾に入門。21年日本大学美学科に入学、23年の大震災で閉鎖。21、25年中央美術展に入選。27年帝展に入選。33年南画家小室翠雲に師事。日本南画院に出品、同院解散後は南画連盟に出品。40年大東南画院の結成に参加し、委員。戦後は山形県内の日本画家グループ「春光会」を主宰し、多くの後進を育てた。66年齋藤茂吉文化賞。山形市で没、90歳。日本画家、版画

#### 高島常雄 (たかしま・つねお/1922～1975年)

高知市生れ。1944年東京高等師範学校芸術科卒。48年創元展に入選。52年創元会賞、53年創元会会員、54年同会運営委員。51年日展入選。55年日展で特選。58、61、63、70年安井賞展に出品。65年南欧、72年スペイン、南フランス、73年北欧。浦和市で没、53歳。洋画家

#### 高島常雄 II (たかはし・つねお/1922～1975年)

高知県生れ。1944年東京高等師範学校芸術科卒。48年創元会入選、出品を重ね、52年創元会賞、53年創元会準会員賞、会員、54年運営委員。51年日展入選、毎年日展に出品し、55年特選。58年、61、63、70年安井賞展へ出品、71年彫刻の森美術館買上げ。65年南欧、72年スペイン南フランス、73年北欧に旅した。64年7人会に参加。68年サンフランシスコで個展。1975年没、53歳。洋画家、美教

#### 高島 仁 (たかしま・ひとし/1900～1974年)

松本市生れ。飯田中学卒、長年松本県ヶ丘高校な

どで美術教師。当時松本画壇の中心的存在であった宮坂勝や、東京より疎開していた石井柏亭らの影響を受け、日本水彩画会展、県展で受賞。日本水彩画会会員。一水会会員。1974年没、74歳。2008年ギャラリー82で個展。**洋画家**

#### 高島北海 (たかしま・ほっかい/1850～1931年)

山口県生れ。工部省、農商務省の技術官吏を務めた後、50代で画家となるため上京。实景を科学的に分析して絵画表現の世界に活用するという方法によって独自の画風を樹立し、高い評価を得た。その後、文展の審査員を務めるなど画壇の中核として活躍した。また、官僚時代に留学したフランス・ナンシーではエミール・ガレなどの美術家と交流し、海外への日本美術の普及に大きく関わった。**洋画家**

#### 高島野十郎 (たかしま・やじゅうろう/1890～1975年)

福岡県生れ。大正 - 昭和の洋画家。東京帝国大学大水産学科卒。独学で絵を学ぶ。透徹した精神性でひたすら写実を追求し、孤高の人生を送った。1928年黒牛会展に出品。50年示現会展に出品。59年丸善で個展。柏市で没、85歳。(出典 わ眼)**洋画家**

#### 多賀 新 (たが・しん/1946年～)

北海道生れ。1969年より銅版画を独学。深沢幸雄に師事。73、74年版画グランプリ展で受賞。74年シロタ画廊で初個展を開催。83～84年文化庁派遣在外芸術家研修員、米、西独に滞在。ペン画やドローイングも制作。2001年北海道立帯広美術館で「十勝の新時代IV 多賀新展」を開催。05年市川市民文化特別賞。**版画家**

#### 高須賀桂 (たかすか・かつら/1913～1994年)

愛媛県生れ。愛媛県立松山中学校卒、1938東京美術学校工芸科図案部卒。森永練乳株式会社宣伝部に入社。41年二科展入選、以後同展への出品を続けた。47年鉱工品貿易公団美術工芸室に勤務、その後、貿易庁、特許庁に勤めた。52年二科展で特待賞、54年二科会会友、59年二科会会員、83年会員努力賞、84年二科会評議員。55～70年白色セメント造形美術会野外彫刻展出品。59年年仏国サロン・ド・コンパレゾンに出品。76年グループ13(東美校昭和13年卒)結成に加わる。75年特許庁審判長を退官。野外彫刻作品としては、品川区立図書館など数多く設置。東京で没、80歳。**彫刻家**

#### 高須光治 (たかす・みつじ/1897～1990年)

豊橋市生れ。1912年上京、岸田劉生の初個展を見て感銘を受ける。14年再上京、白馬会葵橋洋画研究

所に入る。15年巽画会第15回展で3等賞。15年草土社結成に際して同人となる。同展には、第1～3回、名古屋での第9回展に出品。27年大調和美術展覧会1回展に出品。29年第4回国画会に出品、以後8回展まで出品。53年新しき村美術展に7回より出品。62年大調和会が設立され会員となる。90年12月25日没、享年93歳。91年高須光治追悼展が豊橋市美術博物館で開催。(佐)**洋画家**

#### 高須鞠子 (たかす・ゆきこ/1909～1984年)

鳥取市生れ。女子美術専門学校卒。1929年「一九三〇協会」展に出品。48年までは斎藤雪枝名。55年独立賞。59年独立美術協会会員。46年女流画家協会創立会員。のち同会委員。71～74年女子美術大学教授。82年独立美術協会退会。東京で没、75歳。**洋画家、美教**

#### 高田明義 (たかだ・あきよし/1939年～)

東京生れ。1967年、東京藝術大学大学院修了。新制作展出品。73年グループ40 結成/イタリア・ルッカ具象展トスカナ賞。77年文藝春秋画廊で個展。81年現代の裸婦展大賞。現在、無所属。**洋画家**

#### 高田敬輔 (たかだ・けいほ/1674～1756年)

近江生れ。狩野四代目狩野永敬に師事。画僧・明誉古磧に雪舟の画法を学ぶ。仁和寺法親王の御所に出入りし、従八位上豊前大目の官位と藤原姓を賜る。画業では「藤原敬輔」と称した。1735年、法橋、69歳で法眼、「高田法眼」と称した。江戸本所羅漢寺において、短時間で巨大な涅槃図を描き、評判。故郷である近江日野に隠棲し、1756年没、82歳。江戸時代の**絵師**

#### 高田正二郎 (たかだ・しょうじろう/1913～1989年)

東京生れ。1929年日本パステル画会に入会し、矢崎千代治に学ぶ。30年吉田久継にデッサンの手ほどきを受ける。1938年東京美術学校図案科卒。39年光風会展で工芸賞。43年中村研一に師事。49年日展で特選。49年光風会会員。ほとバス社章、富士銀行マーク、防衛庁自衛官階級章デザイン。55年日本デザイン学会会員。57年文部省在外研究員、NYプラット美術学校留学。76年東京芸術大学教授。東京で没、76歳。**洋画家、デザイン**

#### 高田徳治郎 (たかだ・とくじろう/1909～1980年)

仙台市生れ。渋谷栄太郎に絵を学び、1930年に東北美術展に入選、翌年帝展に入選。以後も太平洋画会展や河北展にたびたび入選。戦後太陽美術協

会に出品し、53年同会会員。1980年没、71歳。**洋画家**

**高田博厚** (たかた・ひろあつ/1900～1987年)

石川県生れ。1919年東京外国語学校イタリア語科入学、21年同校を退学し彫刻を始めた。高村光太郎の推薦でコンディービーの『ミケランジェロ伝』を翻訳出版。27年大調和展に初めて作品を発表、29年国展に出品し新鮮な造形をみせた。31年渡仏、長い外国生活中、37年にパリ日本美術家協会を設立し、57年帰国。幅広い分野で活躍したが、引退して制作に専念。62年新制作協会会員。主要作品『フーロン夫人像』(1931, 東京国立近代美術館), 『女のトルソー』(37, 東京芸術大学)。鎌倉で没、87歳。**彫刻家**

**高田 誠** (たかた・まこと/1913～1992年)

埼玉県生れ。1931年浦和中学校卒。31年安井曾太郎の紹介で二科技塾に学ぶ。二科展には36年まで出品。37年一水会創立とともに出品。38年一水会賞。46年一水会会員。60年一水会運営委員。42年新文展で特選。46年日展で特選。58年日展会員。68年日展で文部大臣賞。71年日本芸術院賞。78年日本芸術院会員。83～85年日展理事長。87年文化功労者。55～67年埼玉大学教育学部美術科講師。80年から玉川大学客員教授。76年安井曾太郎記念会の理事、安井賞の運営に尽力。浦和市で没、79歳。**洋画家、美教、日展理事長**

**高田洋一** (たかた・よういち/1956年～)

大阪生れ。1979年大阪芸術大学美術学科卒。81年現代日本美術展で大賞。90年文化庁芸術家在外研修員としてベルリン留学。和紙、竹、石を用い、僅かな空気の流れを捉える、繊細な作品の動きが早くから注目を浴びる。JR 大阪駅、日本経済新聞社本社、横浜国際総合競技場、香港の「青衣駅」など大規模公共空間での作例。「水と土の芸術祭 2009」にも参加。造形作家、現代日本美術展大賞。2005～2010年には東京大学大学院総合文化研究科「科学技術インタープリター養成プログラム」特任教員。**彫刻家、造形**

**高田力蔵** (たかた・りきぞう/1900～1992年)

久留米市生れ。川端画学校に学び、石井柏亭に師事。1926年日本水彩画会会員。27～36年二科展入選。36年ベルリン・オリンピック芸術競技で銅賞。37年渡仏、パリのアカデミー・グラン・シヨミエールに学ぶ。38年パリ日本美術展に模写を出品、日本大使館より奨励賞。ルーヴル美術館で模写。40年春陽会会員。58, 62, 64年三越本店で個展。65年～度々渡仏。東京で没、92歳。**洋画家**

**高塚省吾** (たかつか・せいご/1930～2007年)

岡山市生れ。1953年東京芸術大学卒。55年高塚省吾展(銀座・村松画廊)個展。80年『高塚省吾素描集 おんな』出版(芸術新聞社・絶版)。1981 ソビエト文化省招待によるソ連旅行。銀座・日動画廊企画の現代の裸婦展、太陽展、日動展に招待出品(以後毎年)。日動画廊、日本橋三越、銀座松屋、四季彩舎で個展。2007年没、77歳。**洋画家、美人画**

**高藤鎮夫** (たかとう・しずお/1910～1988年)

名古屋市生れ。1931年加藤頭清に師事し、40年紀元2600年奉祝展に入選、新文展に連年出品し、戦後も日展に第1回より出品。29, 33年日展、新日展で特選、34年無鑑査出品、36年より3年間委嘱出品、38年審査員、39年会員、47年改組日展で審査員。日展を中心に、日本彫塑会、MC彫塑家集団などでも活動した。名古屋市で没、78歳。**彫刻家**

**高取稚成** (たかとり・わかなり/1867～1935年)

佐賀県生れ。通称は熊夫。別号に山桜がある。住吉広賢に大和絵、土佐派の山名貫義に学んだ。1911, 12, 15年文展で三等賞。24年帝展委員。久邇宮家御用掛、伊勢神宮技芸員、宮内省嘱託。有職故実にのっとり伝統的な大和絵技法を遵守した最後の純土佐派。大正天皇御大典の九大絵巻、伊勢神宮遷宮絵巻などを描いた。明治神宮絵画館には、「征東大正軍京都御出発の図」の壁画がある。晩年は宮内省御用のみを描いた。1935年没、69歳。**日本画家、壁画**

**タカノ綾** (たかの・あや/1976年～)

埼玉県生れ。多摩美術大学芸術学部卒。ハイティーン向け雑誌「Zipper」で『愛ごよみ』連載中。Kaikai Kiki メンバー。2001年穂村弘の歌集「手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)」の表紙・挿画で注目を集める。2002年英のロックバンド・フィーダーのアルバム「Comfort in Sound」のCDジャケットに彼女の絵が使用された。**洋画家、挿絵**

**高野卯港** (たかの・うこう/1948～2008年)

鹿儿島市生れ。和気士郎に学ぶ。大阪市立美術研究所に学ぶ。1976年労美展で大阪市賞。個展中心に発表する。86年洲之内徹の現代画廊で個展。渡仏。海文堂ギャラリーで個展。94, 96年渡欧。2008年没、59歳。島田画廊、神戸わたくし美術館で個展。(出典わ眼)**洋画家**

**高野真美** (たかの・しんび/1900～1980年)

山梨県生まれ。1922年日本美術学校卒。同校講師となり文展・帝展に作品を発表。文展無鑑査ならびに槐樹社、旺玄会、大潮会の審査員。37年山梨美術協会創立会員。日本美術学校教授。1980年没、80歳。  
**洋画家**

**高橋 潮** (たかはし・うしお/1944年～)

福岡県生まれ。1970年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒。80年個展(養清堂画廊、82年も)。81年個展(筑後画廊・久留米、86年も)。84年個展(藤野屋画廊)。85年練馬区立美術館創立記念展に出品。88年ノーベル賞顕彰財団画集刊行(スウェーデン)。89年練馬の美術89(練馬区立美術館)。**洋画家、版画**

**高橋勝蔵** (たかはし・かつぞう/1860～1917年)

宮城県生まれ。1875年上京。85年渡米、サンフランシスコ美術学校で西洋画を学ぶ。91年同校を首席で卒。93年シカゴ万国博覧会で1等金賞。93年帰国。東京芝に芝山研究所を開設。94年明治美術会展に出品。1902年巴会結成に参加。09、10年文展入選。17年没、57歳。**洋画家**

**高橋源吉** (たかはし・げんきち/1858～1913年)

江戸生まれ。高橋由一の養嗣子。天絵学舎に学ぶ。1876年工部美術学校に学び、フォンタネージに師事。78年同校を中退。十一字会結成。80年日本初の美術雑誌「臥游席珍」を創刊。89年明治美術会創立、会員。明治美術学校で教鞭。明治美術会改組で晩年放浪、山形を訪問。1913年、石巻で没、55歳。**洋画家、美教**

**高橋 剛** (たかはし・ごう/1921～1991年)

山形県生まれ。父は日本美術院所属の仏教彫刻家。父に師事して木彫を始め、46年東京美術学校彫刻科卒。関野聖雲に師事。47年日展入選。49年北村西望に師事。56、57、58年日展で特選。60年同协会会员。81年改組日展で内閣総理大臣賞受賞。86年改組日展出品作で日本芸術院賞恩賜賞。87年日本彫刻会理事、委員長。昭和30年代中頃まで木彫を中心に制作したが、のち塑像に転向し、鍛えぬかれたバレリーナの肉体をモチーフに、そこに宿る清新な精神の表出を試みた。62年東京家政大学で教鞭をとり、87年同大名誉教授。85年金沢美術工芸大学でも非常勤講師。東京で没、70歳。**彫刻家、美教**

**高橋幸子** (たかはし・さちこ/1941年～)

神奈川県生まれ。木彫の鬼才高橋英吉の長女、父英吉は芸大卒業後、28歳第3回文展特賞、以後無審査、

31歳戦死した。その亡父の残した豊富な遺作やデザインに高1より学びはじめる。独学にて独自の作風を編み出し、花鳥風月を刻み続けた。あたたかみのある作風で「こころの版画家」の異名を得る。二女の母。**版画家**

**高橋 秀** (たかはし・しゅう/1930年～)

広島県生まれ。武蔵野美術学校中退。1951年独立展に入選。60年独立賞。61年独立美術協会会員。61年安井賞。63～2004年渡伊、ローマで制作。以降抽象に転じる。87年芸術選奨。国公立美術館での個展多数。版画、モニュメント、写真制作。2011年倉敷芸術大学名誉教授。20年文化功労賞。**洋画家、版画、立体、美教**

**高橋秋華** (たかはし・しゅうか/1877～1953年)

岡山市生まれ。邑久郡幸島村(現在の岡山市西大寺)に生まれる。本名、敏太。別号に半香、聴鶯居がある。はじめ同郷の石井金陵に南画を学び、後に京都へ出て都路華香、ついで山元春挙に師事する。春挙の画塾早苗会に所属する。内国勸業博覧会の出品作や日露戦捷博覧会では褒状を受賞し、文展においても入選を重ねる。さらに大正11(1922)年にパリで開かれた日仏交換美術展に出品した《牡丹図》は、フランス政府買上げとなった。昭和5(1930)年に完成した明治神宮聖徳記念絵画館の壁画《御降誕図》は、皇后陛下からの拝命を受けて制作・奉納した代表作である。師春挙の円山派に近代味を加えた色彩豊かな画風と、私淑した岡本秋暉の得意とする花鳥画の世界に強く影響を受け、清雅で格調高い画風となっている。55歳頃京都から宝塚へ居を移し、戦後帰岡して亡くなるまでの7年間を岡山で過ごす。1953年没、75歳。**南画家、日本画家**

**高橋松亭** (たかはし・しょうてい/1871～1945年)

浅草生まれ。松本楓湖に師事。絵手本を見ながら日本画を学んだ。1887年宮内省外事課に勤めて、外国の勲章の写し、役人の通常服などをデザイン。91年岡倉覚三(天心)を会頭に、寺崎広業、尾形月耕、邨田丹陵、小堀鞆音、富岡永洗らとともに日本青年絵画協会を結成。また、岡倉創設の「互評会」にも横山大観、下村観山、菱田春草らとともに参加。教科書及び新聞、雑誌等の小説の絵に揮毫。東京勸業博覧会、工芸共進会に作品を出品して一等、二等褒状。1892年大倉書店より刊行された『日本歴史画報』第1号～第13号の木版挿絵、95年保勲会版行の『奉公偉績画卷』の石版画、木版画。1906年頃、版元の渡辺庄三郎と知り合っている。渡辺は、前羽商店の吉田竹次郎に相談すると、快く賛成されたため、彫師の近松

於菟寿、摺師の斧由太郎の協力の下、07年輸出用の短冊版の山水人物図数点を松亭の号で出版した。「墨田堤の夜」である。この作品が、渡辺にとっても松亭にとっても、独立した木版画としての第一作であった。1945年没、76歳。浮世絵師、**日本画家、挿絵、版画家**

**高橋士郎** (たかはし・しろう、1943年～)

1970年代当時先進的であったコンピューター制御によるアート作品「立体機構シリーズ」を大阪万博など多くの展覧会で発表した後、風船を素材とした「空気膜造形シリーズ」を考案し、世界各地で展開、芸術の分野にコンピューターやテクノロジーを浸透させた。イスラム紋様の研究。2003～2007年、多摩美術大学第7代学長。日本の**造形作家**

**高橋信一** (たかはし・しんいち/1917～1986年)

佐渡市生れ。佐渡農業学校卒。青年学校教員養成所卒。1957年現代版画コンクールで佳作賞。59年日本版画協会展賞、60年日本版画協会展賞、恩地賞、同会会友。63年渡欧。64年日本版画協会会員。66年仏、伊政府の招きで国立大学教育者の講師として東洋絵画、版画の技法を指導。69年国画会版画部会員。76年スイス・ザイロン国立版画展で受賞。48～76年両津高校で教鞭。73年佐渡版画村理事長。82年サントリー地域文化賞。84年佐渡版画村美術館が設立。新潟県で没、69歳。**版画家、美教、佐渡版画村理事長**

**高橋 進** (たかはし・すすむ/1910～1983年)

韓国生れ。1930年大阪中之島洋画研究所に入り、小出卓二に師事。35年二科展入選し、全関西美術展に出品。47年行動展で友山荘賞、48年同会会員、67年創立賞。太陽展に出品。東京で没、72歳。**洋画家**

**高橋節郎** (たかはし・せつろう/1914～2007年)

長野県生れ。41年新文展特選。日展で活躍し、57年常務理事。古墳や星座を題材に漆黒に金などを配した幻想的な作品を発表。65年「化石譜」で芸術院賞。76年母校東京芸大教授。78年現代工芸美術家協会理事長。81年芸術院会員。97年文化勲章。版画も手がけた。2007年没、92歳。**漆芸家、版画**

**高橋忠雄** (たかはし・ただお/1932～2012年)

兵庫県生れ。1966年二科会彫刻部会員。69～81年JR 姫路駅前「しらさぎの群」他、姫路市内の彫刻モニュメント67点制作。90年絵画に転向/芸術文化団体半どんの会「文化芸術奨励賞」受賞/大阪府立現代

美術センターにて個展「水の指標」を開催/天理美術展「奨励賞」受賞/等迦展の審査委員。92年エンバ美術コンクール入賞(入選作品展でエンバ美術館賞を受賞、作品が買い上)/現代美術白峰展で芸術選賞、審査員、大阪府立現代美術センターで個展開催。97年姫路市美術文化賞。2012年没、80歳。**彫刻家、洋画、陶芸**

**高橋忠弥** (たかはし・ちゅうや/1912～2001年)

東京生れ。岩手県師範学校卒。油絵を独学。独立美術協会展に出品。1943年独立賞。49年独立美術協会会員。61年文部省優秀作品買上げ。65～76年渡仏。本の装丁の分野でも一時代を築く。2001年没、88歳。**洋画家、装填**

**高橋庸男** (たかはし・つねお/1898～1993年)

東京生れ。川端画学校を終了後、1927年二科展入選、35年まで同展に出品。37年一水会展から出品。46年一水会会員。53年同会委員。46年から日展に出品。日展会員。62、82年審査員。同展には90年まで出品。54～68年多摩美術大学教授。横浜市で没、94歳。**洋画家、美教**

**高橋貞一郎** (たかはし・ていいちろう/1897～1955年)

長野県生れ。1918年長野県師範学校二部卒。郷里の小学校で教える。22年岸田劉生に師事。30年春陽展で入選。37年頃渡仏。46年一水会展に出品。一水会会員。52年日展で岡田賞、日展委嘱。55年没、58歳。**洋画家、美教**

**高橋虎之助** (たかはし・とらのすけ/1890～1984年)

高知県生れ。1911年太平洋画会研究所で中村不折らに師事。16年文展入選。37年帝展無鑑査。23～24年渡欧。15年太平洋画会会員。25年太平洋画会評議員、常務委員。29年太平洋画美術学校教授。47年太平洋画会が太平洋美術会に改称、会長。東京で没、93歳。**洋画家、美教**

**タカハシ・ノブオ** (たかはし・のぶお/1914～1994年)

徳島県生れ。船員として働きながら、洋画家・今井朝路に師事。二度従軍。神戸港で沖仲仕を務める。独特の画風を確立。エーゲ画廊で個展を開催。1970年NHKテレビ「港灣の画家」に出演。1994年没、80歳。(出典 わ眼)**洋画家**

**高橋北修** (たかはし・ほくしゅう/1898～1978年)

旭川市生れ。1919年上京、本郷の洋画研究所で洋画を学ぶ25年道展創立会員、45年全道展創立会員。44年創元会会員。48年旭川市文化賞。68年北

海道文化奨励賞。77年画業 60 年回顧展、作品集刊行。1978年没、80歳。89年北海道立旭川美術館で「ヌッタクカムシュッペ・高橋北修展」開催。洋画家

ンナーレで受賞(ポーランド)。版画家

高橋正子 (たかはし・まさこ/1958年～)

京都府生まれ。1979年東山美術研究所で油彩を学ぶ。83年京都女子大学卒、在学中に日本画を学ぶ。プレスコ画や立体作品も制作。91年以降は個展により作品発表。95～96年米ノースカロライナ州滞在。02年柏わたくし美術館個展。ギャラリー汲美個展、05年、ギャラリーテムズ個展。洋画家

高橋迪章 (たかはし・みちあき?/生没年不詳)

1938年解散した黒色洋画展の山本敬輔、斎藤義重らと絶対象派協会を結成。39年二科九室会創立会員。39年美術文化協会創立会員。シュール作家。洋画家

高橋道雄 (たかはし・みちお/1908～1979年)

網走市生まれ。網走中学校卒。1935年東京美術学校油画科卒。37年光風会展でF氏奨励賞。46年光風会会員。46年中部日美術協会展で市長賞。48年「四樹会」を結成。55年大潮会展で文部大臣奨励賞。日展会友。60年日展審査員。63、68年渡欧。79年没、71歳。洋画家

高橋由一 (たかはし・ゆいち/1828～1894年)

江戸生れ。蕃書調所(ばんしょしらべしよ)画学局にはいり、のち川上冬崖に油彩画を学ぶ。ワーグマンの指導をうける。1873年画塾天絵楼(てんかいろう)をひらき、原田直次郎、川端玉章らを指導し、洋画の普及につとめた。1894年没、66歳。作品に「花魁(おいらん)」「鮭」。幕末-明治時代の洋画家

高橋惟一 (たかはし・ゆういち・ただかず/1904～1989年)

仙台市生れ。1931～41年渡仏。33年巴里芸術家芸術愛好家協会会員。34年ベルギー万国博物館に日本代表。エコール・ド・パリ展に日本代表出品。総督府主催建国2600年展で2600年賞。台湾鉄道局買い上げ。42年総合美術扶桑会創立。阪急百貨店で個展。51、59、63年三越で個展。56年外務省依頼により天皇誕生日に作品贈呈。56年中之島図書館に作品寄贈、ゆういち名。59年スイス移住。無所属。滞欧20年。1989年没、85歳。洋画家

高橋 洋 (たかはし・よう/1958年～)

東京生れ。1983年春陽展・新人賞、89年安田火災奨励賞。87年文化庁芸術家国内研修員、松濤美術館公募展・佳作賞。90年安田火災美術財団奨励賞展。98年スペースー現代日本版画展(ティコティン美術館・イスラエル)。2000年アマドラ国際版画ビエンナーレ 受賞(ポルトガル)。03年グラ国際木版画トリエ

高橋義治 (たかはし・よしはる/1943年～1998年)

東京生れ。1943年生れ。65年東京芸術大学油画科卒、66年滞独、ミュンヘン美術院で学ぶ。69年美術院卒、オーストリア高等美術研究員スーチェックに版画を学ぶ。73年にミュンヘン大学の講師、74～81年オーストリアの私立学校、ザルツブルグ・カレッジ絵画、版画教授。81～84年ザルツブルグ・カレッジのワークショップ所長。93年ザールランド国際サマーアカデミー水彩クラスのヘッド。73年から、ザルツブルクの芸術家が創立し、スーチェックが名誉会長を務めた芸術家団体、“Gruppe 73”メンバー。独で没、55歳。版画家

高橋力雄 (たかはし・りきお/1917～1998年)

東京生れ。1949年恩地孝四郎に師事。51年日本版画協会展出品、52年日本版画協会展根市賞、準会員賞。62年渡米。64年個展(ミチュー画廊、NY)、65年カリフォルニア・インスティテュート・オブ・ジ・アート中退、個展(コアラ画廊・ロス)。84年ザイロン国際木版画トリエンナーレ・1等賞。96年日本版画協会名誉会員、個展(須坂版画美術館・長野)1998年『高橋力雄版画作品集』刊行。1998年没、81歳。版画家

高畑郁子 (たかはた・いくこ/1929年～)

千葉県生れ。1948年豊橋市立高等女学校卒。49年中村正義、平川敏夫、大森運夫らと交流し、日本画を制作。51年新制作展に入選。\*以後出品を重ねる。59年女流画家協会展で女流画家協会賞。64年星野眞吾と結婚。74年新制作協会から日本画部が独立し、創画会が発足、81年会員。76、78、80年創画展で創画会賞。87年愛知県文化選奨文化賞受賞。2003年、個展(豊橋市美術博物館)。09年豊橋文化賞受賞。日本画家

高島華宵 (たかばたけ・かしょう/1888～1966年)

愛媛県生れ。1903年京都市立美術工芸学校日本画科入学、3年で転校、06年関西美術院で洋画を学ぶ。09年寺崎広業に師事。以後、独学で挿絵を続ける。11年「中将湯」の商標、「中将姫」を制作。大正に入り講談社出版雑誌。単行本。新聞挿絵に腕を振るう。59～61年渡米。65年「華宵会」発足、66年上野松坂屋で回顧展。東京で没、78歳。挿絵画家、日本画家、洋画

高島達四郎 (たかばたけ・たつしろう/1895～1976年)

東京生れ。1914年慶応義塾大学中退、本郷洋画研究所入所。19年光風会入選。21～28年渡仏。30年独立美術協会創立会員。1952年毎日芸術賞。55年日本国際美術展で佳作賞。64年武蔵野美術大学教授。76年日本橋高島屋で回顧展。東京で没、80



歳。洋画家、美教

高島達四郎 II (たかばたけ・たつしろう/1895～1976年)

東京生れ。1913年東京高等師範附属中学校卒。16年慶応義塾大学理財科中退。本郷洋画研究所に通う。19年第7回光風会展に初入選。21年第3回帝展に出品。渡仏。22年アカデミー・ランソンでモーリス・ドニラに学ぶ。25年第6回帝展に出品。サロン・ドートンヌ、サロン・デ・ザンデバンダンに出品。28年帰国。第15回二科展に出品。29年梅原龍三郎のすすめで第4回国画会展に出品、会友に推挙。30年第5回国画会展で会員。聖徳太子奉賛美術展に出品。独立美術協会を創立、創立会員。51年東京藝術大学講師(53年まで)。55年第3回日本国際美術展で佳作賞。62年国際形象展の創立同人。64年武蔵野美術大学教授。65年毎日美術賞受賞作家シリーズ・高島達四郎展開催。76年6月26日没、享年80歳。(佐)洋画家、美教

高島陽雲 (たかばたけ・ようん/1923～1976年)

大阪生れ。1945年広島原爆投下を体験。仏像彫刻。油画で地獄絵を描き続けた。71年完成。「その瞬間」を広島市に、72年「原爆炸裂」を長崎市に寄贈。75年700号の「原爆1号」を携え渡米、国連本部で展示。その間数千枚の「地獄絵」を描き続けた。大阪で没、52歳。洋画家、彫刻家

高羽 敏 (たかば・びん/1902～1982年)

徳島県生れ。1918年松原三五郎の天彩画塾で油画を学ぶ。20年本郷洋画研究所に学ぶ。西田武雄らの指導で銅版画を始め、39年文展、40年紀元2600年奉祝美術展に入選。40年大阪阪急百貨店で「エッチング作品展」を開き、日本エッチング版画協会会員。高羽図案所を経営。51年一陽会で出品。その後は無所属。82年没、80歳。洋画家、版画家

高林和作 (たかばやし・わさく/1900～1968年)

堺市生れ。1923年早稲田大学文学部英文科卒。信濃橋洋画研究所に学ぶ。27年渡仏、アカデミー・スエドアのワエキロ教室で学ぶ、サロン・デ・テュルリーに出品。30～65年帰国京都絵画専門学校助教授、教授。美術団体に属さず、個展中心に発表。67年梅田画廊で個展。優れた色彩画家。京都で没、68歳。洋画家、美教

高原洋一 (たかはら・よういち/1944年～)

岡山市生れ。1968年武蔵野美術大学産業デザイン科卒。71年鐘淵紡績株式会社意匠研究所退社。77年現代日本美術展・第16回国立国際美術館賞、第17回佳作賞、京都国立近代美術館賞、栃木県立美術館賞。80年個展(シロタ画廊・銀座、89、94年)、日本国際美術展(東京都美術館、京都市美術館、第14、16回)、兵庫県立近代美術館賞。87年西武美術館版画大賞展・優秀賞。89年和歌山版画ビエンナー

レ・買上賞、ソウル国際版画交流展(ファインアートセンターギャラリー・韓国)。2008年「高原洋一 風景のメタモルフォーシス」(奈義町現代美術館、岡山市デジタルミュージアム、倉敷市立美術館)開催。09年岡山県文化賞、山陽新聞社賞、マルセン文化振興財団文化大賞。版画家

高間惣七 (たかま・そうしち/1889～1974年)

東京生れ。白馬会洋画研究所に通う。1916年東京美術学校西洋画科選科卒。14年大正博覧会で一等賞。18、20、21年文展、帝展で特選。24年槐樹社創立会員。32年東光会創立会員。39年主線美術協会創立会員。55年独立美術協会会員。59年日本国際美術展で優秀賞。横浜で没、85歳。洋画家

高松次郎 (たかまつ・じろう/1936～1998年)

東京生れ。1959年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒。61年「ハイレッド・センター」を結成。64年「影」シリーズ制作。65年シュル美術賞展で1等賞。65年長岡現代美術館賞展で優秀賞。72年東京国際版画ビエンナーレで国際大賞。東京で没、62歳。国立国際美術館で個展。洋画家、版画、立体、

高松甚二郎 (たかまつ・じんじろう/1902～)

栃木県生れ。青木繁の絵に興味を持つ。宇都宮中学校卒業後、前田寛治研究所に学ぶ。1931年独立展出品。38年同展協会賞。糸園和三郎らと四軌会を結成。32年ブルミエ洋画展、34年飾画を結成。38年創紀美術協会結成会員。39年美術文化協会結成会員。77年飾画展を復活。没年不詳。洋画家

高間筆子 (たかま・ふでこ/1900～1922年)

東京生れ。兄は高間惣七。虎ノ門女学校卒。川端画学校に学ぶ。1920年より朱葉会に出品。東京で没(自死)、21歳。窪島誠一郎が研究調査、キド・アイ・ラック・アート・ホールに高間筆子資料展示室、著作も発刊。洋画家

高見乾司 (たかみ・けんじ/1948年～)

大分県生れ。1986年、湯布院空想の森美術館を設立・運営し、地域づくりと連携した活動を行なう。2001年に同館を閉館。2007年、宮崎県西都市に九州民俗仮面美術館を開館。九州の民俗仮面と神楽の研究をライフワークとし、収集した仮面のうち90点は九州国立博物館に収蔵された。美術館長

高見修司 (たかみ・しゅうじ/1950～1989年)

兵庫県生れ。中央大学中退。父の死後、衝撃的に絵を描きはじめる。一時南太平洋のボナペ島に住むが、体調をこわして帰国。80年から新潟に住み、水彩画を始める。1982～84年羊画廊(新潟)、88年中野紅画廊(東京)で個展。1989年没、39歳。91年『少年の夢高見修司画集』(高見修司画集刊行委員会)刊行。羊画廊、ゆーじん画廊(東京)遺作展。2000年新潟絵屋で遺作展。洋画家、水彩

秋画廊で滞欧作展。77年没、69歳。洋画家、版画

**高見清一** (たかみ・せいいち/1912～1964年)

延岡市生れ。旧制延岡中学校で有田四郎に学び、東京美術学校に進学した。卒業後は東京の満洲映画協会に入社し映画制作に道を歩んだ。新京国展に佳作入選。戦後は開拓者として都農に入植し制作した。1964年没、52歳。洋画家、映画

**高光一也** (たかみつ・かずなり/1907～1986年)

金沢市生れ。1925年石川県立工業学校図案絵画科卒。37年新文展で特選。47年日展で特選。63年新日展で文部大臣賞。39年聖戦美術展で陸軍大臣賞。46年光風会会員。51年～金沢美術工芸短期大学教授、55～69年金沢美術工芸大学教授。53年金沢市文化賞。54～55年渡欧。71年日本芸術院賞。79年日本美術院会員。再三渡欧。71年日展理事のち顧問。84年石川県立美術館で回顧展。86年文化功労者。石川県で没。79歳。洋画家、美教

**高宮一栄** (たかみや・かずえ/1902～1980年)

福岡県生れ。福岡県立門司高等女学校卒。岡田三郎助に師事。1937年第1回新文展で特選。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。42年第29回光風会展で光風会員。43年第6回新文展に無鑑査出品。44年戦時特別展に出品。50年第6回日展で依嘱出品。44年光風会展で岡田賞。後、光風会評議員、日展会員。80年7月31日東京で没、享年78歳。(佐)洋画家

**高村光雲** (たかむら・こううん/1852～1934年)

江戸生れ。高村光太郎、高村豊周(とよちか)の父。高村東雲に木彫をまなび、東雲の姉の養子となる。1877年内国勸業博で東雲の代作「白衣観音」が最高賞。東京美術学校教授。文展審査員。1919年帝国美術院会員。作品に「楠公像」「西郷隆盛像」「老猿」。東京で没、82歳。明治・昭和時代前期の彫刻家

**高村光太郎** (たかむら・こうたろう/1883～1956年)

東京生れ。高村光雲の長男。東京美術学校卒。ロダンの影響を受け、1906年欧米留学。帰国後彫刻、絵画の制作。パンの会に参加して美術評論。42年詩集「道程」で芸術院賞。戦後、連詩「暗愚小伝」で戦時中の自己責任を追及。詩集「智恵子抄」。1956年没、73歳。東京出身。彫刻家、詩人、洋画家

**高村真夫** (たかむら・しんぷ/1876～1954年)

長岡市生れ。1899年上京、小山正太郎の不同舎に学ぶ。1902年太平洋画会創立会員。07年東京府勸業博覧会で三等賞。07、08、09年文展で三等賞。14～16年渡欧。太平洋画会研究所で教えた。28年帝展無鑑査。太平洋画会理事、太平洋美術学校総務など歴任。美術批評。長岡市で没、78歳。洋画家、美教、版画

**高森捷三** (たかもり・かつぞう/1908～1977年)

石川県生れ。1925年上京、林重義に師事。26年二科展に入選。日本水彩画会展に出品。28年「一九三〇年協会」洋画研究所に入り、翌年出品。30年日本プロレタリア美術家同盟に加盟。37年～一水会展に出品。51年一水会会員。63年渡欧。64年文藝春

**多賀谷伊徳** (たがや・いとく/1918～1995年)

福岡県生れ。1938年寺田政明を頼り上京。39年独立美術協会展に入選。40年美術文化展に出品。44年美術文化賞。46年美術文化協会会員。47年日本アヴァンギャルド美術家クラブに参加。54年渡欧、サロン・デ・レアリテ・ヌーベル展出品。現代日本美術展、日本国際美術展などに出品。55年二科展に出品。61年二科会を退会后、郷里で制作。74年タガヤ美術館開館。八幡市で没、77歳。洋画家

**高谷重夫** (たかや・しげお/1901～1972年)

倉敷市生れ。金光中学校に学ぶ。1938年東光会展に出品。41年東光会会員。戦後、52年光風会に入り、63年光風会会員。大潮会会員、審査員。日展にも出品。個展でも多く発表。72年没、71歳。洋画家

**高柳 裕** (たかやなぎ・ゆたか/1941年～)

東京都生れ。1960年東京芸術大学に入学、山口薫に師事。版画は駒井哲郎に銅版画を学ぶ。66年同校大学院修了。64年シェル美術賞展で佳作賞。76年版画グランプリで大賞。78年文化庁派遣芸術家在外研修員として米、仏、英に滞在。85年シルクスクリーンを制作。98年青梅市立美術館で個展開催。版画家

**鷹山宇一** (たかやま・ういち/1908～1999年)

青森県生れ。旧制青森中時代棟方志功らの青光画社に参加。1930年日本美術学校洋画科卒。30年二科展に版画で入選、45年二科会会員、のち名誉理事。39年美術文化協会創立に参加。東京美術学校教授。66年東郷青児賞。90年七戸名誉町民。94年青森県・七戸町に町立鷹山宇一記念美術館が開館。東京で没、90歳。洋画家、版画

**高山辰雄** (たかやま・たつお/1912～2007年)

大分市生れ。1930年大分県立大分中学校を卒業後上京。荻生天泉、小泉勝爾に手ほどきを受ける。1931年東京美術学校日本画科入学、36年同校卒。33年松岡映丘の画塾木之華社に入門。37年映丘門下の杉山寧らが結成した瑠爽画社に参加。41年には自らが中心となって一采社を結成。46年日展で特選、49年特選。51年日展で白寿賞。60年新日展出品作日本芸術院賞。65年新日展出品作で芸術選奨文部大臣賞。一采社、芝英会、未更会などに作品を発表。66年旧一采社のメンバーを中心に始玄会を結成。70年日本芸術大賞受賞。72年日本美術院会員。73年日展常務理事、75年理事長。75同年中国人民対外友好協会に招かれ中国を訪問。82年文化勲章。82年年東京芸術大学客員教授。90年皇居の豊明殿を飾る屏風製作。95年パリで高山辰雄展を開催。2007年没、95歳。日本画家

## 高山 恒 (たかやま・ひさし/1978年～)

京都精華大学芸術学部建築分野卒。埼玉県在住。個展 2004年「無限妄想」小野画廊, 05年「身体新構築1」, 06年「身体新構築2」東京小野画廊, 07年「妄想的身体構造」東京・exhibit Live & Moris 08年「DAYDREAMING」東京 The art Complex Center of Tokyo。画家

## 高山通雄 (たかやま・みちお/1903～1994年)

二紀会創立会員、委員。戦争画も描いた。米国のロサンゼルスで活躍。1994年没、91歳。洋画家

## 高山良策 (たかやま・りょうさく/1917～1982年)

山梨県生れ。1931年上京、独学。41年日本クロッキー研究所や福沢一郎絵画研究所に通う。46年美術文化協会展出品。47年前衛美術会結成に参加。51、52年日仏現代美術展で二等賞。大映、東宝、電通、円谷プロの小道具、特撮用怪獣、舞台造型製作。82年没、65歳。2001年練馬区立美術館「高山良策の世界展」が開催。洋画家、映画小道具、怪獣作家

## 田川寛一 (たがわ・かんいち/1900～1988年)

大阪生れ。1917年赤松麟作の画塾に入門。1927年二科展入選。32年艸園美術研究所設立に参加。全関西洋画協会展に出品、32年同会会員。25年赤松洋画研究所講師。戦後、行動美術協会に参加、同会会員。59年大阪市立美術研究所講師。大阪で没、87歳。洋画家、美教

## 田川謹次 (たがわ・きんじ/1909～1990年)

大阪生れ。赤松洋画研究所で田川寛一の指導を受ける。1926年大石輝一らと「艸園会」を結成。31年新興美術協会創立(春陽会の姉妹団体)に参加。36年春陽会賞。47年春陽会会員に推挙。42、43年文展入選。48年汎美術協会を創立。大阪府・市文化功労者。90年没、80歳。洋画家

## 田川 憲 (たがわ・けん/1906～1967年)

長崎市生れ。1925年長崎市立商業卒業後上京、宮内省主馬寮に務めた。26年恩地孝四郎に出会い創作版画を志す。28年川端画学校に入学、33年帰郷、長崎県立長崎図書館で版画個展開催。34年「詩と版画の会」結成。34年「新板長崎風景」を刊行。「長崎東山手十二番地」「十字架鮫」。40年日本版画協会会員。41年上海移住、「上海版画協会」「上海版画研究所」設立。終戦後は長崎を拠点に制作。49年「原爆遺跡・浦上天主堂」を出版。没後に「長崎東山手十二番館」が刊行。56年長崎創作版画の先駆として長崎県文化功労者表彰、長崎新聞文化賞。1967年没、60歳。版画家

## 田河水泡 (たかわ・すいほう/1899～1989年)

東京生れ。1歳で母に、15歳で父に死別し伯母のもとで育てられ、従兄の高見澤遠治が浮世絵版画家であったところから、その仕事を手伝ううち絵に興味を持ち油絵を描き始める。1922年日本美術学校図案科に入学。23年村山知義らを中心とする前衛美術運動 MAVO に参加、25年日本美術学校を卒。高澤路

亭の名で新作落語の台本作家として活躍。27年漫画にも筆を染めるようになり、31年講談社の雑誌『少年倶楽部』新年号に「野良犬黒吉」を主人公とする漫画「のらくろ」を発表。41年まで連載を続けた。61年から雑誌『丸』に「のらくろ中隊長」の連載を始め、のらくろの後日譚を描いた。67年『のらくろ漫画全集』の刊行、80年の「のらくろ喫茶店」まで、大戦をはさんで約半世紀の間、同一のキャラクターを描き続けて人気を保った。このほか「凸凹黒兵衛」「蛸の八ちゃん」などの漫画でも知られる。また、関野準一郎にエッチングを学び51年東京ビエンナーレ展に入選、一線美術展にも出品、59年同会委員。児童漫画の礎を築くとともに現代漫画の育成にも寄与した。夫人は評論家小林秀雄の妹で文芸評論家の高見澤潤子(本名富士子)。神奈川県で没、90歳。漫画家、「のらくろ」で著名

## 田川豊山 (たがわ・ほうざん/1881～1958)

大分県生れ。大分県師範学校在学中、藤原美治郎に画の手ほどきを受ける。東京美術学校教授の岡田秋嶺に師事。文検に合格、福岡県立中学校修猷館、長崎県立中学校嶋学館に勤務。1912～14年大分県師範学校で教鞭を執る。松本古村らと全国国画教育大会を開くなど美術教育の発展にも尽くした。日本画家、美術教育

## 滝 和亭 (たき・かてい/1829～1901年)

江戸生。名は謙、字は子直、別号に蘭田。大岡雲峰・鉄翁祖門に学ぶ。帝室技芸員。1901年没、72歳。南画家

## 滝川太郎 (たきがわ・たろう/1903～1971年)

松本市生れ。1920年に上京、太平洋画会研究所に学ぶ。石井柏亭に師事、書生。27年二科展に出品。30年渡仏、40年帰国。松本駅前前の農業会館で帰朝記念展。43年一水会展で岩倉具方賞。46年一水会会員。逗子市で没、67歳。洋画家、版画

## 滝川昆堂・美一 (たきかわ・びどう、よしかず、ひいち/1914～1980年)

新潟県生れ。1928年渡辺長男に師事し、36年構造社彫塑研究所に入り斎藤素巖に学んだ。39年新文展入選。51年日本陶彫会に所属し、同会副会長。53年二紀会の同人、58年同会彫刻部委員、76年二紀展で宮本賞。主な作品は「謙信公像」(69年、上越市春日山城址)「M画伯頭像」(76年)「花かんざし」「鎮魂像」(79年、三峰山秩父の宮記念館)「武者群像」(80年)など。東京で没、66歳。彫刻家

## 瀧口綾子 (たきぐち・あやこ/1911～1998年)

美術文化協会創立会員。瀧口修造夫人 86歳。洋画家

## 瀧口修造 (たきぐち・しゅうぞう/1903～1979年)

富山県生れ。1931年慶応義塾大学英文科卒。美術評論家。シュルレアリスムの理論的支柱。47年日

本アヴァンギャルド美術家クラブ結成。50年より美術評論を執筆。線描デッサンやデカルコマニーの絵画作品制作。58年ヴェネツィア・ビエンナーレ展日本代表渡欧。59～62年美術評論家連盟会長。「近代芸術」「今日の美術と明日の美術」、詩集「瀧口修造の詩的実験 1927～1937」、訳書ブルトン「超現実主義と絵画」。全集「コレクション・瀧口修造」(全 13 巻・別巻 2 みすず書房)。1979年没、75歳。評論家、詩人、洋画家

瀧口修造 II (たきぐち・しゅうぞう/1903～1979 年)

富山県生れ。富山中学卒、1923年慶応大学予科に入学、31年同大学英文科卒。在学中の26年山藤同人となり、この頃文学部教授であった西脇順三郎を知る。30年には親交のあった仏詩人アンドレ・ブルトンの「超現実主義と絵画」を翻訳、これが日本のシュルレアリスム美術書の草分け。32年から5年間PCL映画製作所(東宝の前身)に勤務、36年瀧口修造が中心となって難波田龍起、末松正樹らとアヴァンギャルド美術家クラブを結成。39年日本大学芸術科講師として近代美術論、現代写真芸術論を講じる。現代西洋、ことにフランスの現代詩と美術を研究紹介し、とくにシュルレアリスム芸術をはじめ前衛芸術運動の推進に尽力、40年に世界初のミロ論を書いた。38年戸坂潤の要請で「近代芸術」を出し、41年政府の前衛美術弾圧により検挙され、8ヶ月間拘留され起訴猶予。この逮捕で戦前の日本のシュルレアリスムは終息に向かった。国際文化振興会嘱託となり、戦後は50年まで日米通信社参与。51年読売アンデパンダン展開催、若い前衛的な詩人、美術家、音楽家と「実験工房」を結成、タケミヤ画廊企画展に参画し、前衛的な現代美術の展開に大きな刺戟をあたえた。51～58年タケミヤ画廊にて201回の企画展を開催、タケミヤ画廊は画材店竹見屋からの提案を受けて会場使用料無料で若手作家の発表の場を設けた。野見山曉治、河原温、草間彌生ら。池田満寿夫、加納光於はタケミヤ画廊でデビュー。52年国立近代美術館開設に際し運営委員。53年国際アートクラブ結成参加。58年ヴェネツィア・ビエンナーレ展日本代表として渡欧し、ブルトンやダリらと会見。59～62年美術評論家連盟会長。60年最初の個展「私の画帖から」を南天子画廊で開催、翌年第2回目の個展を大阪北画廊で、62年第3回個展「私の心臓は時を刻む」を南画廊で催す。64年マルセル・デュシャン語録私家版刊行の契機となるローズ・セラヴィの名前を架空のオブジェの店のためにあたえられる。65年千円札事件懇談会に加わり、翌年特別弁護人となり、また同年来日中のミロに初めて会う。67年「詩的実験」を刊行、翌年マルセル・デュシャン急死の一ヶ月後にあたる11月語録が

完成する。70年ミロとの詩画集「手づくり諺」完成。73年マルセル・デュシャン大回顧展に招待され渡米。75年アントニオ・タピエスとの詩画集「物質のまなざし」、78年ミロとの詩画集「ミロの星と共に」を完成。東京で没、75歳。瀧口の所持していた一万点に及ぶ美術資料は、多摩美術大学、瀧口修造文庫に保存、作品と遺品の多くは富山県美術館に瀧口修造コレクションとして収蔵。評論家、詩人、洋画

滝沢邦行 (たきざわ・くにゆき/1888～1964 年)

曲亭馬琴の子孫。1913年日本水彩画会創立発起人37名の一人、以後も会務に協力。のち名誉会員。文展に入選。日本各地の桜の花を写生、総合図鑑を著した。染色図案家。飯能美術協会の設立に参加。埼玉県で没、76歳。水彩画

滝沢具亭 (たきざわ・ともゆき/1941 年～ )

長野県生れ。1964年東京芸術大学美術学部日本学科卒、66大学院修了。新制作協会展、創画展に出品。67年法隆寺金堂壁画模写。東京芸術大学の中世オリエント調査団に参加。77年創画会会員。日本画家

瀧下和之 (たきした・かずゆき/1975 年～ )

熊本県生れ。1999年東京藝術大学美術学部デザイン科卒。2001年東京藝術大学大学院修了。03年熊本市現代美術館で「桃太郎図」展を開催。07年、cope Miami 2007(マイアミ)や、アジア・アート・フェア(ニューヨーク)に出展。09、11年画集(求龍堂)刊行。10年アートフェア東京出展。洋画家、フィギュア

滝 純一 (たき・じゅんいち/1944 年～ )

長野県生れ。1968年東京教育大学大学院絵画専攻修了。二紀展で受賞を重ね、同人のち委員。安井賞展に入選。69年福岡教育大学に赴任し、教授等を歴任。76年イタリア A・A・I に、82年オーストリア・ウィーン美術学校に留学。2003年福岡市文化賞。現代の具象絵画界を代表する一人で、グループ展、個展も多数。洋画家、美教

瀧 精一 (たき・せいいち/1873～1945 年)

東京生れ。1897年東京帝国大学文科大学卒、同大学大学院入学美学を専攻した。東京美術学校、京都帝国大学、東京帝国大学等の講師を経て1914年東京帝国大学教授に任ぜられ、美術史学の講座を担当した。15年文学博士。東大に於ては概説として日本美術史を講じ、特殊講義として支那絵画史、印度仏教美術等を講述し、美術史学の基礎を確立した。20年東宮御学問所御用掛を拝命し今上陛下に美術史

を御進講申上げた。27年東京帝国大学評議員となり、同年同学文学部長。34年定年退官。古社寺保存会、国宝保存会の委員となり、重要美術品等調査会の創設に尽力し、その委員となった。法隆寺の保存事業についても企画するところがあり、壁画の模写も実行に移された。印度アジャンタ石窟寺院の壁画やブリテイッシュ・ミュージアムの燉煌発掘の壁画の模写を作らしめた。また美術品の科学的研究のために古美術自然科学研究会を起し科学者に委嘱して諸種の研究業績を挙げしめた。又対支文化事業として設立された東方文化学院のために尽瘁し、39年にはその理事長となり又院長に挙げられた。生涯の業績中最大のものは、雑誌「国華」の刊行であつて、01年その編集に初めて携つて以来、その逝去に至る迄岡倉天心等創刊者の意を継承して、その発展に努力し、自ら編集の主軸となると同時に多くの論文、解説等を発表した。自ら編集の主軸となると同時に多くの論文、解説等を発表した。これはわが美術史学の発達に多大の貢献をなしたばかりではなく、美術愛好者を啓発し、又海外諸国へ東洋美術を紹介するに、大きな役割を果たしたのである。その著書としては、生前自ら選択して編んだ「瀧拙庵美術論集日本篇」(昭和18年座右宝刊行会)があり、その他「文人画概論」(大正11年改造社) Japanese Fin Art (昭和6年富山房)があり、その編集に成るものに「日本古美術案内」(昭和6年大和絵会)がある。昭和15年 国華刊行による東洋美術文化宣揚の功績に対し朝日文化賞。45年叙勲2等授瑞宝章。東京で没、71歳。美術史家、美教

#### 滝瀬源一 (たきせ・げんいち/1918年～)

東京生れ。1953年より毎年二紀展に出品、陶彫家、イラスト原画にスクラッチボードを用いた挿絵画家。スクラッチボードとは厚紙に黒インクが塗布された画材。表面を針先で削ることで白い線が現れ、版を作らず小口木版のような繊細な線の絵柄が完成。67年「ジュール・ヴェルヌ全集」(集英社)の挿絵において、この画材を取り入れ。「週刊大衆」や「小説推理」などの大衆雑誌、新聞小説の挿絵、千葉真一主演映画のポスターなど、主に60年代から70年代にかけて数多くのイラストを手がけてきました。スクラッチボード作品を通し、60・70年代大衆文化が見られる。立体、彫刻、挿絵画家、イラスト

#### 滝平二郎 (たきだいら・じろう/1921～2009年)

茨城県生れ。県立石岡農学校卒。卒業後は木版画へ。1942年造形版画協会出品。55年上京、木版画制作のかたわら、装幀や挿画など本格的に始める。68年国際版画ビエンナーレ展招待出品。70年講談社出版文化賞ブックデザイン部門(「花さき山」)、74年

モービル児童文化賞、87年絵本にっぽん賞。絵本『八郎(福音館書店)』『モチモチの木(岩崎書店)』(すべて斎藤隆介・作)。日本美術会委員、日本児童出版美術家連盟会員、日本きりえ協会代表委員。版画家・きりえ作家・絵本画家。千葉県で没、88歳。版画家、きり絵、絵本、挿絵

#### 滝田ゆう (たきだ・ゆう/1931～1990年)

東京生れ。國學院大學文学部中退。1949～50年漫画家・田河水泡の内弟子。56年東京漫画出版社の貸本漫画の世界を中心に執筆を開始、漫画家デビュー。59年家庭漫画の『カクン親父』(東京漫画出版社)を発表し、初のヒット。67年『月刊漫画ガロ』(青林堂)に組織の都合に振り回される男を描いた『あしがる』を発表し、つげ義春、林静一ら同誌の掲載陣の仲間入りを果たす。『寺島町奇譚』、『滝田ゆう落語劇場』。1974年第20回文藝春秋漫画賞。87年日本漫画家協会賞大賞。90年勲四等瑞宝章。漫画家、エッセイスト

#### 瀧 悌三 (たき・ていぞう/1931年～)

東京生れ。1955年東京大学文学部美学美術史学科卒。日本経済新聞社入社、文化部に勤務、編集委員として美術を担当、92年退社。『二科70年史』の編纂など美術史の研究、美術評論に活躍。著書：『前田寛治』日動出版部 1977、『一期は夢よ鴨居玲』日動出版部 1991、『日本近代美術事件史』東方出版 1993、『ほんねはんぶん』生活の友社 Mado 美術文庫 1993、『芸苑雑事記』生活の友社 1998、『日本の洋画界七十年 画家と画商の物語』日動画廊編 日経事業出版社 2000、『濤標記』生活の友社 2013(雨宮治郎の一族を描く)。美術評論家、ジャーナリスト

#### 田口掬汀 (たぐち・きくてい/1875～1943年)

秋田県生れ。万朝報、大阪毎日、東京日日の記者、美術一般に造詣深く創作評論で知られた。美術雑誌中央美術を創刊し主宰、1916年金鈴社の結成に力を尽した。同社が華々しい活躍をして当時の日本画壇に大きな影響を与えた。後、東京府美術館常議員。田口省吾は子息。1943年没、68歳。金鈴社(きんれいしゃ)は、大正時代の美術団体。会員は、吉川靈華、結城素明、平福百穂、鏑木清方、松岡映丘の5名。7年弱、短い団体、画壇に清らかな音色を響かせた。評論家、美雑誌社

#### 田口省吾 (たぐち・せいご/1897～1943年)

秋田県生れ。父は田口掬汀。1921年東京美術学校西洋画科卒。安井曾太郎に師事。29～32年渡仏、留学。主に二科展に出品、32年二科会会員。32年

二科展に滞欧作を特別出陳。好んで群像を描いた。  
43年没、46、47歳。洋画家、版画

**田口雅巳** (たぐち・まさみ/1936～2010年)

東京生れ。神奈川県立鎌倉高等学校卒。公募団体展(自由美術展ほか)・グループ展に出品。創作活動を続ける。1984年無所属、個展を中心に発表。日本的庶民性の強いテーマを主にユニークな現代美術の創造で注目される。日本美術家連盟会員。2010年没、74歳。洋画家

**田口安男** (たぐち・やすお/1930年～)

いわき市生れ。1954年東京芸術大学美術学部油画科卒。59年求龍堂画廊で個展。64年安井賞。68～69年国立ローマ中央修復研究所に留学、バルディ教授に金地背景テンペラ画を学ぶ。78年「黄金地背景テンペラ画の技法」発刊。83年池田20世紀美術館で個展。東京芸術大学教授。洋画家、テンペラ

**田口貴久** (たぐち・よしひさ/1953年～)

豊川市生れ。1976年名古屋芸術大学美術学部卒、78年愛知県立芸術大学院美術専攻科修了。83～95年アッサイ21展(愛知県美術館等)。名古屋画廊で個展。94～95年渡仏。2004年網走市立美術館で個展。立軌会同人、名古屋芸術大学教授。洋画家、美術教

**宅間 裕** (たくま・ひろし/1941～2003年)

甲府市生れ。貴石彫刻の第一人者である宅間正一の長男。高校卒業後、宅間宝石彫刻研究所に入り父に貴石彫刻を学ぶ。その後、山梨美術協会会員、日本工芸会会員。貴石工芸の分野で活躍を続けた。山梨美術協会奨励賞、山梨県芸術祭美術部門奨励賞、貴石工芸創作展最優秀賞。水晶彫刻新作展では知事賞、市長賞、通産大臣賞。日本伝統工芸展にも出品を続け、審査委員。父正一亡き後は、宝石彫刻研究所の代表として後進の指導にも尽くした。伝統的な技術に現代的な感覚の意匠を取り入れた象嵌作品に特徴がある。工芸家、彫刻家

**匠 秀夫** (たくみ・ひでお/1924～1994年)

北海道生れ。1944年京都帝国大学文学部選科～48年京都大学中退、北海道大学文学部史学科に入学、57年同大学大学院修了。河北倫明著「青木繁一生涯と芸術」(48年)に啓発されたり、土方定一に方向性を示唆され、本格的に日本近代美術史を専攻。64年「日本近代洋画の展開」刊行、同書は美術と文学との関わりに注目、独自の史観を盛った斬新な日本近代洋画史論とした。68年「三岸好太郎－昭和洋画史

への序章』、69年『中原悌二郎』発刊。68年神奈川県立近代美術館主任学芸員、数多くの企画展に関わり、日本現代美術、西洋近・現代美術へも研究の領域を広げた。76年神奈川県立近代美術館副館長、81～85年同館長。中原悌二郎賞審査委員、安井賞選考委員、現代日本美術展審査委員、高村光太郎大賞審査委員、日本国際美術展選考委員。杉野女子大学、法政大学文学部、札幌学院大学、愛知県立芸術大学など非常勤講師。85年茨城県参与(新美術館担当)委嘱、88年茨城県立近代美術館開設と同時に館長。執筆活動は晩年に至るまで極めて旺盛で、その全容は、残後一周忌にあたり上梓された「匠秀夫 年譜・著作目録」(陰里鉄郎編)に詳しい。同誌から、著書(含共著、編著等)のみを以下に掲げる。東京で没、69歳。(引用 東文研) 評論家、美術館長

**田栗テル** (たぐり・てる/1911～1983年)

東京生れ。日本女子大学卒、1961年朱葉会会員。71年一水会会員。1983年没、72歳。洋画家

**武井吉太郎** (たけい・きちたろう/1902～1964年)

長野県生れ。早稲田大学卒。武井武雄に師事。1945年双燈社版画部で学ぶ。家業の鉄工所を営みながら、創作版画に打ち込む。56年日本版画協会会員。「仏頭」と題する版画は米国版画愛好家や美術館から注目された。64年没、62歳。版画家

**武井 清** (たけい・きよし/1931年～)

東京生れ。1953年中央大学卒。73年サロン・デ・ボザール展特選。81年光陽会奨励賞。78年以降個展開催(さえずり画廊、小田急百貨店、銀座三越、渋谷東急)98年日本山岳画協会会員、代表幹事。日本山岳会会員。洋画家

**武石弘三郎** (たけいし・こうざぶろう/1878～1963年)

新潟県生れ。1901年わが洋風彫塑界の先覚、長沼守敬の愛弟子として東京美術学校塑造科最初の卒業。間もなくベルギーに渡り、8年間滞留研究を続け、その間ブリュセル国立美術学校で優等生にあげられた。また当時のベルギーの世界的な巨匠コンスタンタン・ムニエを比較的早く紹介した。09年帰国、青壮年期は文展、帝展に出品したが、殊に戦後は全く発表がなく、殆んど穩棲の老後生活だった。大理石彫刻も早くから手がけ、代表作には、秩父宮登山姿や西園寺公、北白川宮、森鷗外、川端玉章らの胸像がある。鎌倉市で没、85歳。彫刻家

**武井武雄** (たけい・たけお/1894～1983年)

長野県生れ。1919年東京美術学校西洋画科卒。2

2年東京社の「コドモノクニ」のタイトル、表紙を制作絵画主任。児童文学雑誌「赤い鳥」に挿絵を描き童画に専念。24年武井武雄童画展を開催。新聞連載、画帳などで人気を集めた。27年日本童画家協会創立会員。44年日本版画協会会員。35年からハガキ大の「刊本」制作。代表作に童画集「廃園の草」、「妖精伝奇」がある。44年日本版画協会会員。46年日本童画会創立会員。59年紫綬褒章。75年日本版画協会名誉会員。75年東ドイツ、ライプツヒにて「世界で一番美しい本」としてグランプリ。東京で没、88歳。挿絵画家、童画、版画

#### 武井直也 (たけい・なおや/1893～1940年)

長野県生。1914年戸張孤雁に師事。18年院展初入選。20年東京美術学校彫刻本科塑像部卒。24～27年渡仏。ブールデルに師事。院展に滞仏作出品。32年日本美術院同人。36年日本彫刻協会創立に参加。40年没、47歳。(出典 わ眼)彫刻家

#### 竹内 清 (たけうち・きよし/1911～没年不詳)

岡山市生れ。1934年京都工芸高等学校図案科卒。関西美術院でも絵画を学ぶ。35年岡山に帰り、小林喜一郎の赤坂洋画研究所に学ぶ。30年二科展入選、50年二科会九室会会員、62年会員。抽象画を描き、坂田一男の主宰するA. G. Oにも賛助的に出品。岡山大学特設美術科ではデザインを教えた。洋画家

#### 武内桂舟 (たけうち・けいしゅう/1861～1943年)

江戸生れ。早く尾崎紅葉の硯友社の同人となり、都の花や文庫などの挿絵をかき、1894年頃から新聞の挿絵をかいた。後、博文館発行の太陽、文芸倶楽部、少年世界の挿画主任として活躍。巖谷小波と共にお伽噺界にも貢献。日露戦争の絵も多くかいたが、大正以降は挿絵木版界を退き、絹本に古代人形の精密なものを描いた。37年「御所人形図」が皇太后陛下の御用品となった。1943年没、83歳。日本画家、挿絵、版画

#### 竹内浩一 (たけうち・こういち/1941年～)

京都生れ。京都市立日吉ヶ丘高校日本画科卒、山口華陽に師事。1977年山種美術館大賞。79、88年日展特選。96年MOA岡田茂吉賞展大賞。2002～07年京都市立芸術大学教授。10年京都市文化功労者。16年大徳寺芳春院方丈に襖絵。日本画家

#### 竹内栖鳳 (たけうち・せいほう/1864～1942年)

京都生れ。1877年に四条派の土田英林に絵を習い始めた。81年同派の名手幸野楳嶺の私塾へ入門。翌年には私塾の工芸長、「楳嶺四天王」(栖鳳と都路

華香、谷口香嶠、菊池芳文の高弟4名を指す)の筆頭と呼ばれる。87年結婚し、絵師として独立。87年京都府画学校修了。89年京都府画学校に出仕し、京都の若手画家の先鋭。1900年渡欧、ターナー、コロなどから強い影響を受けた。13年帝室技芸員。名実共に京都画壇の筆頭としての地位を確立した。19年帝国美術院会員。37年文化勲章。1942年78歳。日本画家、美教

#### 武内鶴之助 (たけうち・つるのすけ/1881～1948年)

横浜市生れ。1906年白馬会洋画研究所に学ぶ。09～13年渡英。ロイヤル・アカデミー・スクールに学ぶ。ブラングウィン、トスワンにパステルはストットに影響を受ける。23年光風会会員。13年帝国ホテルで個展。28年日本パステル画会が創立、顧問。48年没、66歳。(出典 わ眼)パステル画家

#### 竹内 徹 (たけうち・とおる/1936年～)

長野県生れ。1961年長野県展奨励賞。63年一水会入選、73年石井奨励賞、74年会員推挙、80年会員佳作賞、87年会員佳作賞(2回目)。72年日展入選(以後34回入選)、85年会友推挙。2014年一水会会員努力賞、委員に推挙、15年審査員、16年常任委員。92、93、2011年紺綬褒章。93年長野県展幹事長。施設竹内徹美術館開設。2002～10年信州高遠美術館館長就任。洋画家

#### 竹内庸悦 (たけうち・ようえつ/1934年～)

東京生れ。高等学校卒、独学で絵画を習得。1956年自由美術展に出品。71年美術文化協会展で新人努力賞、会友、74年会員、安井賞展等に出品。73年パリに滞在して制作。以後、パリ・ルサロン展(銀賞)、パリ・サロン・デ・ボザール展、81年安井賞展(いわき市立美術館買上)、81年日仏現代美術展に出品。浅井忠記念展、文化庁現代美術選抜展、その他に出品。個展81回、滞欧2年、取材欧遊50回。著書水彩画集「ヨーロッパの細道」、油彩画集「流氓の風よ静かに」、デッサン集「ポーズするエヴァたち」。洋画家、水彩

#### 竹腰健造 (たけこし・けんぞう/1888～1981年)

金沢市生れ。1912年東京帝国大学工学部建築科卒。13～17年渡英、留学。15年建築士資格試験に合格。16年フランク・ルイス・エマニュエルに銅版画を学ぶ。17、18年ロイヤル・アカデミー入選。19年日本創作版画協会設立に織田一磨らと発起人。61年大阪府芸術賞。62年日本芸術院賞。日本建築協会会長。81年没、93歳。建築家、版画家

竹沢要作 (たけざわ・ようさく/1901?~1965年)

新構造社委員。日本美術家連盟会員。1965年没、64歳。洋画家

武次郎 (たけ・じろう/1913~1978年)

山形市生れ。1938年東京美術学校彫刻科塑造部卒。36年国画会展入選、37年同展に入選。47年新制作協会11回展で新作家賞、会友となり、52年会員。75年神奈川美術展から招待出品。76年東京美術学校昭和13年卒業生による東美第13年会第1回彫刻部委員。77年東京国立美術展覧会場建設の促進させる会委員。71、76年渡欧。横浜市で没、65歳。彫刻家

武田晶 (たけだ・あきら/クガ・マリフ/1931~1970年)

山口県生れ。武蔵野美術学校西洋画科を中退。58~60年読売アンデパンダン展に出品、二紀展に出品。63年二紀会展で奨励賞、同人。65年椿近代画廊で個展。1970年没、38歳。洋画家

武田幾丸 (たけだ・いまる/生没年不詳)

落合芳幾の門人。一交齋、松花楼と号す。作画期は慶応から明治の頃、風俗画や開化絵を残した。「新版猫の女郎屋」大判錦絵。「東京築地ホテル館図」大判錦絵3枚続。「横浜海岸外国館煉瓦造図」大判錦絵。「東京海運橋兜街三井組為換座西洋形五階造」大判錦絵3枚続。江戸時代末期から明治時代にかけての浮世絵師

武田好文 (たけだ・こうぶん/1923年~)

山梨県生れ。山梨師範学校卒業後、水彩画家荻野康児に学ぶ。東京芸術大学研修中に安井曾太郎に学ぶ。日本水彩画会展、日本水彩連盟展、太平洋画会展に出品。1953年太平洋画会会員、太平洋展中心に発表。欧州の古い町並みや北海の風景、日本の自然などを主な題材にして描き続けている。水彩画家

武田伸一 (たけだ・しんいち/1932~1985年)

帯広市生れ。1952年日本芸術学部芸術学科入学、54年大学中退。帯広市緑ヶ丘小学校教諭。63年帯広美術協会発足参加。64年中学校美術連盟発足参加。69年現展準会員賞、会員推挙。75年平原社美術協会会長。76年ヨーロッパ旅行。78年文化奨励賞。83年文化財審議委員会委員。帯広の森競技場前モニュメント製作参加。十勝の風土、未来を考える美術家会議展参加。84年帯広市美術関係者連絡協議会代表。能勢眞美美術展参加。1985年没、53歳。洋画家

竹田鎮三郎 (たけだ・しんざぶろう/1935年~)

愛知県生れ。1957年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒。北川民次の弟子。63年メキシコへ渡航、国立文化博物館勤務。オアハカ州立自治ベニート・フアレス大学芸術学部勤務。全国版画ビエンナーレ主催。2012年日墨学術・芸術振興功労を讃え「瑞宝中綬章」。酒田市美術館、南アルプス市春仙美術館で個展。洋画家、版画家

武田新太郎 (たけだ・しんたろう/1886~1957年)

長野県生れ。1913年東京美術学校図画師範科卒。卒業後は京都で生活。戸張孤雁の著作『創作版画と版画の作り方』に影響を受けた。28年帝展に作品、40年まで版画制作を行う。学童版画教育における先駆者の作家として、また京都創作版画協会の結成に参加するなど、関西地区における版画普及に尽力した。1957年没、71歳。版画家

武田範芳 (たけだ・のりよし/1913~1989年)

旭川市生れ。北海道立旭川農業学校林学科卒、本郷絵画研究所に学ぶ。上野山清貢、牧野虎雄に師事。本郷洋画研究所に学ぶ。1937~43年渡仏し、フランス国立美術研究所、アカデミー・グラン・ショミエールに学ぶ。38年よりル・サロン、サロン・ナシオナル、サロン・ドートンヌに出品。38年シュビジー国際展に招待出品最優秀作品賞、41年シュビジー賞受賞。42年サロン・インターナショナル、コートダジュール展佳作賞。ル・サロン展で金賞、銀賞。デュッセルドルフ、ハンブルグ、ロンドン、香港、バンコクで個展を開催。三越、小田急、西武、東武で個展。日本美術家連盟会員、フランス美術家連盟会員。78年紺綬褒章。川崎市で没、76歳。洋画家

武田史子 (たけだ・ふみこ/1963年~)

東京生れ。1991年東京芸術大学大学院美術研究科修了。92年ミヤコ版画賞展・入賞、94年スポンサー賞、96年都賞。93年第5回和歌山版画ビエンナーレ、第2回さっぽろ国際現代版画ビエンナーレ・95年スポンサー賞。96年第41回CWAJ現代版画展。99年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ(招待)2001年平成12年度文化庁買上優秀美術作品受賞。版画家

竹田道太郎 (たけだ・みちたろう/1906~1997年)

新潟県生れ。早稲田大学卒。都新聞社をへて朝日新聞社記者、美術記者。定年退社後、女子美術大学教授、武蔵野美術大学教授。近代日本の日本画家を対象として評論活動をおこなった。著書『新聞にお



ける美術批評の変遷』1955、朝日新聞調査研究室報告 社内用、『画壇青春群像』雪華社、1960、『美術記者 30 年』朝日新聞社、1962、『日本近代美術史』近藤出版社、1969、『続日本美術院史』中央公論美術出版、1976、『大正の日本画 現代美の源流を探る』朝日新聞社、1977、『近代日本画を育てた豪商原三溪』有隣新書、1981、『巨匠達が生れる迄』真珠社、1985、『安田靱彦 清新な美を求め続けた日本画家』中央公論美術出版、1988、『新聞における美術批評の変遷』ゆまに書房、2010。神奈川県生まれ。91歳。新聞美術記者、評論家(日本画)、美教

#### 竹田 稔 (たけだ・みのる/1930~2002年)

甲府市生まれ。山梨大学で堀内考恵の指導、桑原福保に師事。1955年山梨美術協会展会員。56年青樹会を結成し、毎年青樹会展出品。58年独立美術協会展入選、会友として活躍、83年脱会。個展開催やグループ展結成、山梨美術協会展を中心に発表。都市をテーマに大作を制作~草花を象徴的な画風。2002年没、72歳。洋画家

#### 武田由平 (たけだ・よしへい/1892~1989年)

岐阜県生まれ。1914年岐阜師範学校卒。20年山本鼎の農民美術研究所で学び版画を授業に取入。29年大分県中津中学校区画教師。36年日本版画協会会員。57年白日会会員のち委員。60年棟方志功らと日本版画会を設立。日本美術展覧会、日阪会に出品。中津川市民栄誉賞。1989年没、97歳。版画家、美教、版画

#### 武智 肇 (たけち・はじめ/1913年~没年不詳)

1913年生れ。札幌第一中学で同窓の小山昇、植木茂と交友、先輩の三岸好太郎に師事。33年北海道独立美術作家協会の創立に参加。三岸の死後、小山や植木とともに独立展から離れた。従軍して、沖縄へ行く途中で戦死。洋画家

#### 竹中 郁 (たけなか・いく/1904~1982年)

神戸市生まれ。兵庫県立第二神戸中学(現兵庫高校)在学中に北原白秋主催の「言葉と音楽」誌に初めて詩が掲載され、関西学院在学中に詩集「黄蜂と花粉」を刊行。1928年から2年間ヨーロッパ各地を歩き、「詩と詩論」、「四季」などに作品を発表。戦後は児童詩誌「きりん」に力を注いだ。1982年没、78歳。神戸二中では洋画家小磯良平と同級になり、画家を志すも父の反対にあい、詩作に転じている。鍋井克之とも交流があり、1951(昭和26)年に彼が座長をした風流座に竹中郁が参加した。詩人

#### 竹中英太郎 (たけなか・えいたろう/1906~1988年)

福岡県生まれ。昭和初期、探偵・怪奇小説で有名な江戸川乱歩、横溝正史、夢野久作などの挿絵画家として一世を風靡した。1935年挿絵画家から決別。元祖ルポライターと言われた長男・竹中労(1930~1991)の懇請により、1967年労の為にのみ再び筆をとり、労の制作した五木寛之原作の映画「戒厳令の夜」で使われた作品、労の著作の装幀や挿絵、沖縄島唄のレコードジャケット等の色彩画を手掛けた。東京で没、82歳。2004年「湯村の杜 竹中英太郎記念館」開館。挿絵画家、労働運動家、実業家

#### 竹中三郎 (たけなか・さぶろう/1904~1987年)

京都市生まれ。関西美術院に学ぶ。1928年上京、里見勝蔵に師事。29年二科展入選。29、30年「一九三〇協会」展入選。31年独立展入選。31~35年渡欧。39年独立展で独立賞。46年自由美術家協会再建参加、同会員。70年再渡欧。87年没、82歳。洋画家

#### 竹林薫風 (たけばやし・くんぷう/1903~1984年)

奈良市生まれ。1925年東京美術学校鑄金科教授であった沼田一雅、木彫家吉田芳明に師事。28年帝展入選、以後新文展、戦後は日展に出品を続ける。68年皇居新宮殿の宮内庁雅楽部舞楽用大太鼓の鼓縁に鳳凰、竜を彫刻、73年大阪石切神社の八道將軍像を制作。『奈良の一刀彫』(同53年刊)を著したほか、奈良工芸協会理事長、奈良木彫家協会会長。奈良市で没、81歳。彫刻家、奈良一刀彫の第一人者

#### 武林敬吉 (たけばやし・けいきち/1919~2009年)

高知県生まれ。1944年東京美術学校卒。46年寺内萬次郎に師事。53年渡仏、留学。65、66年以降も度々渡欧。67年立軌会会員。74~76年パリに居を定めヨーロッパ各地を取材。09年没、90歳。洋画家

#### 竹原嘲風 (たけはら・ちょうふう/1897~1947年)

東京生まれ。独学で絵を描き始め、新人の登竜門である巽画会に入選。1917年蔦谷龍岬の門に入る。18年文展入選。第1回帝展、第2回帝展にも連続入選。大正末の嘲風は同時代の速水御舟や小茂田青樹らの細密描写に近い筆致で動植物をよく描いた。関東大震災を機に東京郊外の長崎や江古田近辺に移住。1926年中央美術展で中央美術賞。27年中央美術展の会友。29年帝展で特選、翌年帝展無鑑査。江古田周辺の画家仲間(福田豊四郎、茨木杉風ら)と句会「みみづく会」を催した。富山県で没、50歳。日本画家

#### 竹久夢二 (たけひさ・ゆめじ/1884~1934年)

岡山県生れ。早稲田実業学校卒。新聞雑誌のコマ絵、装填、挿画、図案も手掛けた。1909年画集「夢二画集 春の巻」を刊行。12年夢二作品展覧会開催。美人画が一世を風靡する。31年渡米、渡欧。信州で没、49歳。各地に夢二美術館がある。(出典 わ眼)  
**洋画家、版画、装填、挿絵、美人画**

**竹山 博** (たけやま・ひろし/1923～1994年)

東京都生れ。1943年東京美術学校日本画科予科卒。院展、日展に入選。48年に山本丘人、上村松篁、吉岡堅二等が中心になって結成された美術団体「創造美術」に出品。65年新制作派協会、新作家賞を受け、66年会員。74年日本画部会員が創画会を結成、創画会会員。横浜市で没、70歳。**日本画家**

**武宮秀鵬** (たけみや・しゅうほう/1956年～)

東京生れ。1981年東京芸術大学美術学部絵画科油画卒。82年個展(神奈川県民ホール・ギャラリー)。85年セントラル美術館 日本画裸婦大賞展。86年セントラル美術館日本画大賞展 / 現代洋画精鋭選抜展金賞。91年現代洋画精鋭選抜記念展大賞。92年文部省検定教科書(小学校/国語)表紙絵制作。97年昭和会展日動火災賞。2006年「東美アートフェア」東京美術倶楽部。09年個展(大丸梅田店)。**洋画家、日本画、表紙**

**武本春根** (たけもと・はるね/1939年～)

大阪生れ。1968年二紀展に出品。(以降毎年出品)。71年関西二紀展で大阪市長賞。73年関西二紀展で鍋井賞。78年関西二紀展で佳作賞、二紀会同人。79年渡欧(仏、伊)83年、87年渡欧。80年昭和会展で昭和会賞。81年京展で紫賞、81年昭和会賞受賞記念個展。83年関西二紀展大阪市長賞。95年関西二紀展鍋井賞・二紀会会員、90年関西二紀展佳作賞。86、89、2000年日動画廊で個展。**洋画家**

**竹谷富士雄** (たけや・ふじお/1907～1984年)

新潟県生れ。1925年上京、一時太平洋画会研究所で学ぶ。1931年法政大学法学部卒。32～35年渡欧、シャルル・ブラン研究所に通う。37年二科展で特待賞。40年二科展で佐分賞、40～41年二科会会友。42、43年新制作展で新作家賞。43年新制作派協会会員。66年国際形象展で愛知県美術館賞。61～62年渡仏。69～76年パリのアトリエで制作。東京で没、76歳。**洋画家**

**太齋春夫** (だざい・はるお/1907～1944年)

仙台市生れ。1932年東京美術学校図画師範科卒。在学中より二科展に出品。漆芸家六角紫水のすすめ

で、卒業後から漆の研究、33年台湾総督府殖産局嘱託、漆の研究に没頭。33年漆でフィルム漆膜の技法を開発、特許を取得。漆を絵画の領域にも活用し制作。39年ニューヨーク万国博覧会漆器の衝立を出品、賞賛された。中国で没、37歳。練馬区立美術館2015年度に太齋の作品・資料100件以上寄贈。**漆芸家**

**田坂 乾** (たさか・けん/1905～1997年)

東京生れ。1928年文化学院美術科卒。石井柏亭、有島生馬らに師事。29年西田武雄にエッチングを学び、31年「太田貢・田坂乾吉郎二人展」を開催、油彩とエッチングを出品。36年日本版画協会に出品、同会会員。43年青樹社で個展。46年日本版画協会を退会し油絵に専念。46年一水会会員。55年一水会展で会員優賞。97年没、92歳。**版画家**

**田坂柏雲** (たさか・はくうん/1905～1952年)

山口県生れ。1925年高村光雲に師事した。作品は主として官展に出品、28年第9回帝展に「秋」、第10回に「花」、第11回に「地蔵尊」、第15回に「道化」を出品、戦後は第2回日展に「月」、第3回に「芳春」がある。山口県で没、46歳。**彫刻家**

**田崎延次郎** (たざき・えんじろう/1862～1941年)

1862年生れ。83年工部美術学校修業後、東京職工学校、農商務省専売特許局等に奉職し、99年陸軍助教となり1910年年休職、その他諸種の学校に図画授業を担当、晩年は謡曲に関する著述に没頭してゐた。1942年没、80歳。**洋画家、美教**

**田崎草雲** (たざき・そうん/1815～1898年)

江戸生れ。絵に長じ金井鳥洲、次いで谷文晁(1763～1840年)門下。1850年頃禅学に傾倒、草雲の号。76年内国勸業博覧会へ出品、高評。1878年草庵の白石山房を建てて。足利で弟子をとり絵画を教えた。90年皇居の杉戸図を描く。90年帝室技芸員を拝命。1898年没、83歳。1968年草雲美術館を建設。弟子に小室翠雲。司馬遼太郎の短編「喧嘩草雲」のモデル。**南画家**

**田崎廣助** (たざき・ひろすけ/1898～1984年)

福岡県生れ。福岡師範学校卒。1920年上京、坂本繁二郎に師事。26年二科展に入選。32～34渡仏。36年一水会創立から出品。38年一水会賞。39年一水会会員のち運営委員。49年より日展審査員、58年日展評議員、67年理事、78年顧問。現代日本美術展、日本国際美術展に出品。61年日本芸術院賞。67年日本芸術院会員。75年文化勲章。79年日伯美術連盟会長。東京で没、85歳。**洋画家**

田沢田軒 (たざわ・でんけん/1885～1952年)

東京生れ。中学校卒業後、軍隊、1916年東京毎夕新聞社、美術部を創設、美術部長、37年以降同社の外交部長を経て編輯局長。40年同社を辞し、北京の東亜新報社に入り東京支社駐在員として美術及び学芸方面の記事を担当。50年産業経済新聞社に入社、美術部主任。東京で没、67歳。美術記者

田沢八甲 (たざわ・はっこう/1899～1970年)

青森市生れ。白馬会葵橋洋画研究所に学び、黒田清輝、牧野虎雄に師事。1929年第10回帝展に初入選、以後15回展まで出品。第二部会展で朝日新聞社賞。30年槐樹社展に出品。33年旺玄社第1回展に新同人として出品。39年鬼面社第1回展に出品。56年第1回新世紀美術協会展に出品。70年9月2日没、享年71歳。(佐)洋画家

太佐豊春 (たさ・とよはる/1921～2005年)

宮崎県生れ。1937～40年[自由美術家協会]展、[美術作家協会]展出品。50年[瑛九]らと[宮崎自由美術クラブ]結成。53、54年県展特選。62年[井上長三郎]、宮脇公実らと新鋭作家シリーズ展、[池田満寿夫]らとNY現代日本作家展招待出品。66年南九州短期大学・南九州大学兼任教授。66～73年宮日総合美術展運営委員。2005年没、84歳。洋画家、美教

田島征三 (たしま・せいぞう/1940年～)

大阪生れ。絵本作家の田島征彦は兄。1962年多摩美術大学図案科卒。60年全国既成観光ポスター展で金賞、特別賞。62年多摩美術大学の卒業制作手刷り絵本「しばてん」出版。65年「ふるやのもり」(再話・瀬田貞二、こどものとも106号)刊行。74年「ふきまんぶく」で講談社出版文化賞。从会を結成出品。88年「とべバツタ」で絵本につぼん賞。89年同書で小学館絵画賞。2005年田島征三・谷川晃一・宮迫千鶴三人展(練馬区立美術館)。06年田島征彦と田島征三の半世紀展(高知県立美術館、他)。09年越後妻有アートリエナーレに「絵本と木の実の美術館」開館。絵本作家

田島隆夫 (たじま・たかお/1926～1996年)

埼玉県生れ。1944年旧制埼玉県立不動岡中学校卒。58年、母・さくより自機の織り方を教わり、織師。59年柳悦博に師事。60年以降白洲正子、愛染作家・菅原匠、洲之内徹らの知遇を得て、織物と書画が認められる。マエダ画廊、現代画廊、日動画廊で個展。装画、装丁も手掛。1996年没、70歳。装填、織師

田嶋宏行 (たじま・ひろゆき/1911～1996年)

東京生れ。1932年に日本大学芸術学科、34年東京美術学校卒。在学中染色工芸家広川松五郎に師事、水彩も学ぶ。40年代後半斎藤義重に抽象絵画、永瀬義郎から木版画の指導を受け制作、写真印刷の技術も得た。62年海外でも注目され国内外で展覧会。1996年没、85歳。グッゲンハイム美術館、ブルックリン美術館、ミネソタ芸術美術館、コロンビア美術館、ニューヨーク美術館五十カ所の美術館に収蔵。没後、大英博物館に百点あまりを寄贈、町田版画美術館に百数十点が寄贈。洋画家、版画、水彩

田代順七 (たしろ・じゅんしち/1900～1985年)

熊本県生れ。1928年映画看板業7年間、独学で油絵を始めた。資格を取り、神尾小学校、横島小学校で図画教師。33年東光会入選。のち名誉会員、斎藤与里に師事。34年帝展入選。東光会、日展に出品を続け、55年日展特選。60年私立高校定年退職し、田代絵画研究所を開設、後進の指導にあたった。1985年没、85歳。洋画家、美教

田代忠国 (たしろ・ただくに/1757～1830年)

宝暦7年生まれ。森田顕忠の第二子。のちに秋田藩士・田代綱紀の養子となった。初名を忠誘、ついで国綱、忠国と、周吉と称し、雲夢、金臺散人、春秋庵などと号した。忠国の名は、藩主・曙山に賜ったと伝わっている。天保元年、74歳で死去した。江戸絵師、秋田蘭学

田代利夫 (たしろ・としお/1918～1983年)

神奈川県生れ。1941年東京美術学校油画科卒。60年春陽会展で研究賞、64年会員。横浜市で没、65歳。洋画家

田代光 (たしろ・ひかる/1913～1996年)

東京生れ。1928年白日会入選。太平洋美術学校、熊岡会画道場、太平洋画会に学ぶ。富田温一郎、石井柏亭、藤田嗣治に師事。31年雑誌キングに挿絵を執筆「書家の妻」。二科展出品、一水会会員。49年東京日日新聞に掲載中の新聞小説、浜本浩作浅草の肌の挿絵が評判。1996年没、83歳。洋画家、挿絵

田代幸俊 (たしろ・ゆきとし/1940～1976年)

1940年生れ。74、75年京都ビエンナーレに出品。75年ジャパン・アート・フェスティバルに出品。75年現代日本美術展、76年日本現代美術展に出品。1976年没、36歳。洋画家

## 多田美波 (ただ・みなみ/1924～2014年)

台湾高雄市生れ。1944年女子美術専門学校師範科西洋画部卒。58年二科展入選、60年二科展特選。62年多田美波研究所を設立し代表に就任。光の反射を用いた抽象的立体造形作品を制作。アルミニウムを叩き、シワをつけ半球状型に造形した「周波数」シリーズは代表作。昭和期・平成期を代表する立体造形作家である。皇居新宮殿、帝国ホテル、リーガロイヤルホテル、在米日本国大使公邸(ワシントンD.C.)、外務省飯倉別館(公館)、河内長野市庁舎の室内・構内装飾や、壁面作品(レリーフ)を数多く手掛けた他、立体造形作品を制作。絵画、環境デザイン、工業デザイン、空間デザインでも多くの作品を発表。95年文化庁芸術祭第50回を記念しシンボルマークをデザイン。献血で贈呈される記念グラス器(冷酒グラス)は多田の作品である。88年紫綬褒章、94年勲四等宝冠章、2012年女子美術大学より芸術文化の発展に対する貢献で名誉博士号。東京で没、89歳。**彫刻家、壁画、造形、デザイナー**

## 多々羅義雄 (たたら・よしお/1894～1968年)

福岡県生れ。1911年青木繁に師事。12年上京、満谷国四郎に学ぶ。太平洋画会研究所に入った。その後本郷洋画研究所に学ぶ。1933年文展で特選。29～32年太平洋美術学校教授。30年帝展無鑑査。50年太平洋画会代表。54年光陽会創立、会長。66年光陽展出品作文部大臣奨励賞、光陽会功労賞。東京で没、74歳。**洋画家**

## 田近憲三 (たちか・けんぞう/1903～1989年)

京都市生れ。京都府立第一中学卒。田近竹邨の子。1924～29年フランスに留学、評論家エリー＝リシャールにフランス文学を学ぶ。美術史を研究し、絵画を実習。帰国後、海外の美術紹介や新人画家の発掘につとめた。著作に「ボッティチェルリ」「ユトリロ」など。美術評論家。1989年没、86歳。**美術評論家**

## 館 勝生 (たち・かつお/1964～2009年)

三重県生れ。1987年大阪芸術大学芸術学部美術学科卒。在学時泉茂のゼミ。ニュー・ペインティングの影響を受け、大きなストロークによる有機的な形象の平面作品を個展やグループ展で発表、中原浩大、石原友明、松井智恵ら「関西ニューウェーブ」の作家。94年VOCA展奨励賞。98年原美術館で個展開催。この時期を境にストロークを控え、余白の中に核となる痕跡をとどめた作を発表。2001年三重県立美術館県民ギャラリーで展覧会を開催。2009年大坂で没、44歳。09年画集『館勝生 Tachi Katsuo』刊行。**造形作家、洋画家**

## 立川広己 (たちかわ・ひろみ/1949年～)

東京生れ。1972年武蔵野美術大学卒。85年上野の森絵画大賞展佳作賞(美術館買上)、フジテレビ「朝のテレビ美術館」作家紹介。90年自由美術展佳作賞。91年現代洋画精鋭選抜展第20回記念大展金賞。94年安井賞展出品。95年「華宴」(F150号)通産省買上。2005年NHK北九州支局出演(作品紹介)。06年上野の森美術館主催 現在の視展招待出品。現在、日本美術家連盟会員。自由美術会会員。**洋画家**

## 立花重雄 (たちばな・しげお/1920～1995年)

福岡県生れ。1955年上京、田崎廣助に師事、中央美術学園に学び、57年卒、帰郷、郷里の炭鉱風景に衝撃を受け描いた。立花は「ボタ山画家」と称された。64年日展特選、65年日展無鑑査出品。83、85年日展委嘱出品。87年日展会員。79年日洋賞。80年日洋会運営委員。87年新日洋会常任委員。82年中央美術協会会長。67年訪欧、スペインの街並みに炭鉱町に似た感覚を受け、哀愁を帯びた街並みを描いた。田川市文化功労者。1995年没、75歳。**洋画家**

## 立原杏所 (たちはら・きょうしよ/1786～1840年)

別号に東軒・玉瑋舎等。画は初め僧月僊に学び、のち谷文晁の門下となる。渡辺崋山・椿椿山らと交友があった。元・明画を研究し、山水・花鳥を得意とした。1840年没、55歳。**江戸後期の画家・水戸藩士**

## 辰野登恵子 (たつの・とえこ/1950～2014年)

長野県生れ。1972年東京藝術大学美術学部絵画科卒、74年同校大学院修了。74～75年助手。79年東京国際版画ビエンナーレ展に出品。国内外の企画コンクールに出品。95年東京国立近代美術館で「辰野登恵子1986～1995年」展開催。96年芸術選奨文部大臣賞。2014年没、64歳。**洋画家、版画家**

## 辰巳ヨシヒロ (たつみ・よしひろ/1935～2015年)

大阪生れ。兄は、漫画家・漫画出版社経営者の桜井昌一。1970年代以降は、社会の底辺に位置する人々の悲哀や屈折を描いた作品を『ガロ』に発表。代表作は「劇画漂流」。第1回日本漫画家協会賞努力賞(『人喰魚』)、第32回アングレーム国際漫画祭特別賞、第13回手塚治虫文化賞大賞(『劇画漂流』)、2006年度インクポット賞、2010年度アイズナー賞最優秀アジア作品賞、最優秀実話作品受賞(『劇画漂流』)第39回アングレーム国際漫画祭世界の視点賞(『劇画漂流』)。**日本の漫画家、古書店経営者**

## 立石絃一・大河亜・タイガー立石 (たていし・こういち・たいが)

一/1941～1998年)

福岡県生れ。1963年武蔵野美術大学短期大学芸術デザイン科卒。64年中西夏之、荒川修作、工藤哲巳らとヤング・セブン展(南画廊、東京)。88年美術の中の4つの観光展-篠原有司男・立石紘一・中村宏・横尾忠則(池袋・西武百貨店ギャラリー)。69～82年伊・ミラノに移住、71～74年オリベッティ社エットレ・ソットサス工業デザイン研究所嘱託。84年絵本『とらのゆめ』(こどものとも344号、福音館書店)刊行。90年、立石大河亞に改名。94、99年個展(田川市美術館)。97年LET'S GO 浮世絵(三鷹市美術ギャラリー)。98年まんがの時代(東京都現代美術館、他)。1998年没、56歳。2008年個展(埼玉県立近代美術館)。洋画家、漫画、絵本、陶芸

**立石鐵臣** (たていし・てつおみ/1905～1980年)

台北市生れ。1913年日本に渡り、東京の日野小学校、17年明治学院中学部入学。21年川端書学校入学。日本國畫會展入選、同会会員。34年「臺陽美術協會」の発起人の一人。45年中華民国(国民党)政府に留用、東都書籍編輯や、臺北師範學校の美術教師。46年師範學校教職から省立編譯館技佐。47年台湾大学史学系南洋史学研究室講師。梅原龍三郎の勧めで台湾に渡り、台湾美術の発展に多大な功績を残し、台湾で絶大な人気を誇りました。1980年没、75歳。2015年泰明画廊で回顧展。台湾で美術教育

**立石春美** (たていし・はるみ/1908～1994年)

佐賀県生れ。伊東深水に師事。1931帝展で入選。戦後は日展で活躍、46年、51年「特選」。1994年没、85歳。作品に「岩風呂」「太夫礼讃」など。日本画家

**伊達孝太郎** (だて・こうたろう/1878～1964年)

宮崎県生れ。宮崎県尋常師範学校卒。1897年小城中学校図画教師。1902年渡米、03年セントルイスの美術学校入学。07～09年NY美術学校裸体科入学、卒業後セントルイスの肖像画館主任。アーティスト・ギルド・アトリーグ正会員。19年帰国、国民美術協会会員。関東大震災後は、鹿児島市に移り、鹿児島の福山中学校で教鞭。31年伊達洋画研究所を設立し、後進の指導。1964年没、86歳。洋画家、美教

**建島覚造** (たてはた・かくぞう/1919～2006年)

東京生れ。建島大夢の長男。東京美術学校卒。1941年文展で特選。50年行動美術協会の彫刻部創立に参加。67年高村光太郎賞、81年中原悌二郎賞、90年芸術選奨。具象から抽象へと移行した。59年多摩美大教授。2005年文化功労者。2006年没、86歳。彫刻家、美教

**建島大夢** (たてはた・だいむ/1880～1942年)

和歌山県生れの彫刻家。京都市立美術工芸学校入学後、1907年に東京美術学校に転入。08年に文展三等初入選。17年「八つ手会」、21年「曠原社」を結成。20年東美教授。朝倉文夫、北村西望とともに官展三羽鳥と目された。彫刻家の覚造は長男。42年没、62歳。(出典 わ眼)彫刻家、美教

**田所量司** (たどころ・りょうじ/1919～1990年)

長野県生れ。1941年東京美術学校日本画科卒、結城素明に師事。48年日展入選。54年山田皓齋らと新美術協会を結成し、東京事務所を担当。同協会展を中心に発表し、光琳賞、文部大臣奨励賞、内閣総理大臣賞。東京で没、71歳。著書に「日本画―初歩の初歩 日本画の基礎技法」(文芸社)、「日本画の技法」(雄山閣)。日本画家

**田名網敬一** (たなあみ・けいいち/1936年～)

東京生れ。1960年武蔵野美術大学デザイン科卒。60～62年博報堂制作部。グラフィックデザイン、オブジェ、ビデオ、実験映画、アニメ等を使い表現。91年京都造形芸術大学情報デザイン科教授。MoMA(米)等世界の著名美術館が作品収蔵。イラスト、デザイン、オブジェ、アニメ、ビデオ、映画、美教

**田中阿喜良** (たなか・あきら/1918～1982年)

大阪生れ。1938年姫路高等学校に入学、40年中退し、43年京都高等工芸学校図案科卒。47年行動美術展に出品。55年行動美術展に出品、同会会員。57年行動美術賞。57年シェル美術賞展で一等賞。58年～渡仏。59年フランス・ビルヌーブ等賞。60年モナコ国際展絵画部でグランプリ、仏国ボンタヴァン賞。61年サロン・ドートヌス会員。62年パリ・ジャン・カステル画廊と契約。63年エルベ画廊と契約。75年神奈川県立美術館で回顧展。パリで没、63歳。洋画家

**田中敦子** (たなか・あつこ/1932～2005年)

大阪生れ。1950年大阪市立美術館付設美術研究所に入所、51年京都市立美術大学入学、中退。55年「具体」に参加。第1回具体美術展より出品。56年具体美術展に「電気服」及び素描を出品、評判を呼ぶ。タピエとの交流から立体から平面作品制作。日本の現代美術には欠かせない作家。2001年芦屋市立美術館、静岡県立美術館で個展。奈良市で没、73歳。洋画家、具体、立体

**田中以知庵** (たなか・いちあん/1893～195年)

東京生れ。名は兼次郎、別号に咄哉州・一庵等。上

原古年に画の手ほどきを受けたのち松本楓湖に師事し、巽画会・紅児会等で活躍する。また釈宗活について禅を学び、朝鮮半島に渡るなど数年にわたって求道的な生活を送る。晩年は風景画に独自の画境を拓き、飄逸な絵画世界を展開した。春陽会会友・日本南画院同人・日展審査員。19583年没、65歳。日本画家

#### 田中一松 (たなか・いちまつ/1895～1983年)

山形県生れ。1912年東京帝国大学文学部美学美術史学科卒。13～15年東京帝室博物館美術課嘱託、15年古社寺保存計画調査嘱託、25国宝保存に関する調査嘱託、35年重要美術品等調査委員会臨時委員、45年社会教育局国宝保存に関する調査嘱託、47年5月国立博物館の事務嘱託、47年文部技官任官、国立博物館勤務、50年文化財保護委員会保存部美術工芸課勤務、50～66年文化財専門審議会専門委員、52年京国立文化財研究所美術部長、58年東京国立文化財研究所長、58～59年欧州巡回日本古美術展派遣団長として渡欧、帰途インドの美術遺跡、博物館を視察。65年東京国立文化財研究所長退官、65～77年国華社主幹。65～68年文化財保護委員会委員、67年勲三等旭日中綬章。68～76年文化財保護審議会委員。72～73年高松塚古墳総合学術調査会副会長。73年浮世絵に関する国際シンポジウム出席及び東洋美術品コレクション調査等のため米国に出張。73年米フリア美術館よりフリア・メダル。74年勲二等瑞宝章。77年国華社編集顧問、その間、女子美術専門学校、日本大学、東北大学、早稲田大学、金沢美術工芸大学、東京大学等の講師。日本中国文化交流協会、トキワ松学園、中央美術学園、栃木県立美術館、根津美術館、畠山記念館、出光美術館、潁川美術館、山種美術館、致道美術館、博物館明治村、本間美術館等の役員。東京で没、87歳。83年従四位。国文化財保護の行政に従事し、主として絵画作品の実査研究。仏教美術をはじめ、倭絵、絵巻物、水墨画、宋元画、宗達・光琳派、南画にまで及ぶ。58年「日本絵画史の展望」、66年「日本絵画論集」、86年出版「田中一松絵画史論集」上・下に収録。編集ないし監修の主な全集には「日本絵巻物集成」(29～32年)、「宋元名画集」正統(28～32・38年)、「東山水墨画集」(34～36年)、「日本絵巻物集成」改訂版(42～44年)、「続日本絵巻物集成」(42～45年)、「池大雅画譜」(56～59年)、「日本絵巻物全集」(58～69年)、「日本美術全史」上下(59・60年)、「水墨美術大系」(73～76年)、「新修日本絵巻物全集」(75～80年)。雑誌「国華」の編集に関与して、65～75年よ主幹として多くの新出作品の紹介。(引用 東文研)美術史家、東文研所長

#### 田中一光 (たなか・いっこう/1930～2002年)

奈良市生れ。1950年京都市立美術専門学校図案科卒。59年日宣美展会員賞、60年日本デザインセンター創立に参加、東京ADC金賞。63年田中一光デザイン室主宰。86年ニューヨークADC金賞、91年日本文化デザイン大賞、94年ニューヨークADC殿堂入、紫綬褒章。2000年文化功労者。2002年没、71歳。デザイナー、版画

#### 田中一村 (たなか・いっそん/1908～1977年)

栃木県生れ。東京美術学校日本画科中退。18歳の時天才兄とうたわれ、後援会・賛奨会が結成。結核を患ったため千葉で療養生活を送る。当時は屏風、ふすま絵、天井画などを描く。戦後は川端龍子の主宰する青龍展に出品、1947年入選。のち脱退。55年頃から絵筆1本の旅に。58年奄美大島に辿り着く。名瀬市でトタン屋根の家に住み、大島紬の染色工として働きながら、熱帯樹や動植物、魚類を描き続けた。85年画業がNHKディレクターらによって掘り起され、遺作約30点による「黒潮の画譜・田中一村展」が全国で開催された。また97年鹿児島県名瀬市でその画業を記念して“奄美日本画大賞展”を設立。日本画家

#### 田中岩次郎 (たなか・いわじろう/1893～1974年)

東京生れ。1908年白馬会研究所に学ぶ。10年第13回白馬会展に出品。12年第1回光風会展に出品。18年第6回光風会展に出品。19年第1回帝展に初入選。23年関東大震災で大阪に疎開。26年東京に戻り無所属となる。27年第4回白日展に出品。大島に写生旅行。43年三重県浜島に疎開。51年鎌倉に移住後、三軒茶屋や目黒区高木町に移住。74年福岡県で没、享年81歳。(佐)洋画家

#### 田中修 (たなか・おさむ/1903～1985年)

愛媛県生れ。1928年東京高等師範学校卒。29年二科展入選、32～41年入選。42年新制作協会に出品、44年新作家賞、51年岡田賞、52年会員。54～57年渡仏。58年白木屋で個展。58年再渡仏、ドルトーニュに住む。静岡県で没、82歳。洋画家

#### 田中喜作 (たなか・きさく/1885～1945年)

京都市生れ。1903年京都市立美術工芸学校に入学、05年同校退学後関西美術院に学ぶ、08年同院を退くとともに渡欧、パリでアカデミー・ジュリアンに入学。09年帰朝後は美術史ことに近世日本絵画の研究に入り、浮世絵の研究で知られた。批評家としても活躍し、国画創作協会に参加。27年美術研究所創立と同時にその一員となり、その後「美術研究」誌上に

種々の研究論文を発表して卓抜の見解をうたわれた。44年には東京美術学校教授として美術史を担当したが、戦時中の無理が因となって斃れた。美術研究所長田中豊蔵は兄。著書の主なるものに「ルノアール」「マイヨール」「浮世絵概説」があり、後年の研究は主として桃山時代の美術、発祥時代の日本南画に向っていた。**東京美術学校教授、美術研究所嘱託**

#### 田中君枝 (たなか・きみえ/1908～1987年)

名古屋市生れ。1926年鎌倉高等女学校卒。松岡映丘に師事日本画を学ぶ。27年愛知県立第一高等女学校専攻科卒。31年頃、洋画への転向を望み33年二科会目黒デッサン研究所で熊谷守一、東郷青児らに学ぶ。38年より二科展を舞台に活躍。40年二科の前衛「九室会」にも参加。50年二科会35年記念展賞。60年二科会会員。62年二科展で会員努力賞。80年評議員。47年女流作家協会を三岸節子らと創立、55年委員。東京で没、79歳。**洋画家**

#### 田中恭吉 (たなか・きょうきち/1892～1915年)

和歌山県生れ。1911年東京美術学校日本画科に入り、恩地孝四郎、藤森静雄と親交。14年恩地孝四郎、藤森静雄と同人誌「月映」を刊行。ムンクや表現主義の影響が見られた。和歌山で没。23歳。**版画家、挿絵**

#### 田中恭吉 II (たなか・きょうきち/1892～1915年)

和歌山県生れ。1910年和歌山県立徳義中学校卒。後、上京。白馬会洋画研究所で長原孝太郎らに師事。東京美術学校日本画科に学ぶ。11年恩地孝四郎を知る。12年ヒュウザン会(後のフェウザン会)に出品。14年「月映」を創刊。萩原朔太郎の詩集「月に吠える」の挿絵を担当。15年10月23日没、享年23歳。(佐)**版画家、挿絵**

#### 田中謹左右 (たなか・きんざう/1908～1935年)

岡山県生れ。1922年京都に出て鹿子木孟郎に師事。24年上京。26年第4回春陽会展に初入選。その後、小林和作の紹介で中川一政に師事。30年第8回春陽会展で春陽会賞。32～33年渡欧、滞欧中に春陽会会友に推挙。35年4月25日没、享年27歳。36年第14回春陽会展で滞欧作による遺作展が開催された。(佐)**洋画家**

#### 田中行一 (たなか・こういち/1901～1982年)

福岡県生れ。1922年東京美術学校図案科卒。「一九三〇年協会」展、二科会展に出品。31年独立展に出品、32年D賞、32～34年渡欧、独立展で特陳列、会員。1982年没、81歳。**洋画家**

#### 田中健三 (たなか・けんぞう/1918年～)

大阪生れ。1931年大阪工芸学校入学。山口正城に造形、赤松麟作に洋画を学ぶ。38年自由美術家協会展に出品。47年同会会員。55年創作の室を結成。57年TAO造形グループを創設。62年国際造形芸術家集団ISPAを創立。88年「田中健三の道、造形活動50年記念展」。**造形作家、立体、洋画**

#### 田中功起 (たなか・こうき/1975年～)

栃木県生れ。1998年ウィーン芸術アカデミー短期留学。2000年東京造形大学美術科絵画専攻卒。05年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。ポーラ美術振興財団の助成を受けバリエに滞在。09年文化庁新進芸術家海外研修制度によりロサンゼルスに留学。13年ヴェネツィア・ビエンナーレ日本代表。東京造形大学客員教授。美術家・映像作家、**美教**

#### 田中佐一郎 (たなか・さいちろう/1900～1967年)

京都生れ。1925年京都市立絵画専門学校予科卒、入江波光に師事。上京して川端画学校に通い安井曾太郎に師事。30年「一九三〇年協会」協会賞。31年独立展で独立賞。34年独立美術協会会員。32年渡欧。38年従軍画家。66年まで独立展に出品。東京で没、66歳。**洋画家**

#### 田中三蔵 (たなか・さんざう/1948～2012年)

川崎市生れ。1967年東京教育大学附属高等学校卒、74年東京藝術大学美術学部芸術学科卒、日本彫刻史を専攻。74年朝日新聞社に入社。91年東京本社学芸部に戻り、文化面にて美術を担当。95年美術担当の編集委員。2008年定年退職、引き続き同本社専門シニア・スタッフ。10年執筆した数多くの記事の中から107件を選定してまとめた「駆けぬける現代美術」を刊行。日本大学芸術学部大学院(2002年4月から)、女子美術大学大学院で非常勤講師。美術担当記者として同紙に展覧会評、時評、論説等にわたる記事を1500件以上執筆した。日本の近代美術の見直しと並行して「日本画」概念の再検討と新しい表現の出現のレポート、国立博物館、美術館の独立行政法人化の問題に関する連載、アジア諸地域の経済的な台頭を背景にしたアジアの現代美術のレポート等々、いずれも問題提起をこめた内容であった。2012年没、63歳。(引用 東文研)**新聞記者、評論**

#### 田中繁一 (たなか・しげいち/1931～1994年)

三重県生れ。1952年読売アンデパンダン展、独立展、日本アンデパンダン展出品。59年小沢光沢堂ギャラリー個展。以後村松画廊、画廊春秋個展。66年

「現代美術の動向」展(京都国立近代美術館)出品。68年現代日本美術展(東京都美術館)出品。84年「アジアの中の日本・パリ展」(フランス)出品。1994年没、63歳。洋画家

聞記者、美術評論家

田中繁吉 (たなか・しげきち/1898～1994年)

福岡県生れ。1921年東京美術学校西洋画科卒、研究科に進級。26～28年滞欧、アカデミー・グラン・シヨミエール、アカデミー・ランソンに学ぶ、ピシエールに師事。キスリングに影響を受ける。29年白日会会員。33年帝展で特選。58年日展評議員、74年日展参与。44年創元会創立会員のち理事長。85年画業60年記念田中繁吉展が池袋アートフォーラムで開催。91年日本文化振興会国際芸術文化賞。東京で没、96歳。洋画家

田中信太郎 (たなか・しんたろう/1940～2019年)

東京生れ。1960年前衛芸術家集団「ネオデザインム・オルガナイザーズ」を赤瀬川原平らと共に結成。後にミニマルな表現へと移行し、《点・線・面》などの作品群で美術界だけでなくデザイナーや建築界にも多大なインスピレーションを与えた。パリ青年ビエンナーレ(69年)やヴェネチア・ビエンナーレ(72年)などの国際美術展で活躍。2019年没、79歳。現代美術家、彫刻家、ネオ・タダ

田中実一 (たなか・じついち/1898～1987年)

1898年生れ。1934年帝展入選。38年光風会会員、評議員。新文展、日展に出品、日展会員。東京で没、89歳。洋画家

田中季夫 (たなか・すえお/1895～1948年)

岩手県生れ。京都工芸学校図案科卒。1922～45年県立第一高等女学校教職。34年戦前の[宮崎美術協会]の第展覧会を開催。46年戦後[宮崎美術協会]発起人。図案家及び洋画家として知られ、宮崎市で没、53歳。洋画家、図案家、美教

田中 修 (たなか・しゅう/1903～1985年)

愛媛県生れ。1928年東京高等師範学校卒。29年二科展入選。42年より新制作展に出品。44年新作家賞。51年岡田賞。52年新制作協会会員。54～57年渡仏。57年白木屋で個展。58～84年渡仏、ドルトーニュに住む。サロン・ド・メなどに出品。下田市で没、82歳。洋画家

田中 進 (たなか・すすむ/1905～1983年)

広島県生れ。1925年広島師範学校卒、県内小学校で教鞭。31年白日会に油彩画、水彩画を出品。34年頃より西田武雄の著書によってエッチングを独習。37～39年日本版画協会展に連続出品。第一美術協会に出品。40年文部省主催紀元2600年奉祝美術展に銅版画を出品。1983年没、78歳。洋画家、版画、水彩、美教

田中寿太郎 (たなか・じゅたろう/1904～1985年)

岡山市生れ。葵橋洋画研究所、川端画学校で洋画を学ぶ。林重義に師事。1930年春陽会展入選。39年春陽会賞。40年春陽会会友。47年春陽会会員。相模原市で没、80歳。洋画家

田中青坪 (たなか・せいよう/1903～1994年)

前橋市生れ。太平洋画会洋画研究所に学んだが、日本画家の小茂田青樹に師事。24年展覧会に入選。32年日本美術院同人。59年東京芸術大学教授。67年で文部大臣賞。74年以降、浅間山風景をおおく制作。東京で没、90歳。日本画家、横山大観記念館理事長

田中 穰 (たなか・じょう/1925～2005年)

神奈川県生れ。1949年早稲田大学文学部英文科卒、同年読売新聞社入社、社会部、文化部を経て、主に美術関係の記事を多く執筆。同社在職中に『藤田嗣治』(新潮社、1969年)を刊行、同年の直木賞候補。78年「日本の四季」で同社長賞。81年退社、文筆活動に入る。広範な調査にもとづく画家の評伝等の執筆が多く、業績には単行書に『三岸好太郎』(日動出版、1969年)、『日本洋画の人脈』(新潮社、1972年)、『近代日本画の人脈』(新潮社、1975年)、『心淋しき巨人 東郷青児』(新潮社、1983年)、『一水会五十年史』(1989年)、『評伝 奥村土牛』(芸術新聞社、1989年)、『評伝 山本丘人』(芸術新聞社、1991年)等。旅行記、随筆等も多く執筆。東京で没、80歳。新

田中善之助 (たなか・ぜんのすけ/1889～1946年)

京都生れ。1905年聖護院洋画研究所で浅井忠に師事。10年黒猫会(シャ・ノール)を結成、11年仮面会(ル・マスク)結成。20～23年渡仏。23年関西美術院教授。24年春陽会会員。32年新興美術協会を創立。31年新興美術協会結成。35年京都市展の審査委員。京都で没、57歳。洋画家、美教、水彩

田中 岑 (たなか・たかし/1921～2014年)

香川県生れ。1939年東京美術学校油絵科入学、日本大学芸術学科に転校し卒。41～42年独立美術展出品。50年春陽会で研究賞。53年春陽会会員。56年シュル美術賞二等。57年安井賞受賞。60～61



年渡政。66～70年女子美術大学講師。2012年川崎市市民ミュージアム個展。14年没、93歳。**洋画家、美教**

美術北海道支部を設立。60年現代日本美術展で優秀賞。69～74年武蔵野美術大学教授。84年北海道立近代美術館で個展。東京で没、91歳。**洋画家、美教**

**田中 孝** (たなか・たかし/1948年～)

大津市生れ。1975年京都市立芸術大学西洋画科専攻科修了、第1回版画コンクール・コンクール賞。77年日本現代版画大賞展・優秀賞。78年クラコウ国際版画ビエンナーレ・2席。79年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ・3席。80年ノルウェー国際版画ビエンナーレ・2席。87年現代日本美術展・和歌山県立近代美術館賞、IBM絵画イラストコンクール・大賞。88年ジャパンエンバコンクール展(エンバ美術館・芦屋)・京都国立近代美術館賞。94年大阪トリエンナーレ1994一版画・関西テレビ放送賞、田中孝の聖夜(名古屋市美術館)。**版画家**

**田中 正** (たなか・ただし/1953年～)

前橋市生れ。1969年川隅路之助に師事。80年水彩画を始める。2006年ボールペンと色鉛筆で描き始める。09年熊谷守一大賞展入選、11年最優勝賞。14年日本の絵画2014佳作賞、世界絵画大賞展入賞。08・09・10・12・13年阿久津画廊個展(前橋)。**洋画家、水彩**

**田中拓馬** (たなか・たくま/1977年～)

1996年浦和高校卒、2002年早稲田大学法学部卒。05年二科展入選、06年青枢会会員。07年上野の森美術館大賞展入選。12年NYART TAKES TIMES SQUAREのイベントで数万人の中からトップ100選に選抜、選ばれる。**洋画家**

**田中太郎** (たなか・たろう/1904～1988年)

福岡県生れ。1921年中央美術展、太平洋美術展に入選。25年坂本繁二郎に私淑、画作。30年全関西展で受賞。31年槐樹社展に入選。35年二科展に9回連続入選。45年日展入選。48年以降日展、一水会展に出品。58年一水会会員。60年一水会賞。88年没、84歳。**洋画家**

**田中猛夫** (たなか・たけお/1919～1973年)

ハワイ生れ。1938年ヒロ・ハイスクール卒。40年洋画勉学来日、関西美術院に学ぶ。51年二紀展入選。56年奨励賞、二紀会同人。59～61年連続同人賞。59年安井賞候補出品。60, 61, 62年毎日選抜美術に出品。62年グループ「生」展結成参加。関西学院で指導。京都で没、54歳。**洋画家**

**田中千秋** (たなか・ちあき/1957～2011年)

鳥取県生れ。76年大阪府立千里高等学校卒、82早稲田大学第二文学部美術科西洋美術史を専攻卒。81～83年に老舗額縁店である古徑、83～84年に八咫家での勤務を経て、85年に山領絵画修復工房に入り、油彩画修復に携わる。88年からはブリヂストン美術館学芸部で保存修復を担当。2001兵庫県立美術館に移り、保存修復グループのリーダーとして活躍した。93～98年に女子美術大学、2000年より東北芸術工科大学で非常勤講師を務めている。2011年没、54歳。兵庫県立美術館保存・修復グループリーダー。95年阪神大震災に際しては、全国美術館会議に働きかけて被災地の美術館・博物館への救援隊を結成、所蔵品の救援活動や被害調査を率先して行なう。2011年東日本大震災に際しても、全国美術館会議の文化財レスキュー活動に参加、4月には津波の被害を受けた石巻文化センターの絵画・彫刻約200件を移送、応急処置を始める。同じく津波で甚大な被害を受けた陸前高田市立博物館のレスキューでも、救出した作品の応急処置を行なう旧岩手県衛生研究所の環境整備を検討するなど貢献。2011年没、54歳。兵庫県立美術館保存・修復グループリーダー

**田中田鶴子** (たなか・たずこ/1913～2015年)

仁川市生れ。1936年多摩美術専門学校入学。39年旺玄社展で旺玄社賞。36年新制作派協会の結成に伴い同展に出品。52年新制作協会賞、同会会員。47年女流画家協会創立会員。54年日仏米抽象芸術展に出品。60年現代日本美術展で最優秀賞、グッケンハイム国際美術展に出品。70年跡見学院女子大学教授。東京で没、102歳。**洋画家、美教**

**田中常太郎** (たなか・つねたろう/1906～2002年)

甲府市生れ。山梨県師範学校研究科卒。教員となり、70年以上油彩画を描く。師範学校在学中国画会展入選。入選を重ね、梅原龍三郎に師事。国画会、太平洋画会、東光会、光風会に出品。旺玄会でY氏

**田中忠雄** (たなか・ただお/1903～1995年)

札幌市生れ。1924年京都高等工芸学校図案科卒。本郷絵画研究所に通う。湯島自由画室で前田寛治に師事。27年中央美術展で中央美術賞。27年「一九三〇年協会」展に出品。30～32年渡仏、アカデミー・ドラ・グラン・ショミエールに通う。35年新美術家協会に入る。37年二科展で特待。39年二科会会友。42年二科会会員。45年行動美術協会結成に参加。行動

賞、会員。山梨県で赤蓼会に所属し、六人社、甲斐美術会、山梨美術協会、白陽会、白濤会などの結成に参加。1964年山日芸術賞、76年文化功労実賞。県内の風景の他に、港や岬など海のある風景を題材にした作品も多い。2002年没、96歳。洋画家

展。松戸市で没、83歳。(出典 わ眼)洋画家

#### 田中稔之 (たなか・としゆき/1928～2006年)

山口県生れ。1950年～向井潤吉に師事し、行動美術研究所でデッサンを学ぶ。52年行動美術展入選、以後同展に連続して出品、58年行動美術賞、59年会員。多摩美術大学で教鞭。63～66年渡欧、ウィリアム・ヘイターに版画を学ぶ。77年頃からモンゴル、チベットなど取材。その土地の風土や歴史を象徴的に描いた太陽シリーズを展開。2006年没、78歳。洋画家、版画

#### 田中訥言 (たなか・とつげん 1767～1823年)

愛媛県生れ。江戸時代中期頃から画家として活動、田中訥言は古土佐派様式の研究、復古大和絵派の中心人物。石田幽汀に師事。宮廷画家の土佐光貞に師事、京都御所造営への参加や古画を通じて純日本的といえる大和絵の様式を研究し、古土佐派の復興を唱えています。田中訥言は伝統の様式を重んじる古土佐派の復興を唱えるばかりではなく、自身の画力も優れていると評価され、後世の模範であると称された。1788年法橋位を得る。90年寛政度内裏障壁画の制作に参加。1817年尾張藩奥医師林良益の尽力で二百幅画会を開催。現在、確認できる田中訥言の作品はおよそ300点以上あり、奈良県立美術館、出光美術館、名古屋市美術館、徳川美術館などのその作品を見る事が出来る。1823年没、56歳。復古大和絵派の中心人物、江戸時代中期頃の絵師

#### 田中豊蔵 (たなか・とよぞう/1881～1948年)

京都市生れ。1908年東京帝国大学文科大学支那文学科卒。国華社編集員。文部省古社寺保存調査嘱託。慶大講師。東京美術学校講師などを歴任し、28年京城帝大文学部教授、美学美術史を担当し、国宝保存会委員、東大講師を兼務。42年退官し、美術研究所長事務取扱。46年国立博物館付属美術研究所長兼東京都美術館長。著書に「日本美術の研究」「中国美術の研究」がある。東京で没、66歳。美術史家 国立博物館付属美術研究所長、美教、東京都美術館長

#### 田中寅三 (たなか・とらぞう/1878～1961年)

愛媛県生れ。1895年明治美術学校に学ぶ。96年天真道場に学ぶ。97年白馬会展出品。99年東京美術学校西洋画科卒。1938年から日動画廊ほかで個

#### 田中 昇 (たなか・のぼる/1934～1982年)

神奈川県生れ。旧制湘南中学校入学。1955年多摩美術大学油絵科卒。約十年間建築家今井兼次の助手として壁画の研究と制作に携わる。66年第51回二科展で二科銀賞。67年第52回二科展で会友。69年第54回二科展でローマ賞。渡伊。70年帰国。71年第56回二科展で会員。71年田中昇滞欧作品展(資生堂ギャラリー)。72年第15回安井賞候補展出品、16～17回展まで出品。82年9月9日没、享年48歳。(佐)洋画家

#### 田中日佐夫 (たなか・ひさお/1932～2009年)

岡山県生れ。立命館大卒。竜村織物美術研究所、滋賀県教育委員会勤務をへて、1979年成城大教授。日本美術史を研究し、84年「日本画 繚乱の季節」でサントリー学芸賞、89年「竹内栖鳳(せいほう)」で芸術選奨文部大臣賞。94年秋田県立近代美術館館長。平成21年5月15日死去。77歳。美術史家、美術館長

#### 田中道久 (たなか・みちひさ/1915～1981年)

新潟県生れ。1939年東京美術学校西洋画科卒。38年国画会展に出品。43年松竹映画会社に入り海軍省宣伝教育映画製作。47年国画会賞、53年国画会会員。58～68年国画会委員、事務局担当。65年渡欧。66年資生堂ギャラリーで個展。東京で没、66歳。洋画家

#### 田中 実 (たなか・みのる/1923～2016年)

愛知県生れ。42年埼玉県師範学校本科第一部卒。小学校教師。46年水彩連盟に通い、小堀進らに学ぶ。48年寺内萬治郎に師事。48年光風会入選、岡田賞、62年会員。49年水彩連盟に入選、54年水彩連盟会員、96年水彩連盟理事長。60年埼玉大学教育学部美術科講師。78年日展会員。90年評議員。65年文藝春秋画廊で個展。87年資生堂ギャラリーで個展。91年浦和市文化栄誉賞。95年紺綬褒章。2016年没、93歳。水彩画家、美教

#### 田中本吉 (たなか・もときち/1860～1936年)

長岡市生れ。1880年新潟学校師範学部卒、86年小山正太郎門下。89年神奈川県尋常師範学校図画担任、古志郡中沢校・三島郡才津校・大積大村校・尼校訓導、北魚沼郡根小屋校長を歴任。1924年北海道・東北、26年西日本・朝鮮を写生旅行。28年昭和天皇即位の礼で献穀米奉耕の儀を務めた。1936年没、76歳。洋画家、美教

テ・ナショナル・デ・ボザール会員。「裸婦のタナカ」と称される。41年没。54歳。(出典 わ眼)洋画家

**田中春弥** (たなか・はるや/1914～2010年)

福岡県生れ。川端画学校を経て東京美術学校図画師範科に入学し、伊原宇三郎に学ぶ。1950年一水会展、日展入選。以後も一水会展で入選、受賞を重ね、会員となり、のち委員。日展で、特選や文部大臣賞、会員、評議員。人物やメキシコの遺跡、楽器などのモチーフを経て、信州や阿蘇など広大な風景画を展開。2010年没、86歳。洋画家

**田中本吉** (たなか・もときち/1860～1936年)

長岡市生れ。本姓脇屋。1886年上京、不同舎に入門。90年第3回内国勧業博覧会で農商務大臣賞上げとなる。同年郷里の田中家に入婿し、村会議員になるなど、郷里の農政や地域振興に尽力しながら、画家として一線を離れるが、その後も絵を描き続けた。95年第7回明治美術会展に出品、同8回展にも出品。小山をはじめ、中村不折、下村為山ら不同舎の仲間たちとの交友は晩年まで続く。36年没、享年76歳。(佐)洋画家

**田中致美** (たなか・よしとみ/1902～2001年)

熊本市生れ。1921年熊本県立中学済濟齋卒。28年東京美術学校西洋画科卒。37～63年福岡県立中学修猷館、同校および県立修猷館高校の美術教諭、美術部顧問として指導。63～75年筑陽学園太宰府高校、75年までデザイン科担当。71年古希記念として初めての個展を開催、退任後には数回個展を開催。2001年没、99歳。洋画家、デザイン、美教

**田中米吉** (たなか・よねきち/1925年～)

山口市生れ。1945年宇部工業専門学校卒。48年山口市立宮野中学校で理科を教える。48年大殿中学校で理科のち美術を教え。56年川西中学校で美術を教えるが、61年教員を辞任。上京、65年山口に帰り、家業(外郎の御堀堂)3代目を継ぐ。以後、家業の傍ら彫刻の制作活動に勤むが無理がたたり、68年に眼底出血で右目の視力を失う。個展も多数開催。山口県立美術館で「田中米吉 ドッキングからの視線」。ロンドンICA展、第2回国際彫刻展、彫刻の森美術館大賞展、近・現代日本彫刻展。サンアンドスター1996フェスティバルUSA。現代日本彫刻展大賞、毎日新聞社賞、フジ産経国際彫刻展佳作賞。彫刻家

**田中保** (たなか・やすし/1886～1941年)

埼玉県生れ。1904年渡米。シアトルのフォック・タダマの画塾で学ぶ。個展で発表。20～41年渡仏。パリでエコール・ド・パリの画家と交友。29年ソシエ

**田中幸人** (たなか・ゆきと/1937～2004年)

福岡県生れ。1954年佐賀県立伊万里高校から福岡県立修猷館高校に編入学。61年九州大学文学部哲学科卒。61年毎日新聞社に入社。同社西部本社報道部に配属、大牟田通信部、西部本社報道部を経て65年に学芸課に転出した。以後、美術を中心に記者生活を送る。当時、菊畑茂久馬等の「九州派」といわれた福岡と中心とする現代美術の新しい動向に対して共感をもって精力的に取材を重ねて記事とした。81年には、同僚記者であった東靖普と連載記事をまとめて『漂民の文化誌』(葦書房)を刊行。この後、同社東京本部に転勤し、以後10年間美術担当編集委員として同新聞に美術批評を執筆した。東京での批評活動では、従来の公募団体展中心から画廊等で開催される中堅、若手の個展へと対象を一変させ、そこから書きつけられた膨大な批評記事は、視野の広さと鋭い視点に裏付けられた同時代の良質のドキュメントとなっているといつてよい。91年に同新聞社を退社、同年埼玉県立近代美術館長に就任、2000年まで勤める。同美術館時代には、積極的に現代美術の企画展に参画した。2000年熊本市現代美術館設立のために招かれ、02年初代同美術館長となり、その在任中の死去であった。没後、遺稿集として『感性の祖形—田中幸人美術評論集』(「田中幸人遺稿集」刊行委員会編、弦書房、2005年3月)が刊行された。装飾古墳壁画をはじめ民俗学、人類学にも造詣が深く、そうした幅広い視点と現場での取材に徹した現代美術批評として特色があり、また後年は美術館人としても、近年の美術館をめぐる厳しい状況に対して真摯で提言的な発言を最後までつづけていた。2004年没、66歳。美術評論家、元埼玉県立近代美術館長、元熊本市現代美術館長

**田中良尊** (たなか・よしたか/1932～1992年)

長野県生れ。1957年東京教育大学教育学部絵画学専攻科卒。示現会展に出品。57年十周年記念奨励賞。59年示現会会員。84年同会監事。66年メキシコに留学、シケイロスに師事。68年日展で特選。79年筑波大学芸術学系教授。千葉県で没、60歳。洋画家、美教

**田中蘭谷** (たなか・らんこく/1884～1959年)

千葉県生れ。別号幽香山荘、清遠山房。文晁派の滝和亭に学んだ山梨県南都留郡出身の画家米山朴庵に入門。江州屋、中村耕三商店などの絹問屋に入りして特産の絵甲斐絹の下絵を描き、結婚してから

は郡内をはじめ甲府・緱沢などで画会を開いていた。昭和の初め頃には南画壇の重鎮小室翠雲に師事し、1930年の日本南画院展に入選。同年帝展に入選。第12、15回、改組第1回帝展入選。終戦後再び上京してからは注文も増え、各画会へ入選し活躍した。**南画家**

#### 田中 良 (たなか・りょう/1923年～)

茨城県生まれ。1953年二科展入選、58年特選、74年会友特賞、76年会員、85年会員努力賞、二科会理事長。二科茨城支部長。89、05、10年紺綬褒章。73年茨城県美術展審査員、以降2006年まで委員、審査員。99～05年現代茨城作家美術展に出品。県美術展参与。**舞台美術家、洋画家**

#### 田中 良 II (たなか・りょう/1886～1974年)

東京生れ。東京美術学校卒。帝国劇場の背景部に所属し、舞台の背景を手がけた。1919年訪欧、訪米、視察。帰国ののち、新歌舞伎、新舞踊の舞台美術を手がけた。23年関東大震災後は、関西に移り、宝塚少女歌劇団(現・宝塚歌劇団)に入団して背景部を新設した。新聞小説や雑誌の挿絵、絵本も手がけており、28年貴司山治の小説『人造人間』をフォトロマン『霊の審判』として朝日新聞が連載する際、阪東妻三郎らの特写スチル写真の構成を手がけた。1974没、88歳。**舞台美術家、洋画家**

#### 田中良平 (たなか・りょうへい/1933年～)

大阪府生れ。1963年古野由男氏に師事(銅版画の手法を学ぶ)。66年日本版画協会入選。70年芥川龍之介「或る阿呆の一生」の英語版に銅版画を採用、出版。86年作品「托鉢 no.2」米国大統領ロナルド・レーガンのコレクションとなる。67年～個展;京都、神戸、東京、名古屋、ドイツ、カナダ、ニューヨーク、シカゴ。**版画家**

#### 田中良三 (たなか・りょうぞう/1874～1946年)

京都府生れ。1897年京橋に木版画を取り扱う東京尚美堂画局を開業。98年に神田神保町に店舗を移転、新版画は川瀬巴水、高橋弘明、土屋光逸等1930年から出版。30年代光逸の横三切判3枚と絵葉書判24枚の版画を版元印なし発行、巴水の大判版画6枚を30～31年「東京尚美堂」の版元印出版。松亭の三切判12枚、絵葉書判84枚、ミニチュア版画84枚を版元印なしで出版、笠松紫浪の版画出版。40年尚美堂の英語版目録に巴水、弘明、光逸の作品紹介。弘明の「タナカ版」、巴水の作品で「田中尚美堂版」、「東京尚美堂版」と呼ばれたのは、渡辺庄三郎の尚美堂版と区別。1946年没、72歳。45年東京大空襲で

版木は全て焼失。終戦直後に長男の田中貞三が事業を引き継ぎ、絵葉書、クリスマスカードなどに特化した事業展開によって成功。**版元**

#### 棚谷 勲 (たなたに・いさお/1943～1988年)

1943年生れ。洋画家の小磯良平に師事し、東京芸術大学油画科在学中に版画制作を始め、銅版画家として活躍。多くの作品は銅版画集に纏められている。棚谷勲の銅版画はモノクロームの内面世界を描いたような作風。74年「月と砂山」、76年「MOMBACH 幻想」、78年銅版画集「潜球飛行」刊行。1988年没、45歳。**版画家**

#### 棚橋文子 (たなはし・ふみこ/1932～2012年)

岐阜県生れ。1957年武蔵野美術学校日本画科卒。新制作協会で新作家賞3回、春季展賞9回。81～99年現代女流美術展出品。74年創画会賞。81年創画賞、会員。2000年千葉県美術会常任理事。05年千葉県教育功労者表彰。2012年没、80歳。2014年棚橋文子日本画展(柏市さわやか県民ギャラリー)。**日本画家**

#### 田辺 至 (たなべ・いたる/1886～1968年)

東京生れ。1910年東京美術学校西洋画科卒。19年東京美術学校助教授。27年帝展で帝国美術院賞。28年東京美術学校教授。文展、帝展に出品。18年特選。22～24年渡欧、エッチングを学ぶ。27年帝展で帝国美術院賞。29年洋風版画会を結成。36年海軍軍事普及部嘱託となり中支に派遣され記録画を制作、同40年軍務局嘱託を依頼された。55年神奈川県立美術館で回顧展開催。68年没、81歳。**洋画家、美教、版画**

#### 田辺竹次 (たなべ・たけじ/1918～1987年)

和歌山県生れ。1941年東京美術学校師範科卒。49～55年国画会に出品。54年美松画廊、村松画廊で個展。55年読売アンデ・パンダン展に出品。69年渡欧。1987年没、69歳。**洋画家**

#### 田辺孝次 (たなべ・たかつぐ/1890～1945年)

金沢市生れ。1913年東京美術学校彫刻科卒、18年同校美術史研究室の助手、19年教授となって工芸史を講じた。24年から2ヵ年工芸史研究の為欧米諸国に留学し、27年東京高等工芸学校講師を兼ねた。37年再び欧州各国に出張して38年帰朝、39～42年石川県立工業学校校長。著書に「伊太利彫刻史」「東洋美術史」「巴里から葛飾へ」「森」。金沢市で没、55歳。**美術史家・東美校教授**

田辺朋子 (たなべ・ともこ/1917～1969年)

東京生れ。文化学院卒。石井柏亭、山下新太郎、有島生馬に師事。1946年一水会会員。1969年没、52歳。洋画家

田辺彦太郎 (たなべ・ひこたろう/1910～2002年)

大阪生れ。信濃橋洋画研究所、大阪美術学校で絵を学び、1932年須田国太郎に師事。38年京都帝国大学哲学科美術美術史専攻卒、さらに理学部地質学鉱物学科で自然科学を修める。日本大学工学部助教授、49～77年岩手大学特設美術科絵画主任教授。国際美術評論家連盟正会員。個展で制作。洋画家、美術史家、美術評論家

田辺三重松 (たなべ・みえまつ/1897～1971年)

函館市生れ。1916年函館商業学校卒。26年北海道美術協会会員。28年二科展に入選。36年二科展特待。42年二科賞。45年行動美術協会及び全道美術協会を創立会員。63年渡欧。北海道文化賞。71年没、74歳。洋画家

田辺光彰 (たなべ・みつあき/1939～2015年)

神奈川県生れ。61年多摩美術大学彫刻科卒。62年イサム・ノグチの影響を受ける。68～75年世界50カ国を巡り、異文化に接する。68年ギャラリー・オカベで個展。79年ヘンリー・ムーア大賞展でジャコモ・マンズー特別優秀賞。80年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で宇部市野外彫刻美術館賞。81年ヘンリー・ムーア大賞展で優秀賞。2008年にはローマの国連食糧農業機関(FAO)本部に作品を設置。14年に横浜市に田辺光彰美術館。2015年没、76歳。彫刻家

田部光子 (たなべ・みつこ/1933年～)

台湾生れ。岩田屋百貨店勤務。1957年にオチ・オサム、菊畑茂久馬らと共に福岡を拠点に結成された前衛美術集団「九州派」のメンバー。九州女流画家展主宰。1988年九州派展 福岡市美術館企画。現在、94年から毎年ニューヨーク個展。ワシントン、アディロンダック・コミュニティ・カレッジ、パリにて個展。ブルゴイユ国際展。ギャラリーとわーる(福岡)にて毎年個展。95年福岡市美術連盟初代理事長。甘木市黒川NN美術館常設個展。2000年福岡市文化賞受賞。洋画家、九州派

田辺 穰 (たなべ・みのる/1916～1983年)

東京生れ。父は田辺至。1938年東京美術学校油画科卒、文展に出品し入選。以後、5回連続で入選し、光風会会員、春台美術会会員。その後、欧米に渡り、海外で個展を開催。40年文部省航海訓練所の嘱託として講師も務めている。43年海洋美術会員、

海洋絵画協会会員。戦後は運輸省航海訓練所の相談役になり、「日本丸」で航海するなど「海洋画家」と呼ばれる。81年「田辺至・穰父子展」が開催。横浜市で没、67歳。日動扱い作家。洋画家

田邊喜規 (たなべ・よしのり/1897～1986年)

山梨県生れ。1924年東京美術学校西洋画科卒。27年29年渡仏。28年サロン・ドートンヌ入選。36年山梨県美術協会の結成に参加。44年以降は郷里で活躍。1986年没、89歳。洋画家

谷 新 (たに・あらた/1947～2020年)

長野県生れ。千葉大学卒、流通専門誌、商業界入社。1972年美術出版社の芸術評論募集一席。内外の現代美術評論。77年パリ・ビエンナーレ(作家推薦)、82年ヴェネツィア・ビエンナーレ(日本館コミッションナー)、国際交流基金アセアン文化センターによる東南アジア現代美術調査および国内での展覧会企画。2000年光州ビエンナーレ(アジアセクション・コミッションナー/韓国)、18年水と土の芸術祭(総合ディレクター、新潟)などに携わる。97～17年宇都宮美術館館長。著書に『回転する表象 現代美術/脱ポストモダンの視角』(現代企画室、1992)、『北上する南風—東南アジアの現代美術』(同、1993)など。2020年没、73歳。評論家

谷内六郎 (たにうち・ろくろう/1921～1981年)

東京生れ。独学で絵画を学ぶ。1955年文藝春秋漫画賞。56年～「週刊新潮」の表紙絵を制作。62年作詞を担当した『遠い日の歌』が第17回芸術祭奨励賞を受賞。77年より「ねむの木学園」で絵の指導をはじめ、児童画展の開催。子供の美術教育に尽力。東京で没、59歳。洋画家、童画

谷上信博 (たにがみ・のぶひろ/1925～2011年)

兵庫県生れ。小磯良平に師事。新制作協会展に出品を続け、1966年第30回新制作協会展で新作家賞。70年第34回新制作協会展で会員に推挙。人の気配を無人の椅子やテーブルに託した画風で有名。2011年5月29日没、享年86歳。(佐)洋画家

谷川晃一 (たにがわ・こういち/1938年～)

東京生れ。1956年攻玉社高等学校卒。20歳自由美術展入選。63年読売アンデパンダン展出品。64年「記号の増殖」シリーズで個展(内科画廊/東京)。美術批評など文筆活動も開始。エッセイスト・美術評論家・絵本作家。妻も画家・エッセイストの宮迫千鶴。88年伊豆高原アートフェスティバル運営委員長。66年シェル美術賞。82年マイアミ版画ビエンナーレ優

秀賞。2000年日本絵本賞。**洋画家、絵本、版画、評論**

**谷川泰宏** (たにがわ・やすひろ/1957年～)

徳島県生れ。1979年東京藝術大学美術学部油画科卒(大橋賞)、81年同大学大学院修了、84～87年同大学油画科助手。82年泰明画廊個展。87年O氏記念賞。東京セントラル美術館油絵大賞展で大賞。90年徳島県鳴門総合運動公園体育館壁画制作。93～96年朝日新聞社日曜版連載小説「クレオパトラ」挿画制作。**洋画家、挿絵**

**谷口午二** (たにぐち・うまじ/1894～1987年)

鹿児島市生れ。1918年東京美術学校西洋画科卒、～研究科修了。20年県立第一高等女学校で教鞭。22年アトリエを新築。金羊会の結成、23年南国美術展の創設につながる。54年鹿児島市立美術館初代館長。鹿児島の文化振興に尽力した。1987年没、93歳。**洋画家、美教、美術館長**

**谷口午二 II** (たにぐち・うまじ/1894～1987年)

鹿児島県生れ。旧姓益山。1914年第3回光風会展に初入選。18年東京美術学校西洋画科本科及び教員志望課程卒。高輪中学校教諭。19年美校研究科卒。20年鹿児島県立第一高等女学校教師となる。23年南国美術展を創設。34年～59年まで光風会展に出品。54年鹿児島市立美術館初代館長となる。87年1月13日没、享年93歳。(佐)**洋画家、美教、美術館長**

**谷口香嶺** (たにぐち・こうきょう/1864～1915年)

大阪生れ。京都の幸野棋嶺の塾に入門。歴史画にすぐれ、竹内栖鳳らとともに棋嶺門の四天王といわれる。京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校でおしえた。1915年没、52歳。明治-大正時代の**日本画家、美教**

**谷口 茂** (たにぐち・しげる/1948年～)

福岡県生れ。1973年日動版画グランプリ展。78年ベルクナック・メモリアル展受賞。79年JAF展受賞。80年クラコウ国版ビ受賞。イビザ・ビエンナーレ特別賞。82年セントラル版画大賞展受賞。養清堂画廊、トルマンコレクション取扱い作家。**版画家**

**谷口利夫** (たにぐち・としお/生誕年不詳～)

1958年開設の「西部美術学園」初代主宰者。61～65年にかけて、九州派に参加。65年福岡市に創作拠点を移し、「西部美術学園」は同じ九州派の働正が引き継ぐ。西部美術学園は三池争議が始まる前年

である1958年に、前衛美術家集団「九州派」の画家によって始められ、美術教育の場としてだけでなく、芸術家や文学者との交流拠点にもなった、西部美術学園における、これまでの60年にわたる美術創作活動の資料や作品を展示(大牟田市石炭産業博物館)**美術家、九州派**

**谷 信一** (たに・しんいち/1905～1991年)

三重県生れ。1930年東京帝国大学文学部美術史学科卒、同年同大学文学部副手、32年東京帝国大学史料編纂所嘱託を経て、42年京城帝国大学助教授に任官、46年同大学の廃止により退官。49年東京芸術大学美術学部講師、52年神戸大学文理学部教授、52～58年東京芸術大学教授を併任、66年神戸大学を停年退官。66～75年共立女子大学文芸学部教授。47年から日本歴史学会編集委員となり、のち評議員を勤めた。52年からブリヂストン美術館運営委員、53～66年東京都美術館参与、83年石橋財団理事。その研究領域は広範にわたり、仏教美術から絵巻物、大和絵、室町水墨画、肖像画、狩野派、土佐派、宗達・光琳派、南画にまで及んでいるが、史料編纂所時代に読破した資料にもとづいて、我国中世における中国絵画受容のあり方を明らかにした一連の論は「室町時代美術史論」(東京堂 昭和17年刊)に収載されている。他の主な著作は「近世日本絵画史論」(道統社 昭和16年刊)「日本美術史概説」(東京堂 昭和23年刊)「御物集成—東山御物・柳営御物」(共編 淡交社 昭和47年刊)など。東京で没、85歳。**美術史家、美教**

**谷出孝子** (たにこで・たかこ/1907～1987年)

京都市生れ。1925年同志社女学校卒。関西美術院で黒田重太郎に師事。27年関西美術院有志で白聖会を結成出品。32年～38年黒田姓にて39～43年まで二科展に出品、10回入選。48年大阪で女流総合美術協会の創立に参加。渡仏し、藤田嗣治の知遇を得た。東京で没、80歳。**洋画家**

**谷出頼郎** (たにこで・ひでお/1936～2014年)

鳥取県生れ。1967年二紀展で褒状。68年同展奨励賞。78年二紀展で会員賞。70年京展で市長賞。71年須田賞。81年紺綬褒章。84年ウィーン国際美術展で市長賞。88年現代洋画精鋭選抜展で金賞。97年フィレンツェ『美の奇跡』展でフィレンツェ県賞。2014年没、78歳。**洋画家**

**谷 徳蔵** (たに・とくぞう/生没年不詳)

三重県生れ。1924、25、27、28年日本水彩画会展入選。37年三重県神戸中学校教員。西田武雄の

エッチング講習会に参加。(佐) **水彩画家、版画**

**谷中安規** (たになか・やすのり/1897～1946年)

奈良県生れ。木版画家。永瀬義郎『版画を作る人』から影響を受ける。1931年日本版画協会の結成に参加。32年版画誌『白と黒』『版芸術』の同人となり、幻想的な画風や都会の情景をとらえた作品を発表。終戦の翌年、東京で没、49歳。(出典 わ眼) **版画家**

**谷 福太** (たに・ふくた/1907～1987年)

大阪生れ。1927年 赤松麟作洋画研究所に入る。56年新世紀美術協会創立参加後、会員。62年新世紀展会員特賞、大阪市賞。64年新世紀展黒田夫人賞。74年大阪三越個展。87年安井賞展「或る時」出品、大阪府文化芸術賞、黒田賞、黒田婦人賞。1987年没、80歳。 **洋画家**

**谷 文晁** (たに・ぶんちょう/1763～1841年)

東京生れ。12歳の頃、父の友人で狩野派の加藤文麗に学び、18歳の頃に中山高陽の弟子渡辺玄対に師事した。20歳のとき文麗が歿したので北山寒巖につき、北宋画を修めた。鈴木芙蓉にも学んだとされる。その後も狩野光定から狩野派を学び、大和絵では古土佐、琳派、円山派、四条派などを、さらに朝鮮画、西洋画も学ぶ。26歳の時長崎旅行を企て、大坂の木村兼葭堂に立ち寄り、鉏雲泉より正式な南画の指南を受けた。長崎に着いてからは張秋穀に画法を習う。古画の模写と写生を基礎にし、諸派を折衷し南北合体の画風を目指した。画域は山水画、花鳥画、人物画、仏画、画様の幅も広く、「八宗兼学」といわれる独自の画風を確立。関東南画壇の泰斗。東京で没、77歳。 **江戸時代、南画家、文人画家**

**谷本重義** (たにもと・しげよし/1929年～)

香川県生れ。1953年武蔵野美術大学油絵科卒。59年自由美術協会会員。72年ミヤマ画廊で坂崎乙郎による企画展。73年安井賞。87年サロン・ド・パリ展でパリ大賞('88年「狂奏」も)。94～96年フランス、イタリア取材旅行。2001年現代美術選抜展、香川県より文化功労者賞。2002年安井賞。03年四国新聞文化賞。 **洋画家**

**谷脇素文** (たにわき・そぶん/1878～1946年)

高知市生まれ。12歳で小松洞玉に狩野派を学び、のちに四条派の柳本素石に師事。高知市高等小学校で図画教師を勤めた。のちに上京して橋本雅邦に師事し、油彩の勉強もした。帰郷後は新土佐新聞を経て高知新聞社に入社、「ポンチ絵」と呼ばれた痛烈な社会風刺漫画を制作した。その後再度上京して講

談社に入社、山田はじめとともに川柳漫画を発表した。風刺と人情味あふれる作品を多く残している。土陽美術会の会員として日本画も制作した。1946年没、69歳。 **日本画家、漫画(ポンチ絵)**

**田能村竹田** (たのむら・ちくでん/1777～1835年)

豊後(大分県)生れ。藩校由学館の頭取。藩内の農民一揆の際、藩政改革の建言が入れられず隠退。絵を谷文晁に学び、繊細な筆致の独自の画風を確立。幕末文人画壇の代表的な作家。頼山陽らと親交をもち、詩や書にもすぐれた。大阪で没、58歳。 **江戸時代後期の南画家**

**田能村直入(小虎)** (たのむら・ちよくにゅう(しょうこ)/1814～1907年)

豊後の国生れ。1822年田能村竹田に入門、養嗣子。78年京都府知事に画学校の設立を陳情、80年京都画学校が開校、81年初代摂理(校長)。90年内国勸業博覧会で二等妙技賞。91年自宅に南宗画学校開設。97年日本南画協会を結成、京都で没、92歳。 **日本画家、南画家、美教**

**田端麻子** (たばた・あさこ/1972年～)

藤沢市生れ。1993年神奈川県美術展入選(以降～96年)。96年多摩美術大学絵画科油画専攻卒。97年銀座・OギャラリーUP・S 個展。98年吉祥寺・Jin 個展。03年柏わたくし美術館個展。04年神戸わたくし美術館個展。07年从展以降出品。人人展会員。07年 KIAF(韓国)、猫秤展(湯島羽黒洞)。 **洋画家**

**田畑一作** (たばた・いっさく/1915～1994年)

京都生れ。死去した。父は菊池芳文門下の日本画家田畑秋濤。1933年京都府立一中卒。この頃より彫刻に志し、33年関西美術院に入り黒田重太郎に絵を学ぶ。34年上京して二科会の番衆技塾に入学。藤川勇造に学び、菊池一雄に師事。36年新彫塑協会展入選。41年京都市展入賞。41年新制作派協会展入選。44年新制作派協会展で新作家賞受賞。46年京展で京都新聞社賞受賞。46年上京、新制作展新作家賞、49年同会会員。62年9月ガーナのアクラ市内にある国立コレブ病院に、同院で死去した野口英世の胸像をたてた。73年銀座松屋7階画廊で「田畑一作展—アフリカ」を開催。83年東京現代彫刻展で大衆賞。59年エーザイ本庄工場造園、62年ガーナ市コレブ病院構内の日本庭園造庭、東京で没、78歳。 **彫刻家**

**田原 輝** (たはら・てる/1900～1982年)

佐賀県生れ。1922年東京高等師範学校卒。39年帝展入選。39年海洋美術展で海軍大臣賞。41年新文展無鑑査。42～63年東京教育大学教授。53年日展で特選、朝倉賞。59年日展会員。東京教育大学名誉教授。東京で没、81歳。 **洋画家、美教**

**田伏 勉** (たぶせ・つとむ/1949年～)

大阪生れ。1973年大阪市立美術研究所特待卒。82年昭和会展招待、82、83年独立展で安田火災美

術財団奨励賞。85年独立展で高島賞。89年独立賞、90年独立美術協会会員。**洋画家**

「石障 II」を出品。高岡市で市内の小中朝交で木版画教室を開催、講師。73年高岡市民功労賞。富山県で没、85歳。**版画家**

**田淵 巖** (たぶち・いわお/1901～1986年)

鳥取県生れ。1921年上京して川端画学校に学び、22年東京美術学校洋画科に入学、猪熊弦一郎らとともに藤島武二、黒田清輝に学ぶ。36年新制作派協会結成に参加。34年帰郷、香田勝太らとともに麓人会を結成。以後米子農工学校、米子東高等学校などで教鞭。1986年没、86歳。**洋画家、美教**

**玉井徳太郎** (たまい・とくたろう/1902～1986年)

広島市生れ。1925年川端画学校で学ぶ。結城素明に師事。川端画学校を首席で卒業。「少年猿飛佐助」や川端康成「万葉姉妹」、檀一雄などの挿絵や絵本を描く。また川端康成、野間省一、山岡荘八、瀬戸内寂聴らの肖像画を描いたことで知られている。出版美術家連盟会員。1986年没、84歳。**日本画家、挿絵**

**田淵俊夫** (たぶち・としお/1941年～)

東京生れ。1965年東京藝術大学美術学部日本画専攻卒、67年同大学院修了。68年院展入選。70年院友、82年特待、85年同人、96年評議員、2006年理事、09年常務理事、11年代表理事。70年愛知県立芸術大学の助手、74年講師、84～85年助教授。2009年客員教授。71年シェル美術賞展で佳作賞。78年東京セントラル美術館日本画大賞展で優秀賞。79年山種美術館賞展で優秀賞。82年日本美術院奨学金(前田青邨賞)受賞、82、85年日本美術院賞(大観賞)受賞。83、84年院展で奨励賞。85年東京藝術大学美術学部保存修復技術助教授。95年同大学院美術研究科教授、2005年副学長。88年院展で文部大臣賞受賞。90、94年、個展院展で総理大臣賞受賞。98年MOA岡田茂吉賞大賞。**日本画家**

**玉井力三** (たまい・りきぞう/1908～1985年)

上越市生れ。太平洋画会研究所で、中村不折の指導を受ける。戦前、満州国立新京美術院教授、戦後、洋画団体の示現会創立に参画。人物画を得意とした玉井力三は、小学館の学習雑誌に25年にわたり表紙の人物画を描き続けた。柿崎に於いて北彩会を主管し、地方文化の向上につくしている。1985年没、77歳。**洋画家、表紙**

**田淵安一** (たぶち・やすかず/1921～2009年)

福岡県生れ。洋画家、猪熊弦一郎に師事。東京大学美術史卒後フランス留学、同地に定住。コブラ・グループと交友。1985年フランス政府よりオフィツェ勲章。和漢洋の伝統を踏まえ、鮮明な色彩による抽象画を発表。パリで没。88歳。1996年神奈川県立近代美術館で個展。(出典 わ眼)**洋画家、版画**

**玉置照信** (たまおき・てるのぶ/1879～1957年)

和歌山市生れ。1896年浅井忠に学ぶ。98年明治美術会創立十年記念展に出品。1900年東京美術学校西洋画科選科卒。02年「紫玉会」を結成し、油彩100点出品。03年内国勸業博覧会に出品入選。03年東京の国華座の舞台装置を担当。以後は舞台装置家として活動、真砂座・本郷座、新富座・明治座・歌舞伎座、京都の南座、名古屋の御園座、大阪の角座・中座などの大劇場でも舞台装置を手掛けた。東京で没、78歳。58年早稲田大学坪内博士記念演劇博物館959点が寄贈。遺作展が大手町・産経会館が開催、『玉置照信画伯遺作集』が上梓。**洋画家、水彩画、版画**

**田部光子** (たべ・みつこ/1933年～)

台湾生れ。九州女流画家展主宰。1988年九州派展 福岡市美術館企画。現在、94年から毎年ニューヨーク個展。ワシントン、アディロンダック・コミュニティ・カレッジ、パリにて個展。ブルゴイユ国際展。ギャラリーとわーる(福岡)にて毎年個展。95年福岡市美術連盟初代理事長。甘木市黒川INN美術館常設個展。2000年福岡市文化賞。**洋画家**

**玉川信一** (たまがわ・しんいち/1954年～)

福島県生れ。1976年東京教育大学教育学部卒。78年同大学院卒。1977年二紀展二紀賞('78 '79 優賞 '85 同人優賞 '89 会員優賞 '93 宮本賞、'08 文部科学大臣賞)。85年安井賞展佳作賞・昭和会展昭和会賞。92年文化庁在外研修員特別派遣。94年文化庁買上げ。個展(東京セントラル絵画館・東京日動画廊・岡崎画廊・日本橋三越・茨城県つくば美術館)現在、二紀会委員・筑波大学芸術学系助教授。**洋画家**

**玉井忠一** (たまい・ちゅういち/1910～1995年)

富山県生れ。1928年県立高岡工芸高校卒。棟方志功に師事、創作活動をはじめる。49～58年国展入選。日本版画協会展に出品し、会員。85年円形を中心に幾何学的なフォルムによって構成した木版画

**玉木鶴亭** (たまき・かくてい?/1807～1879年)

文化4年生まれ。通称は官平、字は又新。別号に一源、九阜、錦江などがある。明治に入って、鶴亭を通



称とした。幼いころから画を好み、北宗画にも、南宗画にも通じ、洋画も得意とした。代々西築町に住み、唐船掛宿筆者の役をつとめた。明治12年、73歳で死去した。**江戸絵師、長崎派、北宗画、南宗画**

**玉置正敏** (たまき・まさとし/1923～2001年)

栃木県生れ。新制作会員賞、新制作協会会員。東美、国際アート会員新人賞。超現実主義の画家の一人。東京で没、78歳。**洋画家**

**玉沢潤一** (たまさわ・じゅんいち/1910～1980年)

兵庫県生れ。信濃橋洋画研究所に学ぶ。全関西洋画協会会員。創造美術協会会員。のち二科展に出品。1955年行動美術協会会員。1980年没、70歳。**洋画家**

**玉之内満雄** (たまのうち・みつお/1929～1997年)

埼玉県生れ。寺内萬治郎、尾島薫に師事。埼玉師範学校卒。旺玄会会員。1958年丸善で第1回個展。68～69年渡仏、各サロン出品。72～94年小田急で連年個展。76年渡仏、パリで個展、以降度々渡仏。紺綬褒章2回。97年没、68歳。(出典 わ眼)**洋画家**

**田村一男** (たむら・かずお/1904～1997年)

東京生れ。1924頃本郷絵画研究所で学ぶ。1940年光風会会員。46年日展特選。69年日展理事のち参事、顧問。63年日本芸術院賞、80年日本芸術院会員。82年朝日新聞社より「田村一男画集」を刊行。86年長野県信濃美術館で「信州の風景画 田村一男・心象の世界」展。92年文化功労者。東京で没、92歳。**洋画家**

**田村孝之介** (たむら・こうのすけ/1903～1986年)

大阪生まれ。1920年太平洋画会研究所に学ぶ。21年小出檜重に師事。24年信濃橋洋画研究所に入所。37年二科会員。40年従軍画家。47年第二紀会を創立。52～53年渡欧。55年兵庫県文化賞。74年二紀会理事長。83年日本芸術院会員。85年文化功労者。東京で没、82歳。**洋画家**

**田村宗立** (たむら・そうりゅう/1846～1918年)

京都府生れ。僧侶。写生画に熱中。先ず英語を修める。1972年ドイツ人ランケッタに油絵を学ぶ。72年京都博覧会に出品。81年京都府画学校で西洋画科(西宋)教員。89年画塾・明治画学館を設立。90年京都美術博覧会で二等銀牌。1901年「関西美術会」発足に発起人。06年関西美術院を創立。晩年は仏画、日本画を描いた。京都で没、71歳。東の由一、西の宗立。京都洋画の先駆者。**洋画家、日本画、美教**

**田村泰二** (たむら・たいじ/1903～1949年)

東京生れ。太平洋絵画研究所に学ぶ。東京美術学校卒。1930年帝展に工芸入選、以後帝展、文展に工芸出品。31年渡欧。34年帝展特選。37年文展無鑑査。1949年没、45歳。**洋画家**

**田村能里子** (たむら・のりこ/1944年～)

愛知県生れ。1966年武蔵野美術大学卒。69～73渡印。82年昭和会展優秀賞。83年現代の裸婦展大賞。84年国際形象展(～86)。日本青年画家展(～89、88・優秀賞)。86年文化庁在外研修員として北京中央美術学院留学。89年日本秀作美術展。前田寛治大賞展佳作賞。中国政府より軒轅杯国際特別賞。92年紺綬褒章。無所属。**洋画家**

**田村文雄** (たむら・ふみお/1941～1998年)

長野県生れ。1968年東京芸術大学院修了。69年個展、日本版画協会展(受賞)。70年フィレンツェ国際版画ビエンナーレ展(大賞)。72年東京国際版画ビエンナーレ展。75年女子美術大学専任講師(洋画専攻一版画担当)。80年現代版画の一断面展(東京都美術館)、94年果実の受胎展(埼玉県立近代美術館)。98年版画の技と美の世界展(相模原市民ギャラリー) 社会法人日本版画協会会員。大学版画学会会員。1998年没、57歳。**版画家**

**多毛津忠蔵** (たもつ・ちゅうぞう/1888～1975年)

鹿兒島県生れ。専修大学中退。1914年東洋、西洋の美術研究のためアジア、欧州を歴訪。20年NYに定住。24年NYの独立美術協会展に出品。27年野田英夫、国吉康雄らと本格的な創作活動。32年ACAギャラリーで個展。47年アメリカ芸術家組合会員。75年没、87歳。**洋画家**

**樽谷清太郎** (たるや・せいたろう/1903～1973年)

高岡市生れ。1928年東京美術学校彫刻科卒、在学中に帝展初入選以後、連続8回入選 文展3回、文展無鑑査出品、日展4回入選、日展依囑出品。日比谷公園のペリカン噴水の制作も手掛けた。**彫刻家**

**俵屋宗達** (たわらや・そうたつ/生没年不詳)

能登か加賀生? 桃山から江戸初期にかけての画家。俵屋は家号。伊年・対青軒の印を用いた。宗達光琳(こうりん)派、いわゆる琳派の祖。京都の上層町衆の出身とみられ、本阿弥光悦書の和歌巻の金銀泥下絵を描き、また扇面画や色紙絵などに大和絵の伝統を新解釈した斬新(ざんしん)な装飾的画法を示し、水墨画にも新風を吹き込んだ。「風神雷神図」など屏風(び

ょうぶ)の大作も多い。1643年没か。**桃山、江戸時代初期の絵師、宗達光琳派**

委員。光風会展、新槐樹社展にも出品、61年新槐樹社会員、62年同委員。1977年没、77歳。**水彩画家**

**俵 有作** (たわら・ゆうさく/1932～2004年)

広島県生れ。洋画家小林和作に師事。上京してからは民藝の収集、紹介にたずさわりながら独学で絵を描く。そうした彼の作品は芹沢銈介や猪熊弦一郎らに愛され、1990年前後から制作された墨と淡彩による作品を制作。2004年没、72歳。**水墨画家**

**丹阿彌岩吉** (たんあみ・いわきち/1901～1992年)

東京生れ。1917年横山大観に入門し、19年再興院展に入選、19年院展試作展で「みだれ咲き」が甲賞。26年徳太子奉讃展に出品。昭和期に入り落合朗風らの明朗美術連盟展に参加、36年同人。36年東京日本橋の白木屋で個展、以後連年個展を開催。東京日本橋白木屋、東京銀座鳩居堂画廊、東京日本橋三越、日本橋白木屋、花鳥花卉から特に近年は山水風景画に充実した画境を展開していた。東京で没、91歳。**日本画家**

**丹阿弥丹波子** (たんあみ・たわこ/1927年～)

東京生れ。日本画家丹阿彌岩吉が父。1942年文化学院女学部在学中木炭デッサンを習う。54年独立展入選。56年駒井哲郎に師事、銅版画。58年春陽展入選、以降連年出品し、研究賞、岡鹿之助賞。71年資生堂ギャラリーで個展。氷上町立植野記念美術館(現・丹波市立植野記念美術館)、町田市立国際版画美術館など、各地で展覧会を多数開催。また、遠藤周作、芥川喜好などの本の装画。現在、春陽会会員、日本美術家連盟会員。**版画家**

**丹下富士男** (たんげ・ふじお/1902～1962年)

盛岡市生れ。1919年川端画学校に通う。25年東京美術学校西洋画科卒。32年二科展入選、39年特待、41年会友、55年退会。古河電気株式会社の宣伝部でインテリア・デザイン。55年一陽会創立に参加。61年造形美術学校で指導。東洋美術学校に移り指導。東京で没、60歳。**洋画家、美教**

**丹治日良** (たんじ・あきら/1925年～)

福島県生れ。吉井忠に師事。第24回新制作展新作家賞。新制作協会協友 丹治日良「竣介断片」著、窪島誠一郎の「額のない絵」にも登場。**洋画家**

**丹野良輔** (たんの・りょうすけ/1899～1977年)

青森市生れ。青森県立師範学校卒業後上京し曾宮一念に師事、同舟社でデッサンを学んだ。1948年日本水彩展で三星絵具賞、日本水彩画会会員、50年

ち

**近岡善次郎** (ちかおか・ぜんじろう/1914～2007年)

山形県生れ。1931年山形県立新荘中学校卒。33年文化学院美術部にて、石井柏亭、有島生馬、山下新太郎に学ぶ。56年文部省留学生として渡欧。60年一水会会員。61年太平洋地域絵画展に日本代表として出品。63年安井賞。71年「明治の西洋館」を出版。78年JR東日本仙台駅ステンドグラス「杜の賛歌」原画作成。99年新庄市名誉市民。2007年没、93歳。14年誕生100周年記念展開催。**洋画家**

**千種掃雲** (ちぐさ・そうん/1873～1944年)

京都市生れ。1895年竹内栖鳳に師事、日本画を学ぶ。97年全国絵画共進会で2等褒状。98年後素(こうそ)青年会秋季大会で第1席、1903年の第5回内国勸業博覧会で褒状。03年聖護院洋画研究所で浅井忠に師事し、洋画を学ぶ。06「丙午会」を結成。06年関西美術院幹事。14、17年文展入選。15年京都高等工芸学校の講師。22年平和記念東京博覧会美術館に出品。44年没、71歳。**日本画家**

**智内兄助** (ちない・きょうすけ/1948年～)

愛媛県生れ。1974年東京藝術大学大学院油画科修了。78～81年日仏現代美術展でフィガロ1席、2席、特別賞。81年川上画廊で個展。87、90年安井賞展で特別、佳作賞。88年日本青年画家展で優秀賞。92年宮尾登美子作の連載小説の挿絵。和紙にアクリル絵の具を使用。95年小田急美術館、刈谷市美術館で個展。2001年久万美術館で個展。**洋画家、挿絵**

**千野香織** (ちの・かおり/1952～2001年)

東京生れ。1971年東京学芸大学附属高等学校卒。78年東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻日本美術史修士課程修了。79年名古屋徳川美術館研究員。83年同大学院博士課程単位取得退学、東京国立博物館資料部研究員。学習院大学文学部哲学科助教授、94年同校教授。93年西和夫との共著『フィクションとしての絵画』で小泉八雲賞。94年頃から、若桑みどりらと共に美術史にジェンダー、フェミニズムの視点を取り入れた。東京で没、49歳。**美術史家、美教**

**千野 茂** (ちの・しげる/1913～2002年)

新潟県生れ。1939年日本美術院研究所に入所、新海竹蔵に師事。42年院展入選、55年同人。61年

院展彫刻部解散、彫刻家集団S・A・Sを結成。64年国画会会員。76年東京芸大教授。81年長野市野外彫刻賞。82年中原悌二郎賞。静けさをたたえた人物像で知られた。東京で没、89歳。彫刻家

年没、71歳。洋画家

千葉 潔 (ちば・きよし/1953年～)

大阪生れ。1976年大阪芸術大学美術科卒。高校美術教師。93年～東京 大阪 神戸 和歌山にて個展開始。96年上高地温泉ホテルで個展。97～2004年自宅アトリエで絵画教室主宰、その他 幼稚園公民館などで絵画指導。15～松本市美術館友の会理事。16年～NHK 文化センター松本教室 水彩・パステル画入門講師。洋画家、美教

千葉七郎 (ちば・しちろう/1919年～)

北海道生れ。1941年帝国美術学校西洋画科卒。38年光風会展に油彩画が入選。38年「小樽創作版画協会」を設立。38年日本版画協会展に入選。小樽で初個展「千葉七郎油絵展覧会」を開催。45年洋画家の国松登らと小樽で「茜絵画研究所」を開設。「小樽美術協会」の結成に参画し、事務局を担当。48年からは全道美術協会展に出品、奨励賞。79年に『写真集 千葉七郎 小樽の建物』(噴火湾社)を出版。全道美術協会会員。北海道版画協会会員。洋画家、版画家、美教

千葉 勝 (ちば・しょう/1926～1987年)

岩手県生れ。1951年武蔵野美術学校西洋画科卒。個展開催。新樹会展、二紀会展に出品。83年帰国。仙台市で没、60歳。洋画家

千葉 衛 (ちば・まも/1911～1973年)

宮城県生れ。古川中学校卒業後、東京美術学校に入学。在学中に、東光会、光風会に入選、第15回帝展入選、同校研究科中退後、台湾で教職についた。戦後は仙台で教鞭をとり、光旗会結成に参加した。1973年没、62歳。洋画家、美術教育

千原三郎 (ちはら・さぶろう/1905～1985年)

新潟県生れ。1926年東京高等工芸学校卒。52年自由美術協会展に出品、58年会員。61～62年渡欧。長岡工業、直江津商工の教師、玉川大学高等部、跡見女子大学の教授。70年無所属。美術教科書「造形」の編集。1985年没、80歳。洋画家、美教

千本裕三 (ちもと・ゆうぞう/1923～1994年)

和歌山県生れ。大阪中野島洋画研究所に学ぶ。1950～64年春陽会展に出品。66年アメリカ・ヒューストン日本作家現代展招待出品・73年日本洋画商展招待出品。五條市文化賞。無所属。92年新宿伊勢丹で個展。生涯のテーマを大和・奈良の風景に絞る。1994

中馬泰文 (ちゅうま・やすふみ/1939年～)

大阪生れ。1958年大阪市立工芸高等学校美術科日本画専攻卒、62年金沢美術工芸大学美術学科絵画専攻(日本画専攻)卒。61年新象作家協会展に出品、佳作賞。66年シェル美術賞展佳作賞。75年現代版画コンクール展出品、以降第2、3、4回(1977、79、81年)出品、81年コンクール賞。84年「日本国際美術展」出品。夙川学院短期大学美術・デザイン学科教授を経て現在は大阪芸術大学デザイン学科客員教授。日本画、版画

鳥海青児 (ちょうかい・せいじ/1902～1972年)

平塚市生れ。金子保に学ぶ。関西大学経済学部卒。1928年春陽会賞。30～33年渡欧。33年春陽会会員、43年独立美術協会会員。56年芸術選奨文部大臣賞。58年現代日本美術展で最優秀賞、59年毎日美術賞。72年没、70歳。(出典 わ眼)洋画家、版画

張 光隆 (ちよう・こうりゅう/1945年～)

中国生れ。1960～1980年代の国家的な美術展に作品が展示された。「中国現代美術家辞典」「中国当代美術家人名録」に記載あるが略歴等不詳。洋画家

帖佐美行 (ちようさ・よしゆき(1915～2002年))

鹿儿島県生れ。小林照雲、海野清に学ぶ。伝統の技法に溶接、鍛造などの技法を取り入れ、建築の壁面装飾などにも分野をひろげた。現代工芸美術家協会や日本新工芸家連盟の設立に参加。1966年建築装飾「夜光双想」で芸術院賞。74年芸術院会員。93年文化勲章。2002年没、87歳。作品に「創生」など。彫金家

長 新太 (ちよう・しんた/1927～2005年)

東京生れ。1949～55年東京日日新聞社嘱託社員、漫画「ポン君カン君」「東京日日新聞」を連載。56年真鍋博、井上洋介、久里洋二と「四人の会」を結成、同人誌『がんま』創刊。58年堀内誠一の勧めで絵本『がんばれさるのさらんくん』(文・中川正文、こどものとも24号、福音館書店)の絵を担当。59年『おしゃべりなたまごやき』(文・寺村輝夫、こどものとも25号、福音館書店)で文藝春秋漫画賞受賞。61年イタリア国際漫画サロン国際漫画賞。69年『よるのわたしのおともだち』(文・今江祥智、世界出版社)で東京イラストレーターズクラブ賞。74年日本国際児童図書評議会オナーリストに選抜、『おしゃべりなたまごやき』(改訂版)で国際アンデルセン賞国内賞。77年『はるですよふくろうおばさん』(講談社)で講談社出版文化賞絵本

賞。81年『キャバツくん』(文研出版)で絵本につぼん大賞受賞。84年『ぞうのたまごのたまごやき』(文・寺村輝夫, 福音館書店)で小学館絵本賞。94年紫綬褒章受章。『こんなことってあるかしら?』(クレヨンハウス)で産経児童出版文化賞美術賞。96年個展(氷上町立上野記念美術館、他)。98年絵本原画の世界展「こどものとも」の絵画表現(宮城県立美術館、他)。『ゴムあたまポンたろう』(童心社)で日本絵本賞受賞。2002年エクソンモービル児童文化賞。個展(ふくやま美術館)。05年『ないた』(文・中川ひろたか, 金の星社)で日本絵本大賞。2006-07年、個展(ちひろ美術館、刈谷市美術館、他)。2005年没、78歳。絵本作家

#### 鳥文齋栄之 (ちょうぶんさい・えいし/1756~1829年)

江戸生れ。直参旗本。絵は初め狩野典信に学び後に浮世絵に転じた。1781~83年將軍徳川家治の小納戸役に列し絵の具方を務めた。文齋齋に師事し、81~89年頃から浮世絵師として活動。寛政(1789年~1801年)期に栄之独自の静穏な美人画の画風を打ち立てた。1800年 後桜町上皇に仙洞の御文庫に納められたという。その後は栄之は没年まで優れた肉筆画を描いてお98年頃には錦絵の一枚絵の制作を止める。1829年没、73歳。江戸時代後期の浮世絵師

#### 鄭 相和 (ちよん・さんふあ/1932年~)

慶尚北道生れ。1956年国立ソウル大学校美術大学絵画科卒。67年パリに渡り、69年来日、神戸、大阪の信濃橋画廊、東京の村松画廊で個展を開催。関西の前衛美術シーンにも足跡を残す。モノクローム絵画を志向した。再び渡仏し、現在はソウル在住。洋画家、版画

#### 鄭 詔文 (ちよん・ちえむん/1918~1989年)

慶尚北道生れ。1925年両親と共に来日。働きながら小学校を卒業し、戦後、飲食店などを経営する一方、朝鮮半島の美術品を蒐集。また、昭和44年から56年まで朝鮮文化社から季刊雑誌「日本の中の朝鮮文化」を刊行した。同63年10月25日、蒐集した高麗青磁、李朝白磁などの陶磁器、仏像、書画、家具など1700点あまりを所蔵する高麗美術館を自宅のあった京都市に設立し、財団法人とした。在日韓国人一世としての自己の体験から、美術品を通して故国の文化を理解、顕彰し広く共感を分かとうとしたもので、朝鮮考古・美術の調査、研究もあわせて行ないたいとの遺志を汲んで、現在は「高麗美術研究所」があわせて設立されている。京都で没、70歳。コレクター、高麗美術館長

#### 鎮西直秀 (ちんぜい・なおひで/1953年~)

高知県生れ。1972年東京芸術大学絵画科入学。75年現代洋画精鋭選抜展金賞。77年東京芸術大学卒、パリ・サンターヌ画廊で個展。78年沖縄平和祈念堂に「守禮の月」100号を寄贈。77年~欧米、アフリカ、アジア各国、ソ連、オーストラリア、タヒチ、中国等取材。81年現代洋画精鋭選抜展記念大展特別奨励賞。93~98年現代洋画精鋭選抜展審査員。洋画家

つ

#### 塚越仁慈 (つかごし・ひとじ/1948年~)

静岡県生れ。武蔵野美術大学入学。「第一美術展」初出品、大賞候補となり奨励賞。渡仏、ジャン・ジャンセンに師事。「太平洋展」文部大臣奨励賞。「太平洋展」太平洋美術会賞。「第14回現代美術展」入選。「第6回日仏現代美術展」入選(パリ・グランパリ美術館)。「第80回記念太平洋展」内閣総理大臣賞。北野美術館が作品を買い上げ。「濤展」に出品。ハプスブルグ宮家より王朝芸術遺産賞。紺綬褒章受賞。太平洋美術評議員、日本美術家連盟会員。洋画家

#### 司 修 (つかさ・おさむ/1936年~)

前橋市生れ。油彩、石版、エッチング、挿絵、装丁、絵本分野で活躍。絵本「ちびっこわにのぼうけん」。1976年「金子光晴全集」装丁で講談社出版文化賞。53年画文集「風船乗りの夢」で小学館絵画賞。93年「犬」で川端康成文学賞。99年法政大学教授。2007年小説「ブロンズの地中海」毎日芸術賞。24年エッセイ「本の魔法」で大仏次郎賞。版画家、装填、絵本、美教

#### 塚原清一 (つかはら・せいいち/1911~1985年)

千葉県生れ。独立美術研究所にも通い糸園和三郎らと四軌会を結成。1938年「創紀美術協会」結成に会員として参加。39年美術文化協会の創立に参加。77~79年「飾画」に出品。1985年没、74歳。洋画家

#### 塚原琢哉 (つかはら・たくや/1937年~)

東京生れ。1958年遠山郷下栗撮影。59日本大学芸術学部写真学科卒業。75文化庁派遣芸術家在外研修員(第1回写真派遣)。フランス、ポーランドのシルクスクリン工房で写真を使った版画を学ぶ。76ヨーロッパ写真連合ユーロフォト会員となりフロリス・ノイジュス氏らと交流。79ポーランド芸術写真家ユニオン名誉会員となる。81ストライプハウス美術館設立(~2000)。1993ストライプハウス美術館で公開講座「世紀末大学」設立(~2000)。写真家

#### 塚本 茂 (つかもと・しげる/1903~1983年)

群馬県生れ。前橋中學校卒、東京美術学校区画師

範科に入学、中村彝、牧野虎雄に師事。湘南中學(現湘南高校)の美術教師。山下大五郎、石川滋彦など画家を輩出。新光洋画会賞。太平洋画会賞。槐樹社展で田中賞。37年国際美術教育連盟主催の万国美術教育会議日本代表。戦後、湘南中學を去り、画業に専念、文展、国際美術会出品。1983年没、80歳。2005年藤沢市美術館で「塚本茂展」。洋画家

#### 塚本 繁 (つかもと・しげる/1898～1945年)

京都市生れ。1922年京都高等工芸学校図案科卒。23年日本創作版画協会展を河合卯之助らと協力開催、24年入選。23年頃に「詩と版画社」の社友。24年京都で開かれた「詩と版画社展」出品。29年京都創作版画会展出品。24年河合卯之助・近藤雄三ら工芸美術団体「華曼草社」「華鬘艸社」結成。ろうけつ染を手掛けた。31年洋画家赤沢鍼太郎らと「草芽会」を結成。40年京都市展に工芸作品《葡萄彫文金庫》を出品。舞台装置・ウィンドー・装飾・『京都園芸』表紙絵など手掛けた。京都市で没、47歳。版画家、工芸

#### 塚本 哲 (つかもと・てつ/1901～1980年)

島根県生れ。1926年東洋大学社会事業科卒。32年東京市社会局勤務。51年「東京都立新宿生活館」の初代館長。59年東洋大学教授、70年佛教大学教授、75年東北福祉大学教授。東京で没、79歳。版画は31～32年諏訪兼紀に学ぶ。36年国画会展入選。37年日本版画協会展入選し、43年褒状を受賞し、会員。41年「きつつき会」参加。日本版画協会展46～78年一部を除き出品。46年「一木会」に参加。52年頃から日本版画協会による「現代版画研究会」の会場に、館長を務める「東京都立新宿生活館」を提供。1980年没、79歳。美教、版画家

#### 塚本張夫 (つかもと・はるお/1907～1990年)

広島県生れ。1932年東京美術学校西洋画科卒、33年研究科修了。藤島武二教室で学ぶ。帝展入選。光風会、一水会展へ出品。戦後は日展、創元展、現代美術総合展、美術団体連合展などに出品。50年創元会会員、のち常任委員。56年日展で岡田賞、83年日展会員。東京で没、82歳。洋画家

#### 月岡栄貴 (つきおか・えいき/1916～1997年)

東京生れ。東京美術学校卒。前田青邨に師事。1948年院展入選、81年日本美術院賞、85年文部大臣賞。古典を題材とした作品をえがく。1997年没、81歳。日本画家

#### 月岡耕漁 (つきおか・こうぎよ/1869～1927年)

東京生れ。1881年横浜の伯父宮内林谷のもとで陶

器絵付図案を約3年学ぶ。83年からは東京府画学伝習所で結城正明に指導を受ける。87年月岡芳年の指導に就く。89年頃には尾形月耕に師事。1910年日英博覧会で入賞し、宮内省御用品となる。版下絵では1893年以来『風俗画報』挿絵の筆を執り、98年頃から能楽に関する挿入画を専らとし「能画の耕漁」として知られた。版画は、『能楽図絵』前編・後編・続編を1897～1902年に刊行、全260図、目録5図(大黒屋松木平吉版)。1927年没、58歳。日本画家、版画家

#### 月岡雪鼎 (つきおか・せつてい/1710～1786年)

近江生れ。月岡雪斎、月岡雪溪の父、狩野派の高田敬輔に師事。西川祐信の影響で風俗画家となる。絵本類、肉質美人画、秘画などが数多く残されているが、中でも肉質美人画を得意とした。大阪で没、76歳。江戸時代後期の絵師

#### 月岡芳年 (つきおか・よしとし/1839～1892年)

江戸生れ。河鍋暁斎、落合芳幾、歌川芳藤らは歌川国芳に師事した兄弟弟子の関係にあり、特に落合芳幾は競作もした好敵手であった。また、多くの浮世絵師や日本画家とその他の画家が、芳年門下もしくは彼の画系に名を連ねている。衝撃的な無惨絵の描き手としても知られ、「血まみれ芳年」の二つ名でも呼ばれる。浮世絵が需要を失いつつある時代にあって最も成功した浮世絵師であり、門下からは日本画や洋画で活躍する画家を多く輩出した芳年は、「最後の浮世絵師」と評価されることもある。江戸で没、53歳。幕末から明治中期にかけて活動した歴史絵、美人画、役者絵、風俗画、古典画、合戦絵など多種多様な浮世絵を手がけ浮世絵師

#### 月形那比古 (つきがた・なひこ/1923～2006年)

新潟県生れ。日本大学芸術学部卒。1953年荒川豊蔵に傾倒、陶芸の道に入る。「鬼志野」を創陶。88年パリ国際会議場ホール「月形鬼志野全貌展」。89年日本の美術展パリ芸術大賞。陶芸のほか絵画も手掛ける、特に絵画は力を注ぎ心象画家として知られる。岐阜県で没、83歳。陶芸、洋画家

#### 月館れい (つきだて・れい/1921年～)

八戸市生れ。八高女卒、女子美術専門学校進学、卒業後八戸に帰郷、鷹山宇一と出会う。1947年二科展入選、53年特待賞、56年会友、64年会員、90年総理大臣賞、二科会常務理事歴任。48年女流画家協会会員。洋画家

#### 築山節生 (つきやま・せつお/1906～1986年)

佐賀県生れ。1933年師範学校中学校女学校教員試験合格、34年宇都宮第二高女、秋田師範で教諭。47年福岡第二師範田川分校に赴任、50年福岡学芸大学助教授、58～70年福岡教育大学教授。二科展や新文展に出品、戦後は一貫して二紀展に出品、会員のち委員。1986年没、80歳。洋画家、美教

#### 佃 武昭 (つくだ・たけあき/1891～1968年)

岡山市生れ。1911年太平洋画会研究所に学ぶ。18年東京美術学校西洋画科卒。その後22年まで研究科に在学。17年文展に入選。東京女子高等師範学校講師、東京高等学校教諭など教職。28、33年の帝展入選。36年文展監査展に入選。太平洋美術会理事。日展委員。東京で没、76歳。洋画家、美教

#### 九十九伸一 (つくも・しんいち/1955年～)

福岡県生れ。1980年九州産業大学大学院卒業後、渡伊、ミラノへ。84年メキシコ・フェブラ州文化省招待個展。99年福岡市美術館で九十九伸一の宇宙展。2003年博多リバレオン、原幼稚園ホール壁画完成。洋画家、壁画

#### つげ義春 (つげ・よしはる/1937年～)

東京生れ。『チーコ』、『沼』『チーコ』『李さん一家』『紅い花』『ねじ式』『ゲンセンカン主人』『もつきり屋の少女』、『無能の人』第46回日本漫画家協会賞大賞、第47回アンブレーム国際漫画祭特別栄誉賞。漫画家、随筆家

#### 辻 愛造 (つじ・あいぞう/1895～1964年)

大阪生れ。1912年赤松麟作に師事。15年上京、太平洋画会研究所に学ぶ。26年国画創作協会展に出品。28年国画奨学賞。34年国画会会員。57年兵庫県文化賞。62年明治・大正・昭和大阪懐古風景・素描淡彩150景完成。ガラス絵も描く。西宮市で没。68歳。洋画家、ガラス絵、版画

#### 辻 愛造 II (つじ・あいぞう/1895～1964年)

大阪府生れ。1912年赤松麟作に師事。15年上京、太平洋画会研究所に入る。17年日本美術院洋画部に入選、以後19年まで出品。一時春陽会展に出品。26年国画創作協会洋画部が創設され連続入選。28年国画創作協会第7回展で国画奨学賞。34年第9回国画会展で会員推挙。57年兵庫県文化賞。62年「明治、大正、昭和大阪懐古風景150点完成。その後、ガラス絵制作に進む。64年6月3日西宮市で没、享年68歳。(佐)洋画家、ガラス絵、版画

#### 辻 葦夫 (つじ・あしお/1902～1980年)

甲府市生れ。慶應義塾大学在学中より油絵を描き、1929年福澤一郎に師事。30年シュルレアリスム絵画グループ六人社を米倉壽仁らと結成し、32年フォーヴィスム系白穂会結成。前衛芸術と深く関わる。山梨美術協会の発足後は、同協会でも活躍。44年独立美術協会展入選。52年サロン・ド・ジュワン会員。55年山梨美術協会を脱退して白濤会を結成し、以後県内においては同会を中心に発表した。初期にはフォーヴィスムの影響を受けた作品を制作したが、晩年は抽象画を描いた。1980年没、78歳。洋画家

#### 辻 憲 (つじ・けん/1946年～)

東京生れ。1976年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻終了。92年アネックス日動画廊個展。94年銅版画作品集刊行、東京梅田画廊個展、大阪梅田画廊個展。96年ハンブルグ美術工芸博物館にて全作品展。97年バリ日動画廊個展。無所属。版画家

#### 辻 親造 (つじ・しんぞう/1913～2009年)

京都市生れ。1933年京都府師範学校卒。49年行動美術展入選。55年行動美術会会員。67年名古屋造形短期大学開学とともに造形芸術科助教授。75～77年名古屋造形芸術短期大学学長。90～92年愛知県立芸術大学客員教授。2009年没、96歳。美術教育

#### 辻 晋堂 (つじ・しんどう/1910～1981年)

鳥取県生れ。1932年独立美術研究所へ入り、約1年間素描を学ぶ。33年日本美術院展出品し、木彫作家としてデビュー。独立美術研究所では堀内正和を識る。35年院展奨励賞、院友。35年新海竹蔵の推薦で日本美術院研究所入所、39、41年院展院賞第二賞、42年日本美術院賞第一賞、日本美術院同人。58年二紀会彫刻部委員。戦後、セメントや鉄を素材にした抽象彫刻に先鞭をつけ、昭和30年代からは陶彫による抽象作品に独自の世界を拓いた。57年サンパウロ・ビエンナーレ展、58年ベニス・ビエンナーレに出品し、国際的な評価を得た。堀内正和、山崎脩との「彫刻三人展」(66年西武百貨店)、「八木一夫、辻晋堂展」(67年、東京壹番館画廊)49～76年に京都市立美術専門学校(のち京都市立芸術大学)教授。63年には美術研究の目的で渡欧、抽象的な陶彫作品の制作は、八木一夫らの走泥社に刺激を与え、その後の京都のオブジェ焼が国際的に注目される端緒を開いた。77年翌年京都市文化功労者。78年『辻晋堂陶彫作品集』(講談社)を刊行。83年に「現代彫刻の鬼才 辻晋堂展」(8月3日～9月4日)が京都国立近代美術館で開催された。京都市で没、70歳。彫刻家、美教

**辻 永** (つじ・ひさし/1884～1974年)

広島市生れ。東京美術学校在学中から白馬会に出品し、1906年同校を卒業。10年文展出品の『飼われたる山羊』により褒状、以後受賞を重ねる。18年光風会会員。20年渡欧。帝展、新文展、日展の審査員。47年日本芸術院会員、58年には社団法人日展の初代理事長。59年文化功労者。**洋画家、版画、日展理事長**

**辻 まこと** (つじ・まこと/1913～1975年)

福岡県生れ。日本の詩人、画家である。山岳、スキーなどをテーマとした画文や文明批評的なイラストで知られる。日本におけるダダイズムの中心的人物で餓死した辻潤と、婦人解放運動家、甘粕事件で大杉栄とともに殺害された伊藤野枝を両親にもつ。1975年没、62歳。**詩人、イラスト、洋画家**

**辻 真砂** (つじ・まさご/1951年～)

大阪生れ。1976年関西美術院卒。スペイン留学(～'80)。95年個展(川上画廊)。96年個展(日本橋三越)。98年個展(梅田阪急)以後毎年個展(京都高島屋)。99年真砂美塾展(ギャラリー大井)以後毎年、2001～07年真砂美塾選抜展(金沢美術サロンゆたか) 06年真砂美塾選抜展(広島、池袋、松山、静岡)。08年真砂美塾洋画選抜展(松坂屋名古屋本店)。12年真流会油絵展(東武池袋)。真砂美塾を主催。**洋画家**

**辻 光典** (つじ・みつすけ/1915～1992年)

ハルビン市生れ。1939年東京美術学校卒。38年光風会展入選、43年会員。**通商産業省、労働省勤務**の傍ら、主に漆を素材とした絵画を制作。独自の抽象的世界を展開し、52年以来、日展に出品、特選。61年文部大臣賞、**日本芸術院賞**。毎年個展を開催。作品に「壁画風神雷神」「クノサス」。1992年没、77歳。**洋画家**

**辻村八五郎** (つじむら・はちごろう/ 1914～2003年)

東京生れ。本郷絵画研究所に入所、岡田三郎助に師事。1937年東京美術学校卒、同年光風会展に入選。48年信州美術会理事。60年日展委嘱出品、菊華賞。62年日展審査員、光風会評議委員。63年日展会員。光風会名誉会員・日展参与。東京国立近代美術館に所蔵。大宮市で没、89歳。信州高遠美術館で2008年辻村八五郎展開催。**洋画家**

**辻 利平** (つじ・りへい/1900～1988年)

長崎県生れ。1922年長崎師範学校卒。28年東京

美術学校図画師範科卒、斎藤与里に師事。33年東光会展T氏賞。40年東光会会員。77年東光会副理事長。33、34年帝展入選。47年日展委員。66年日展で菊華賞。69年日展会員。66年夙川学院短期大学造形美術科主任教授。88年没、87歳。**洋画家、美教**

**津田一江** (つだ・かずえ/1950年～)

東京生れ。1973年新制作協会日本画部春季展入選。76年武蔵野美術大学大学院修了、81年文化庁芸術家国内研修員として派遣。81、82、94、00年年創画会賞。93年武蔵野美術大学国際芸術都市田中記念アトリエ派遣研究員、1年間パリに滞在。96年「MOA 岡田茂吉優秀賞展」にて優秀賞。2000年創画会会員。**日本画家**

**津高和一** (つたか・わいち/1911～1995年)

西宮市生れ。中之島洋画研究所に通う。1952～64年行動美術協会会員。68～85年大阪芸術大学教授を務める。67年兵庫県文化賞、86年大阪芸術賞。西宮市で没、83歳。(出典 わ眼)**洋画家、美教**

**津田耕造** (つだ・こうぞう/1892～1971年)

福岡県生れ。和田英作に師事。1921年東京美術学校西洋画科卒。30年帝展に入選。日展に出品。1971年没、79歳。**洋画家**

**津田信夫** (つだ・しのぶ/1875～1946年)

千葉県生れ。1900年東京美術学校鑄金科卒、10年4月同校雇となり、11年同校助教授、19年同校教授。23～25年文部省より在外留学。27年帝展工芸部委員。35年帝国美術院会員。37年芸術院会員。公共施設の鑄造を手掛けた。東京で没、70歳。**鑄金家、美教**

**津田周平** (つだ・しゅうへい/1909～1990年)

京都市生れ。1931年京都市立絵画専門学校日本画科卒。32年関西美術院で洋画を学ぶ。41年二科会会友。37年全関西展特選。45年京展で市長賞。47年二紀展出品。二紀同人。67年二紀会理事。69年京都市立美術大学教授。関西美術院理事。88年京都市文化功労者。90年没、81歳。**洋画家、美教**

**津田季徳** (つだ・すえお/1899～1981年)

日光市生れ。1917年京北中学校中退。高橋勝蔵に入門洋画を学ぶ。19年院展洋画部入選。43年洗礼を受ける、修道士。70年、77年、78年の3回欧米等に旅行。72年東京日動サロン、大阪日動画廊で個

展。80年津田季穂画集が高宮画廊で刊行。神戸市で没、81歳。洋画家

**津田正毅** (つだ・せいき/1913～1987年)

1913年生れ。1960年一水会会員、のち常任委員。日本美術家連盟会員。1987年没、74歳。洋画家

**津田青楓** (つだ・せいふう/1880～1978年)

京都市生れ。1906年関西美術院で浅井忠に師事。07～10年農商務省海外実習生として安井曾太郎と共にパリに留学、アカデミー・ジュリアンでローランスに師事。11年文展入選。14年二科会創立に参画、鑑査委員。25年津田洋画塾を開設。33年日本画に転向。親友に夏目漱石がおり、漱石に油絵を教えた他、漱石の『道草』『明暗』や森田草平の『十字街』などの装丁を手がけた。78年没、97歳。洋画家、日本画家、美教、挿絵、版画

**津田雄一郎** (つだ・ゆういちろう/1923～1994年)

台北市生れ。1945年旧台北帝大理学部卒。51～82年宮崎県工業試験場部長。県展第5回、6回で特選。65年数多くの個展を開催。86年宮崎愛和病院で美術講師、多くの高齢者の個別指導。89年宮崎県文化賞。1994年没、70歳。洋画家

**津田正周** (つだ・まさちか/1907～1952年)

京都生れ。京都絵画専門学校、津田青楓塾に学ぶ。1928～29年二科展出品。29～33年渡仏。34年新時代洋画展を結成。35～36年再渡仏。37年自由美術家協会創立会員。38年歷程美術協会結成に参加。39～41年春陽会展出品。42年日本映画社美術課に入社以来、画壇を離れ、44年朝日映画嘱託、となり、45年には特派員として渡満した。その後、同地東北大学美術部講師、モスクー電影院画家、或はハルピン美術協会の指導者として、各地で美術関係の仕事に従事。ハルピン市で没、45歳。洋画家、美普

**蔦谷龍岬** (つたや・りゅうこう/1886～1933年)

青森県生れ。東美校卒。寺崎広業に師事。文展・帝展で活躍、帝展で委員、審査員をつとめた。画塾鐸鈴社を設け、京都や奈良をたびたび訪れ、古美術や建築を研究。大和絵風の装飾性を加味した水墨画的な独自の画風を得意とした。1933年没、48歳。日本画家

**土田次枝** (つちだ・つぐえ/1903～1994年)

愛媛県生れ。旧制は大西。女子美術学校に学ぶ。1923年土田文雄と結婚。梅原龍三郎に師事。58年国画会会員。女流画家協会委員。1994年没、91歳。

洋画家

**土谷 武** (つちたに・たけし/1926～2004年)

1926年生れ。43年京都市立美術工芸学校彫刻科卒。49年東京美術学校彫刻科卒。57年新制作協会会員。61～63年渡仏、パリの美術学校エコール・ノルマル・シューペリユール・デ・ボザールで学ぶ。68～73年多摩美術大学彫刻科教授。平櫛田中賞。75年中原悌二郎賞優秀賞、90年中原悌二郎賞。80～96年日本大学芸術学部美術学科教授。94年芸術選奨文部大臣賞。95年毎日芸術賞。96年紫綬褒章。2004年没、78歳。彫刻家、美教

**土田麦僊** (つちだ・ばくせん/1887～1936年)

新潟県生れ。竹内栖鳳に師事。京都市立芸術大学卒。1918年国画創作協会を同志と結成。西洋近代絵画の影響と大和絵研究とが結びついた清新な作品を発表、日本画壇に刺激を与えた。帝国美術院会員。京都で没、49歳。日本画家、版画

**土田文雄** (つちだ・ふみお/1901～1973年)

山形県生れ。1918年米沢中学校卒業後上京、川端画学校に入り藤島武二に師事。21年院展洋画部で入選。26年国画会創立とともに出品。29年国展で樗牛賞。43年国画会会員。54～71年武蔵野美術大学教授。常葉女子短期大学美術デザイン科主任教授。東京で没、72歳。洋画家、美教

**土屋光逸** (つちや・こういつ/1870～1949年)

静岡県生れ。1886～1904年小林清親に弟子。95年に日清戦争を描く。清親画もよく学び、石版画も制作。32年渡辺版画店から新版画版行、土井版画店より版行。41年まで東京尚美堂、酒井川口合板、カワグチ商会など各版元から木版画、新版画の作品を発表。大判も版行。肖像画を描く。1949年没、79歳。浮世絵師、版画

**土屋幸夫** (つちや・ゆきお/1911～1996年)

広島県生れ。1921年東京高等工芸学校卒。22年独立展に入選。38年創紀美術協会を結成、創立同人。39年美術文化協会を結成。47年日本アヴァンギャルド美術協会会員。57年武蔵野美術大学教授。80年武蔵野美術大学美術資料図書館で回顧展開催。東京で没、85歳。洋画家、デザイナー、美教

**土屋義郎** (つちや・ぎろう・よしろう/1900～1991年)

山梨県生れ。山梨師範学校卒業後、教職。1921年岸田劉生に師事し、22年草土社展全点入選、上京して画業に専念。郷里にあっても進藤章らと赤蓼会を



結成。25年春陽会展入選、無鑑査、47年会員。37年山梨美術協会結成に参加。41年新文展が開催され無鑑査。戦後山梨美術協会長。1991年没、91歳。**洋画家、美教、版画**

#### 土屋禮一（土屋礼一）（つちや・れいいち/1946年～）

岐阜県生れ。岐阜県立大垣南高等学校、1967年武蔵野美術大学卒。加藤東一に師事。69年改組日展で特選、白寿賞。76年日展で特選。日展理事、武蔵野美術大学客員教授、金沢美術工芸大学教授。2007年日本芸術院賞。09年日本芸術院会員。日展副理事長。父は日本画家の土屋輝雄。**日本画家、美教**

#### 筒井伸輔（つつい・しんすけ/1968～2020年）

東京生れ。兵庫県立須磨東高等学校を経て武蔵野美術大学油画科卒。澁澤龍彦や森茉莉を愛読。一貫して蜜蝋を使って、昆虫をモチーフとした作品を制作した。2012年『朝日新聞』にて康隆の連載小説『聖痕』の挿絵。2020年没、51歳。**洋画家**

#### 都竹伸政（つづく・しんせい/1913～2003年）

岐阜県生れ。藤田嗣治に師事。1960年第一美術協会常任委員のち退会、渡欧。68年創芸文部大臣賞。三越等個展多数。東京で歿、89歳。**洋画家**

#### 堤 清二（つつみ・せいじ/1927～2013年）

東京生れ。1951年東京大学経済学部卒、堤康次郎の秘書。54年に西武百貨店へ入社。64年の康次郎没後、東京・池袋の西武百貨店を中心に西友、パルコ等を含む西武流通グループ（セゾングループ）創設。バブル崩壊で、91年に同グループ代表を辞任。55年より筆名・辻井喬として詩や小説を発表。61年には詩集『異邦人』で室生犀星詩人賞。84年小説『いつもと同じ春』で平林たい子文学賞。93年詩集『群青、わが黙示』で高見順賞、94年小説『虹の岬』で谷崎潤一郎賞、2000年長編詩『わたつみ 三部作』で藤村記念歷程賞、01年小説『風の生涯』で芸術選奨文部科学大臣賞、04年小説『父の肖像』で野間文芸賞、06年日本芸術院賞恩賜賞、07年詩集『鷺がいて』で読売文学賞。07年日本芸術院会員、12年文化功労者。60年西武百貨店池袋店で美術展、61年「パウル・クレー展」開催。62年「ジャン・コクトー芸術展」、63年「アーシル・ゴーキー素描展」。75年西武美術館開館、館長。81年軽井沢高輪美術館（現、セゾン現代美術館）開館、開館記念展として「マルセル・デュシャン展」開催。89～99年年西武美術館はセゾン美術館としてリニューアルオープン。87年私財でセゾン文化財団を設立し、理事長。演劇・美術分野に助

成事業を行い日本の現代芸術を支援“セゾン文化”と呼ばれる個性的なライフスタイルを築き上げた。東京で没、86歳。（引用 東文研）**美術館、セゾン文化財団理事長**

#### 堤 龍雄（つつみ・たつお/1887～1968年）

山梨県生れ。甲府中学校卒。1910年第13回白馬会展に出品。12年東京美術学校西洋画科本科卒。帰郷。教職に就き、次いで村会議員となる。公職の傍ら、甲斐美術協会結成に参加、37年山梨美術協会の創立会員。68年没、享年81歳。（佐）**洋画家**

#### 恒川義雅（つねかわ・よしまさ/1905～1929年）

広島県生れ。護国寺前で母が経営いたカフェ「スズラン」に集まった画家たちが「MAVO」を結成。1924～30年二科会展に出品。詩囚の表紙カット、1929年没、25歳。**洋画家**

#### 常岡卯三郎（つねおか・うさぶろう/1897～1975年）

福岡県生れ。本郷洋画研究所に学ぶ、岡田三郎助、有島生馬に師事。光風会展、二科会展等に出品。1946年一水会会員。日本山林美術協会会員。日展委嘱。1975年没、78歳。**洋画家**

#### 常松大純（つねまつ・だいじゅん/1944年～）

平壤市生れ。1974年東京学芸大学教育学部美術科大学院修了。80年行動展・行動美術賞。87年ヘンリー・ムーア大賞展特別優秀賞。92～95年日本女子体育短期大学・助教授。95年彩の国さいたま彫刻バラエティー、95年大賞。現在 東京学芸大学・武蔵野美術大学・東京造形大学非常勤講師。**彫刻家、美教、立体**

#### 椿 貞雄（つばき・さだお/1896～1957年）

山形県生れ。1915年岸田劉生に師事。草土社創立同人。22年春陽会が創立、客員として参加。23年春陽会会員。27年大調和会創立に参加。27年慶応義塾幼稚舎図画教員。28年国画会に入会。30年椿貞雄、木村莊八が中心岸田劉生遺作展覧会を開催。49年千葉県美術会結成に尽力、常任委員。千葉市で没、61歳。96年、生誕100年記念椿貞雄展（平塚市美術館、他）。2008年、没後50年 愛情の画家 椿貞雄展（米沢市立上杉博物館、他）**洋画家、美教**

#### 椿 椿山（つばき・ちんざん/1801～1854年）

江戸生れ。別号に琢華堂・休菴・羅漢等。幕府の槍組同心をつとめ、文武ともに優れた。画は金子金陵・渡辺華山に師事する。柔軟な筆と温雅な彩色による画調に特質があり、肖像画と花鳥画に優れた。俳諧・煎茶にも通じた。1854年没、54歳。**江戸後期の文人画家**

坪井一男 (つばい・かずお/1902～1980年)

広島市生れ。1924年青木大乗に師事。25、26、27年帝展入選。28年帝展で特選。太田喜二郎に師事。29年帝展無鑑査。37年文展で無鑑査。40年太田喜二郎主宰の「華畝美術協会」に参加。60年「くれ(塊)美術協会」を組織。80年没、77歳。洋画家

坪井一男 II (つばい・かずお/1902～1980年)

広島市生れ。1924年大阪に出て青木大乗に師事。25年第6回帝展に初入選、28年第9回帝展で特選。29年第10回帝展で無鑑査。36年昭和十一年文展招待展出品。37年第1回新文展に無鑑査出品。第2回京都市展で委員となる。40年二千六百年奉祝展に出品。太田喜二郎の主宰する華畝美術協会に参加、43年太田喜二郎のアトリエに移住。60年くれ(塊)美術協会を組織し、第1回展を開催。80年没、享年77歳。(佐)洋画家

坪井英雄 (つばい・ひでお/1922～1985年)

1922年生れ。43年頃に東京美術学校彫刻家の中退。サロン・ドートンス、ル・サロン会員。無所属、元阿佐ヶ谷美術学園助教授。三越で個展。戦前は挿絵、戦後は芝居絵も制作。演劇評論家としても活躍した。洋画家、美教、演劇評論家

坪井孟幸 (つばい・もとゆき/1943年～)

名古屋市生れ。1967年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。67～97年名古屋造形芸術短期大学勤務。76年会員制の「版画工房もく」を有志とともに設立。版画家

坪内節太郎 (つばうち・せつたろう/1905～1979年)

岐阜県生れ。大阪商業大学に学ぶ。天彩画塾で洋画を学ぶ。国画会、独立美術協会、春陽会に出品。1938年独立展で協会賞。43年準会員。46年行動展で行動美術賞。会員推挙。68年墨彩会結成。岐阜県で没、74歳。挿絵、随筆家、演劇評論家、洋画家

坪内正 (つばうち・ただし/1909～1996年)

広島生れ。1935年東京美術学校油絵科卒、2年間研究科在学。51年二紀会展出品。宮本三郎に師事。55年日展出品、77、84年特選、88審査員、89年会員。57年光風会出品、63年会員。77年日洋展奨励賞、79年運営委員、87年常任委員。東京で没、87歳。洋画家

坪内晃幸 (つばうち・てるゆき/1927～2005年)

松山市生れ。1956～60年読売アンデパンダン展に出品。56年吉原治良に自作を送る。57年第3回具体美術展に出品。57年具体美術協会に加入。6

9、70年愛媛屋外美術展を開催。71年愛媛造形作家協会を設立。72年「速度制限40キロの道路標識と道路標示はすべて作品」と宣言、以後これらを題材に作品を発表。75年アーティスト・ユニオン愛媛を組織。2005年没、78歳。造形作家、具体

坪田純哉 (つばた・じゅんや/1974年～)

埼玉県生れ。1997年安宅賞。99年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒、2001年同大学大学院美術研究科修士課程日本画修了。02年渡欧。04年白金Zodiac個展。京橋アートスペース羅針盤個展(以降06、08年)。10年吾妻橋ギャラリーアビアント個展。日本画家

津谷鹿市 (つや・しかうち/1923～1972年)

神戸市生れ。山本鼎に師事。1966年春陽会会員。1972年没、49歳。洋画家

TSUYU (つゆ/生誕年不詳～)

東京生れ。パリと、NYで制作。ロゼラハイタワー国際バレエセンター卒。ダンスと音楽のバカロレア。ロンドンでワークショップ参加する。2000年にはヨーロッパ映画フェスティバルでヨーロッパベスト女優賞。バカロレア日本とフランスの共同制作映画、「ユキとニナ」に出演。両親のアトリエでビジュアル・アートに触れた。イラスト、版画、漫画、オブジェ、女優

鶴岡政男 (つるおか・まさお/1907～1979年)

高崎市生れ。1922年太平洋画会研究所に学ぶ。29年洪原会の結成に参加。30年NOVA美術協会に参加、同会創立会員シュルレアリスム傾向の抽象表現を展開。43年鬚光、麻生三郎、井上長三郎、松本俊介等と新人会結成に参加。47年自由美術協会会員。65年～無所属。63年日本国際美術展優秀賞。東京で没、72歳。洋画家

鶴岡義雄 (つるおか・よしお/1917～2007年)

茨城県生れ。旧制茨城県立土浦中学卒、熊岡美彦の講習会に参加。1941年日本美術学校卒、林武に師事。46年服部正一郎らと二科会茨城支部を結成、参加、47年二科賞、49年服部正一郎ら茨城洋画会を結成、49年二科会準会員、50年会員、70年東郷青児賞、71年二科会委員、74年内閣総理大臣賞、80年二科会常務理事就任、90年日本芸術院賞。舞妓で有名。93年日本美術学校名誉教授。勲四等旭日小綬章。94年日本芸術院会員。96年日本美術学校名誉校長。2002年二科会理事長、06年同会名誉理事就任。主な個展に「鶴岡義雄展」(日動サロン、1971年)、「“京洛四季の舞妓”鶴岡義雄展」(日動画

廊、1980年)、「画業60年鶴岡義雄の世界展」(茨城県つくば美術館、1996年)。東京で没、90歳。洋画家

後半の時点で鶴丸のように新興美術の要素を取り入れながら、独創的な作品を制作した。日本美術会会員。1984年没、77歳。洋画家

**鶴澤探泉** (つるさわ・たんせん/1755～1816年)

鶴澤探泉の養子で鶴澤派の4代目。1780年光格天皇即位に伴う屏風絵制作が朝廷からの最初の御用である。寛政度禁裏御所の障壁画制作に探索とともに参加し、小御所、常御殿の担当。92年法橋に叙され、92年祇園祭船鉾の下絵を描く。99年法眼に進む。寛政度の障壁画制作をきっかけに鶴澤家は京絵師たちの中で存在感を強めた。『平安人物志』の1813年版では探泉は3番目、息子探春は4番目に掲載されている。1816年没、62歳。弟子、真砂幽泉や、山本探淵、佐々木探龍。江戸時代後期に活躍した狩野派の絵師

**鶴丸勝男** (つるまる・かつお/1905～1929年)

大阪生れ。独学で洋画を学ぶ。1926年国画会に出品。大調和展に出品。1929年没、24歳。洋画家

**鶴見守雄** (つるみ・もりお/1891～1978年)

大阪生れ。1916年東京美術学校西洋画科本科卒。25年在巴里日本人美術家展に出品。29年巴里日本美術家協会展覧会委員、第10回帝展に初入選。41年第4回新文展に出品。57年第13回日展に出品。61年この頃、新槐樹社委員。78年2月23日没、享年87歳。(佐)洋画家

**弦田英太郎** (つるた・えいたろう/1920年～2014年)

東京生れ。1942年東京美術学校油絵科卒。42～49年スイス人画家コンラッド・メイリ(Conrad Meili, 1895年-1969年)に師事。42年一水会展で入選。49年有島生馬に師事。50年日展で特選。92年一水会委員に推挙。日展で審査員。93年日展会員。2014年没、94歳。洋画家

**弦屋光溪** (つるや・こうけい/1946年～)

神奈川県茅ヶ崎市生れ。父は洋画家の藤川光次、祖父は中澤弘光。1971年富士短期大学卒、サラリーマンを経て1978年木版画家としてデビューする。歌舞伎座で役者大首絵の展覧会を22年間続け、大英博物館の「日本20世紀後半の版画展」ほかにも出品。歌舞伎役者の大首絵でデビューした。2000年猫をモチーフにした戯画「猫三連作」や「アルチンボルドに捧ぐ五題」(「虫」2014年)ほかだまし絵、さらに自画像の浮世絵を制作。版画家、浮世絵師

**鶴田吾郎** (つるた・ごろう/1890～1969年)

東京生れ。1906年白馬会洋画研究所に通い、中村彝らと親交。20年エロシエンコ像が帝展入選。25年太平洋美術学校教授。30年渡欧。従軍画家。アカデミー46美術研究所を開設。示現会創立会員。東京で没、78歳。(出典 わ眼)洋画家、美教、版画

て

**出井保勝** (でい・やすかつ/1932年～)

浜松市生れ。金沢美術工芸大学で油絵を学び、卒業後はフリーデザイナー、アートディレクター、美術雑誌、建築雑誌等の出版社を経営。1990年絵画制作に専念。抽象絵画を制作。93、96年アートミュージアム銀座個展中心に発表。2015年ほくさい美術館で出井保勝とコノキ・ミクオ 二人展開催。版画家

**弦田平八郎** (つるた・へいはちろう/1928～2001年)

東京生れ。旧制第四高等学校を経て東北大学文学部に入学し、美学西洋美術史学科に学ぶ。1952年同校卒。67年神奈川県立近代美術館学芸員。同館の構成は、土方定一館長のもと、佐々木静一、朝日晁、酒井忠泰、副島三喜男、そして弦田が学芸員として勤務。68年前後から高まった日本近代美術の再評価を背景に、土方定一の牽引する企画で注目された同館の学芸員として、弦田は様々な展覧会に関わった。日本の近現代美術を紹介する全集その他の出版物に筆をふるった。85～1992年同館館長、92、93年横浜美術館館長。横浜市で没、73歳。神奈川県立近代美術館館長、横浜美術館館長、美術評論家

**手澤宗信** (てざわ・むねのぶ/1927～1990年)

甲府市生れ。山梨師範学校で堀内孝恵に師事。1953年創元会展入選、59年会員、80年運営委員。70年代度々取材、渡欧。耕地シリーズを制作。山梨美術協会で活躍し、82年同会会長。70年代渡欧を繰り返す。86年画業に専念。代表作となる耕地シリーズを制作。甲府市で没、62歳。洋画家、美教

**鶴丸昭彦** (つるまる・あきひこ/1906～1984年)

北海道生れ。川端画学校に学ぶ、藤島武二に師事。労農芸術家聯盟、前衛芸術家聯盟に加盟。第二回プロレタリア美術大展覧会の時に撤回。1920年代

**勅使河原蒼風** (てしがはら・そうふう/1900～1979年)

1900年生れ。いけばな作家。草月流初世家元。東京生れ。華道家の父勅使河原和風久次に学び、1927年独立。28年千疋屋ギャラリーで第1回草月流展を開き、流麗な投げ入れや盛花の自由な造形で注目。30年重森三玲らと(新興いけばな宣言)を創案し、従

来の形式からの解放を主張。戦後は石、鉄などを使用して造形芸術としてのいけばなを発表し、海外でも広く紹介された。66年日本いけばな芸術協会初代理事長。代表作に《再建の賦》(1949年)、《黒いひまわり》(1951年)、《気閑車》(1951年)、晩年の《古事記》連作などがある。2世家元霞[1932-1980]は長女、3世家元で映画監督の宏[1927-2001]は長男。1979年没、79歳。いけばな作家、草月流初世家元

#### 出島春光 (でしま・しゅんこう/生没年不詳)

石川県生れ。1915年東京美術学校予備科(日本画科)入学。プラハの第6回世界美術教育会議に出席のため美校を中退。渡欧。プラハで個展を開催後パリへ渡る。ブリュッセル展ベルギー国王夫妻の前で矢澤弦月らと席画を描く。同年にパリの画廊で、翌年にはブリュッセルのブレックポット画廊で個展開催。ヨーロッパ諸都市の景観図を墨で描くなど、パリの日本画家として好評。30年頃から作家金子光晴と親交。38、39年の巴里日本美術家展に出品。パリで客死したと言われている。洋画家、日本画

#### 手島 貢 (てじま・みつぐ/1900~1974年)

福岡県生れ。1929年東京美術学校西洋画科卒。29~33年渡仏、シャルル・ゲランに師事、サロン・ドートヌヌに入選し、サロン・アンデパンダン会員となる。帝展、日展に出品、日展無鑑査。41年創元会の創立に参加、同会会員。52~53年、67年渡欧。福岡県で没、74歳。洋画家

#### 手塚治虫 (てづか・おさむ/1928~1989年)

大阪生れ。1941年同小学校を卒業して大阪府立北野中学(現、北野高校)に入学。美術班と地歴班に属し、昆虫を題材にした漫画など、好んで漫画を描く。45年北野中学を卒業して大阪大学附属医学専門部に入学。1951年大阪大学医学部専門部卒。52年医師国家試験に合格。52年より「鉄腕アトム」を、翌年より「リボンの騎士」を描き始め、爆発的人気を博す。58年「びいこちゃん」「漫画生物学」で小学館漫画賞受賞。59年フジテレビで「鉄腕アトム」がドラマ化され放映。60年頃自作の停滞感から一時漫画を離れ奈良県立医科大学で医学研究に従事。61年医学博士。61年手塚治虫プロダクション動画部を設立、翌年虫プロダクションと改称して「鉄腕アトム」のアニメーション・フィルムの制作を開始する。63年国産初のテレビアニメシリーズ「鉄腕アトム」のテレビ放映が開始され、高視聴率をあげ、63年アメリカでも放映される。この作品は以後、英、仏、独、オーストラリア、台湾、香港、タイ、フィリピンなどでも放映され、国際的に広く知られるところとなった。63年前年に完成した手塚治虫原

案、構成の映画「ある街角の物語」で芸術祭奨励賞、ブルーリボン教育文化映画賞。65年国産初のカラーテレビアニメシリーズ「ジャングル大帝」の放映が開始される。66年「ジャングル大帝」で厚生大臣児童福祉文化賞受賞。66年雑誌「COM」が創刊され、同誌に「火の鳥」の連載を開始。67年「展示会の絵」で芸術祭奨励賞、ブルーリボン教育文化映画賞、劇場版「ジャングル大帝」でベネチア国際映画祭サンマルコ銀獅子賞及びアジア映画祭特別部門賞、同45年「やさしいライオン」で児童福祉文化賞、同50年「ブラック・ジャック」で日本漫画家協会賞特別優秀賞、同55年「火の鳥 2772」でサンディエゴ・コミック・コンベンション・インクポット賞、ラスベガス映画祭動画部門賞など次々と漫画、動画の優作を生み出して受賞を続け、「鉄腕アトム」では65年に厚生大臣による表彰を受けたほか、75年には東京都民栄誉章受章、88年戦後漫画とアニメ界における創造的な業績によって朝日賞。戯画、カリカチュアの流れをひく大人向けの漫画に対して子供を対象とする空想、物語の世界を表わした子供漫画の領域を確立し、動感あふれる描法、一貫した物語を追う長編物を打ち出すなど新たな試みを行なって、今日に至るテレビ、映画のアニメーション漫画の隆盛を導いた。没後、漫画家としては初めての公立美術館での個展として東京国立近代美術館で「手塚治虫展」(平成元年7月)が開かれた。(年譜、事蹟、作品刊行などの資料は同展図録に詳しい。)東京で没、60歳。漫画家

#### 手塚一夫 (てづか・かずお(1911~1939年)

山梨県生れ。1929年日本画家を目指し上京。病気のため帰郷。36年甲斐美術展に初出品。当時、東京帝国大学院生の中込忠三と出会い、以後物心両面の援助を受けた。37年、同郷の中込忠三の紹介で阿部知こと交友、その後、長谷川利行とも交友。37年山梨美術協会展で知事賞。39年5月22日没、享年28歳。40年資生堂ギャラリーで遺作展が開催され、里見勝蔵が「これが真実の画だ。生命の画だ。生活の画だ。人間の画だ。」と評価した。地元新聞で遺作展が紹介され、話題となった。(佐)洋画家

#### 手塚雄二 (てづか・ゆうじ/1953年~)

神奈川県生れ。1978年安宅賞。80年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒、サロン・ド・ブランタン賞、82年東京藝術大学大学院美術研究科(日本画)修士課程修了。86年院展奨励賞。87年春の院展奨励賞。89年日本美術院賞・大観賞受賞。92年金峯山寺(奈良吉野)本坊障壁画制作。日本美術院同人。97年院展文部大臣賞、2000年院展内

閣総理大臣賞。東京藝術大学 名誉教授。福井県立美術館 特別館長。日本画家

「幼年倶楽部」の挿絵。東京で没、74歳。洋画家、美教

#### 鉄指公藏 (てつさし・こうぞう/1908～1968年)

横浜市生れ。荏原中学に学び、高島達四郎に師事して洋画を学ぶ。1933年独立展入選、34、35年出品。43年朝日新聞社より開拓団画信を依頼されて満州各地遍遊。51年独立展で独立賞、53年準会員、54年会員。1968年没、60歳。洋画家

#### 寺門幸藏 (てらかど・こうぞう/1895～1945年)

茨城県生れ。1924年水戸で白牙会の創立会員。27年第8回帝展に初入選、以後9、10、14回展にも出品。36年昭和十一年文展監査展に出品。39年第3回新文展に出品し、43年第6回展で無鑑査。44年戦時特別展に無鑑査出品。45年没、享年50歳。(佐)洋画家

#### 鉄舟徳濟 (てっしゅう・とくさい/生年不詳～1366年)

臨済宗夢窓派の禅僧。法諱は徳濟、道号は鉄舟。下野(栃木県)の人。入元し、竺田悟心や古智慶哲、古林清茂ら高僧に参じた。元の順帝より円通大師の号を特賜され、暦応4(1341)年頃に帰国。京都天龍寺の夢窓疎石会下に乗払を勤め、貞和3(1347)年、阿波(徳島県)の補陀山に住して疎石の法を嗣いだ。その後、五山の一つである京都万寿寺第29世を嗣席。晩年は播磨瑞光寺に住し、また京都嵯峨の龍光院に閑居。貞治5(1366)年に示寂した。著作に『語録』と『閻浮集』がある。鉄舟は余技として画を描いたが、なかでも墨蘭は、元における墨蘭の名手である雪窓普明に感化を受けているとされる。入元中に直接学んだ可能性があることも指摘されている。南北朝時代の絵師

#### 寺崎広業 (てらさき・こうぎょう/1866～1919年)

秋田市生れ。16歳狩野派小室秀俊(怡々斎)入門。1888年上京平福徳庵、菅原白龍に師事。穂庵の世話で東陽堂の「絵画叢誌」で挿絵。98年東京美術学校助教授。1901年東京美術学校教授。天籟画塾を設け、野田九浦、正宗得三郎、中村岳陵、牧野昌広、伊藤龍涯、三浦廣洋らを育成。04年日露戦争の従軍画家。木版画による戦争絵、美人画、花鳥画を多く描く。07年文展が開催日本画の審査員。13年東京美術学校の日本画主任。17年帝室技芸員。東京で没、52歳。日本画家、挿絵、美教、版画

#### 寺井重三 (てらい・じゅうぞう/1928年～)

石川県生れ。1950年金沢美術大学日本画科卒。61年洋画に転向、木下孝則に師事。65年一水会会員、77年一水会委員。49年日展入選、80年特選、82年特選、84年日展委嘱、88年審査員、89年展会員、評議員。洋画家

#### 寺崎武男 (てらさき・たけお/1883～1967年)

東京生れ。1907年東京美術学校西洋画科本科卒。07～15年農商務省実業講習生として伊、留学・ベネツィア商業大学日本語教授。エッチングを学ぶ。18年日本創作版画協会創立に参画。同年東京女子美術学校油画科主任。19～22年再渡欧。23年「精美会研究所」開設。52～55年法隆寺金堂壁画制作。1967年没、83歳。洋画家、美教、版画家

#### 寺井力三郎 (てらい・りきさぶろう/1930年～)

東京生れ。1955年東京芸術大学油画科専攻科修了、大橋賞、同大学小磯良平教室副手(～'57)。59年黒土会結成。66年一水会展一水会賞。67年会員、71年会員優賞 ヨーロッパ遊学、77委員。68年安井賞展出品('72、'78、'79)。88年高崎芸術短期大学教授(～'90)。90年埼玉文化賞。97年紺綬褒章。2003年日本橋三越・'07、'13)で個展。14年個展(サトエ記念21世紀美術館・～'15)。一水会運営委員。洋画家

#### 寺坂公雄 (てらさか・ただお/1933年～)

広島県生れ。1956年愛媛大学美術科卒。1954年光風会展入選。62年新日展特選。88～99年山梨大学教授。2001年日展文部科学大臣賞。光風会常務理事。05年日本芸術院賞。同年芸術院会員。09年日展事務局長。13～14年改組日展理事長、光風会理事長。洋画家

#### 寺内萬治郎 (てらうち・まんじろう/1890～1964年)

大阪生れ。松原三五郎の天彩画塾に学ぶ。1916年東京美術学校西洋画科本科卒。25、27年帝展で特選。28年帝展無鑑査。29年光風会会員。51年日本芸術院賞。60年日本芸術院会員。日展理事。東京美術学校の講師として後進の指導。「コドモノクニ」

#### 寺島長虎 (てらしま・ながとら/1902～1990年)

長野県生れ。弥津小学校長を務めるなど学校教育に打ち込む。1954年第42回日本水彩画会展に入選。55年第8回示現会展に入選。56年「法善寺」を制作し、法善寺に寄贈。60年日本水彩画会会員。69年長野県展運営委員。他にも日本水彩画会上田支部長、信州美術会上小支部長、東印町美術会長を務めるなど活躍した。90年没、享年88、89歳。(佐)水彩画家、美教

#### 寺島紫明 (てらしま・しめい/1892～1975年)

兵庫県生れ。楠木清方にまなび、美人画をえがいた。1927年帝展入選。41、42年新文展特選。戦後は日展で審査員、評議員。70年芸術院恩賜賞。兵庫県で没、82歳。 **日本画家、版画**

**寺島春男**（てらしま・はるお/1911～1966年）

旭川市生れ。1930年代道展、独立展出品。56年新道展創立参画。戦後北海道美術の発展に貢献。作風は具象から抽象へと様式をかえながらも、1966年没、55歳。2002年帯広美術館・寺島春雄展が開催。 **洋画家**

**寺島龍一**（てらしま・りゅういち/1918～2001年）

1918年生れ。38年東京美術学校入学。46年日展入選、57年特選、92年内閣総理大臣賞、99年顧問。57年光風会会員、2000年光風会理事長。60年滞欧、76年以降14回渡欧。69年産経児童出版文化賞。77年東京新聞連載小説に挿絵担当。91年紺綬褒章。96年日本芸術院賞・恩賜賞。98年日本芸術院会員。2001年没、83歳。 **洋画家、挿絵**

**寺田健一郎**（てらだ・けんいちろう/1931～1985年）

福岡市生れ。1948年伊藤研之に師事。51年二科展入選。57～59年九州派に参加。59年二科特選、その後会友、77年退会。西南学院中学校の美術担当講師。1950年代谷川雁らの文学運動“サークル村”に参加。「午前」同人。食通で、西日本新聞に「昭和一ケタのくいしんぼ日記」「エカキの小休止」を連載、随筆、テレビで活動。がん手術体験記「直腸切断」出版。大胆なフォルムと鮮やかな色彩を特徴にした、おおらかな抽象表現主義的な画風を展開。1985年没、54歳。 **洋画家、九州派**

**寺田春式**（てらだ・しゅんいち/1911～1979年）

横浜市生れ。1936年東京美術学校本科油画科卒。46年光風会会員。47～57年一水会会員。53～55年渡欧、留学、ルーヴル美術館極東科学研究所で保存、修復、材料研究。71年高松塚古墳の保存修復。49年～東京芸術大学助教授、69～78年東京芸術大学教授。熱海市で没、67歳。 **洋画家、美教**

**寺田竹雄**（てらだ・たけお/1908～1993年）

福岡市生れ。1922年福岡県立中学修猷館を中退、渡米、31年カリフォルニア州美術専門学校を卒業。アートセンター美術協会会員、32年サンフランシスコ・アート・アソシエーション会員、33年ロスアンゼルス・アート・アソシエーション会員35年帰国。45年二科会員のち理事。76年二科展で内閣総理大臣賞。79年、日本美術家連盟理事長。90年日本芸術院会員。東京で没、85歳。 **洋画家、版画**

**寺田政明**（てらだ・まさあき/1912～1989年）

八幡市生れ。太平洋美術学校で学ぶ。独立展、NOVA展に出品。1936年エコール・ド・東京結成。37年独立展で協会賞。39～49年美術文化協会結成。43年新人画会結成。50～64年自由美術家協会会員。64年主体美術協会結成。東京で没、77歳。（出典 わ眼） **洋画家**

**寺戸恒晴**（てらど・つねはる/1922～2004年）

島根県生れ。1942年日本美術学校卒。48年シベリアより帰国。48年新制作協会展入選、57年新制作展新制作作家賞、69年会員。75年日本・ブラジル現代美術展優秀賞。毎日新聞の挿絵を描く。81年島根県立博物館で個展。2004年没、82歳。東京国立近代美術館、練馬区立美術館、浜名市立石正美術館（島根県）作品が収蔵。 **洋画家、挿絵**

**寺畑助之丞**（てらはた・すけのじょう/1892～1970年）

富山県生れ。1918年東京美術学校彫刻科本科卒。朝鮮美術展覧会の審査員。東京高等工芸学校、東京工業専門学校の教授。35年新構造社を発足、彫刻部、工芸部の代表。戦後、日本彫塑家クラブ理事、愛知県常滑日本陶芸研究所所長、日本彫塑家倶楽部理事。日本美術家連盟会員。70年没、77歳。 **彫刻家、美教**

**寺松国太郎**（てらまつ・くにたろう/1876～1943年）

倉敷市生れ。1900年上京し、小山正太郎の「不同舎」に学ぶ。06年浅井忠の画風を慕い関西美術院に入る。07年関西美術院競技会で褒状。文展、帝展で入選続く。08年関西美術院幹事、同年教授。多くの展覧会や競技会の審査員。13年、フランスのサロン・ド・フランセーヌに入選、インターナショナル・ボザール会員。人物画を得意とした。京都で没、67歳。 **洋画家、美教**

**寺本忠雄**（てらもと・ただお/1901～1985年）

東京生れ。独学で絵を学び、1919年『少年倶楽部』『武俠少年』少年雑誌でデビュー。のち『オール読物』『講談倶楽部』『富士』『サンデー毎日』ほか、大衆雑誌、婦人雑誌の現代小説に挿絵を描く。24年より新聞小説も手がけ、朝日新聞、読売新聞、報知新聞、国民新聞などに挿絵を描いた。21年荒木十畝に師事、日本画を学び、読画会に入る。菊池寛、久米正雄、直木三十五らとのコンビによる小説挿絵を多く担当し、代表作に32年菊池寛作「妖麗」（『講談倶楽部』）、同年中村武羅夫作「薔薇色の道」（『富士』）、35年小島政二郎作「感情山脈」（朝日新聞）の挿絵がある。戦後、時代小説に転向、江戸川柳を絵画に描く、独自の境地を拓いた。『夫婦草紙』『夫婦絵草紙』の著書。東京で没、83歳。 **挿絵画家**

## 天明屋尚 (てんみょうや・ひさし/1966年～)

レコード会社アートディレクターを経、現代美術家活動。「BASARA」と総称し、独自のコンセプトにより作品を制作。2006年サッカーW杯ドイツ大会FIFAワールドカップ公式アートポスターで日本代表作家として選出。06年ドキュメンタリー映画「≡天明屋尚」公開。08年「RX-78-2 傾奇者 2005 Version」が、香港で開催。クリスティーズのオークションで競売に掛けられ481万香港ドル(約6400万円)で落札。2010年書籍『BASARA』と合わせてBASARA展を開催し、主催・企画・キュレーション。12年コマーシャル・ギャラリー「TENGAIGALLERY」をプロデュース。14年TENGAIPROJECT始動。絵画、インスタレーション、雑誌、新聞、ポスター、映画美術など作品を発表。現代美術家、洋画、インスタ、ポスター

## と

### 土井 栄 (どい・さかえ/1916～1976年)

山形県生れ。1934年本郷絵画研究所で岡田三郎助、辻永、中村研一らに師事、38年菊池寛の小説の挿絵でデビュー以来、主に新聞、雑誌小説の挿絵画家として活躍。はじめ自由美術協会に属したが、64年退会し、64年主体美術協会創立に参加、会員として制作活動を続けた。65年以後3回にわたり欧州・地中海方面へスケッチ旅行にてかけ、たびたび個展を開催した。1976年没、61歳。洋画家、挿絵

### 土井俊泰 (どい・としやす/1918～2012年)

静岡県生れ。1950年菅野圭介に師事。58年独立賞受賞、60年独立賞最高賞、61年会員、96年協会功労賞。67年渡欧。ナショナル・デ・ボザール展にてアソシエ賞。68年安井賞候補新人展に選抜出品。75年紺綬褒章。98年土井俊泰画集発行。99年茅ヶ崎市美術館にて「土井俊泰の画業」展開催。2012年没、94歳。洋画家

### 土井虎賀寿 (どい・とらかず/1902～1971年)

香川県生れ。1926年京都帝国大学文学部哲学科卒。41年第三高等学校教授、京都大学講師。48年上京、東京大学大学院で2年学ぶ。53年相模女子大学教授。64年独協大学外国語学部教授。スケッチを残す。哲学者、文学者。71年没、69歳。洋画家、美教

### 東郷青児 (とうごう・せいじ/1897～1978年)

鹿児島市生れ。1914年青山学院中等部卒。小代為重に師事。16年二科展で二科賞。21～28年渡仏、リヨンの美術学校に学ぶ。28年二科展昭和洋画奨励賞。キュビズム、未来派に影響。30年二科会員。43年文展審査員。57年日本芸術院賞。60年日本芸術院会員。61年二科会会長。69年フランス政府より芸

術文化勲章(オフィシエ)。76年安田火災東郷青児美術館開館。77年文化功労者。昭和の美人画家として戦後一世を風靡した。熊本県で没、80歳。洋画家、版画、装填

### 東郷たまみ (とうごう・たまみ/1940～2016年)

1940年東郷青児の長女として生まれる。56年二科展入選。60年渡米しカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)に留学。3年間の留学後、画家としての活動を再開。70年二科展金賞、71年会員、75年内閣総理大臣賞。サロン・ドートンヌ、リスボン美術展、レバノン美術展へ招待出品、日本橋三越での78年より26年連続個展。スペインやギリシャを題材にした作品を描き、女性像と共に好評。2016年没、76歳。洋画家

### 藤氏憲承 (とうし・けんしょう/不明～不明)

伝歴は不詳。藤氏憲承の名称は、「円窓美人図」に「羽陰藤氏」(朱文方印)「憲承之印」(白文方印)の二顆の印章があることによる仮称である。筆致は鋭く、すぐれた画才の持ち主であることがわかる。江戸絵師、秋田蘭学

### 東洲斎写楽 (とうしゅうさい・しゃらく、とうじゅうさい・しゃらく/生没年不詳)

約10か月の短い期間に役者絵その他の作品を版行したのち、忽然と画業を絶って姿を消した謎の絵師として知られる。その出自や経歴については様々な研究がなされてきたが、現在では阿波徳島藩主蜂須賀家お抱えの能役者斎藤十郎兵衛(さいとうじゅうろべえ、宝暦13年(1763年) - 文政3年(1820年))とする説が有力となっている。江戸時代中期の浮世絵師

### 東条鉦太郎 (とうじょう・しょうたろう/1865～1929年)

江戸生れ。川村清雄に師事。1887年東京府工芸品共進会で褒状。89年明治美術展に出品、明治美術会会員。1902年川村清雄らと巴会を結成。歴史画、戦争画を得意とした。千葉県で没、64歳。洋画家

### 遠田運雄 (とうだ・かずお/1891～1955年)

金沢市生れ。金沢第一中学卒、東京美術学校西洋画科で洋画を学び、大正期に文展・帝展で活躍した。朝鮮京城龍山公立中学校で教える。朝鮮美術界の重鎮。石川県における洋画草創期の代表的な画家の一人。金沢大学教育学部教授。1955年没、64歳。洋画家

### 東野芳明 (とうの・よしあき/1930～2005年)

東京生れ。1954年東京大学文学部卒。54年「パウ

ル・クレール論」美術評論」新人賞。57年「グロッタの画家」刊行。58年、60年にヴェネツィア・ビエンナーレのアシスタントで渡欧。60年代現代美術の動向を「反芸術」と名づけ、議論。抽象表現主義以後のアメリカ現代美術を中心とする紹介、美術評論活動。67年多摩美術大学で教鞭をとり、同大学芸術学科創設に尽力し、81年開講。78～80年にかけて、マルセル・デュシャン作品のレプリカ制作完成。60年代から80年代にかけて、その評論活動は、同時代の欧米美術の紹介にとどまらず、現代美術の状況を音楽、演劇等広く文化史的な視野からとらえつつ思索をつづけた。翻訳、画集等の編集は数多い。東京で没、75歳。(引用 東文研) **評論家、美教**

#### 堂本阿岐羅 (どうもと・あきら/1922年～)

京都市生れ。日本画家堂本印象の次兄、堂本漆軒の子。1941年京都市立絵画専門学校日本画科卒。54、55年日展特選。 **日本画家**

#### 堂本印象 (どうもと・いんしょう/1891～1975年)

京都市生れ。1924年京都市立絵画専門学校研究科修了。19年帝展入選、21年帝展特選。25年帝展出品作帝国美術院賞。30年母校京都市立美術工芸学校教諭、36年京都市立絵画専門学校教授。50年日本芸術院会員。その後、油彩画や抽象画を試み、彫刻や工芸も創作。61年文化勲章。京都市で没、83歳。 **日本画家、洋画、版画**

#### 堂本尚郎 (どうもと・ひさお/1928～2013年)

京都市生れ。堂本印象の甥。1945年京都市立美術工芸学校絵画科卒。49年京都市立美術専門学校日本画科卒。51、53年展で特選。52年京都市立美術専門学校研究科修了。52年渡欧。55年仏政府私費留学生として渡仏。日本画～洋画に転向。アンフォルメル運動に参加。58年パリ国立近代美術館、外国人画家賞でグランプリ。63年サン・マリノ・ビエンナーレで金メダル。67年帰国。79年パリ市立近代美術館で個展。87年西武美術館、大原美術館で回顧展。2013年没、85歳。 **洋画家、日本画家**

#### 東本光博 (どうもと・みつひろ/生誕年不詳～1972年)

東光会会員、委員。日展に出品。1972年没、50歳。 **洋画家**

#### 堂本元次 (どうもと・もとつぐ/1923～2010年)

京都生れ。1941年京都市立美術工芸学校図案科卒、43京都市立絵画専門学校日本画科卒。叔父堂本印象に師事。47年日展入選、50、52年日展特選。60年新日展で菊華賞。63年日展会員。63年ヨーロッパ

パに旅行。72年日展評議員。79年日中文化交流使節団の一員として訪中。82年改組日展で内閣総理大臣賞。87年日展理事。87年日本芸術院賞。87年京都市文化功労者。2010年没、86歳。 **日本画家**

#### 遠山教圓 (とうやま・きょうえん/生没年不詳)

東京生れ。1916年東京美術学校卒。10年白馬会展に水彩画、油彩画が入選。12、13、14、16年光風会に油彩画、エッチングが入選。同級生、鈴木保徳が新しいエッチング技法を評価、草光信成によれば、16年春頃に製版科主任教授結城林蔵と助教伊東亮次による西洋画科在学生のためのエッチング講義が遠山の他、清水良雄・鈴木保徳・中村研一・宮地茂・吉澤廉三郎らも聴講実習した。26年曾宮一念・鈴木保徳・寺内萬治郎らと「柘榴社」を結成。28年帝展にも油彩画が入選。 **油彩画、水彩、版画**

#### 遠山 清 (とうやま・きよし/1903～1963年)

名古屋生れ。1926年東京美術学校図画師範科卒。28年帝展入選。28年光風会展で光風賞。34年光風会会員。34年美術グループ・サンサンオンに出品。41年光風会岡田賞。58～59年欧州游学。60年日展会員。63年日展審査員。28年名古屋市立第一高等女学校で教鞭。45～56年愛知県立愛知工業高等学校で教鞭。63年没、59歳。64年愛知県立美術館で遺作展。 **洋画家、美教**

#### 遠矢秀三 (とおや・しゅうぞう/1957年～)

宮崎県生れ。1980年宮崎大学教育学部美術科卒。福岡市の中学校で美術教師。87年二紀賞。88年文化庁現代美術選抜展に出品、88年二紀会同人。92年文化庁芸術インターンシップ研修員、西洋古典絵画技法を学ぶ。95年宮崎県美術展、宮崎県立美術館開館記念特別賞。2003年文化庁在外特別研修員、ハノーファー大学(ドイツ)留学。04年アジア国際美術展に招待出品。 **洋画家、美教**

#### 遠山五郎 (とおやま・ごろう/1888～1928年)

福岡県生れ。1911年文展初入選、14年東京美術学校西洋画科本科卒。同年渡米。19年ニューヨークに学ぶ。20～22年渡欧。ゲランに師事。仏官展に入選。22年帝展で特選。23年光風会会員。中村彝の肖像画を描く。東京で没、40歳。(出典 わ眼) **洋画家**

#### 渡嘉敷唯選 (とかしき・ただよし?/1886～1927年)

那覇市生れ。「琉球新報」、「沖縄毎日新聞」の記者、1921～27年県立第三高等女学校美術教師。丹青協会に参加し、後年は「ふたば会」に移った。弟に



渡嘉敷唯錦、野津唯尹、娘に山元文子がいる。1927年没、41歳。洋画家、美教

**遠山友啓**（とうやま・ともひろ/1917～1988年）

愛知県生れ。1961年光風会会員。日展で入選を重ね、会友のち評議員。名古屋で没、71歳。洋画家

**富樫寅平**（とがし・とらへい/1906～1951年）

新潟県生れ。1922年新発田商業卒。「一九三〇年協会展」入選。28～32年二科技塾油絵の勉強。31年独立美術協会展入選、以後毎回出品、37年独立賞、39年会友、43年会員。同会の中堅会員として毎回力作を出品、囁目された。1951年没、45歳。洋画家、挿絵、版画

**富樫 一**（とがし・はじめ/1930～1982年）

山形県生れ。武蔵野美術学校卒。1956年より自由美術協会展に出品、60年同会会員。67年昭和会展で優秀賞。石彫を主に野外彫刻を制作した。本名は美津雄。作品に「真空地帯」「石の波」など。1982年没、52歳。彫刻家

**富樫正雄**（とがし・まさお/1913～1990年）

北海道生れ。1932年東京美術学校入学、34年同校中退。41年新文展で入選、一水会展に入選。46年一水会会員。52年北海道生活派美術団体の創立に参加。「ニレの画家」と呼ばれた。1990年没、77歳。市立小樽美術館で2011年「大月源二と富樫正雄展」、13年「生誕90年記念富樫正雄展」。洋画家

**富樫 実**（とがし・みのる/1931年～）

山形県鶴岡市生れ。1948年佐久間白雲に師事。57年京都市立美術大学彫刻科卒。92年京都府文化賞功労賞。96年京都美術文化賞、京都文化功労者。99年紺綬褒章。彫刻家

**戸川ふみ子**（とがわ・ふみこ/1910～2001年）

宮城県生れ。1928年延岡高等女学校卒。宮崎県内で小学校、幼稚園に勤務。31年上京し、小学校勤務のかたわら絵画研究会に入る。35年[二科展]入選。38年[九室会]会員。47年[女流画家協会]創立会員。65年[二科会]会員。70年サロン・ドートンヌ招待出品。86年度美術出版社選賞。2001年没、91歳。洋画家、美教

**土岐国彦**（とき・くにひこ/1908～1985年）

福岡市生れ。太平洋画会研究所に学ぶ。1936年二科展に入選。43年二科展で特待。45年二科会会友。47年二紀会結成に参加。50年二紀会委員。76

年二紀展で総理大臣賞。60年渡仏、アカデミー・ド・ラ・グラン・ショミエールに通う。文化庁現代日本美術選抜展へ招待出品。68年夙川学院短期大学教授。85年没、77歳。洋画家、美教

**時任鵬熊**（ときとう・わしくま/1874～1932年）

鹿児島県生れ。1896年鹿児島尋常師範学校卒。上京、黒田清輝の白馬会研究所を経て、翌年東京美術学校西洋画科に入学、成績優秀で、生徒成績品展で二等賞、1902年東京美術学校西洋画科卒。帰郷、伊集院の補修学校、高等小学校などで教鞭。晩年には水墨画をよくした。1932年没、58歳。洋画家、美教、水墨

**常盤とよ子**（ときわ・とよこ/1928～2019年）

横浜市生れ。社会に進出し始めた女性たちを撮影し、1956年に「働く女性」を発表。横浜の写真界の発展と後進を育成した功績に対し2003年に横浜文化賞、14年に神奈川文化賞。日本における女性写真家の草分けの一人。横浜の赤線地帯の女性たちを女性の視点で撮った写真が注目を集めた。2019年没、91歳。写真家

**徳岡神泉**（とくおか・しんせん/1896～1972年）

京都生れ。1909年竹内栖鳳の画塾竹杖会に入り、本格的に画を学ぶ。10年京都市立美術工芸学校絵画科入学。金牌、銀牌を獲得。卒業制作の『寒汀』は学校買い上げ。京都市立絵画専門学校へ進学。17年同校卒。竹内栖鳳に師事する。25年帝展に入選。第7回、第8回と帝展特選。30年帝国美術院無鑑査。51年日本芸術院賞。57年日本芸術院会員。文化功労者。1966年文化勲章。1972年没、76歳。日本画家、版画

**徳川義宣**（とくがわ・よしのぶ/1933～2005年）

東京生れ。1933年伯爵堀田正恒の六男正祥として生まれる。尾張徳川家20代当主義知の長女三千子と結婚して徳川家の養子となり、義宣と改名した。1956年学習院大学政経学部経済学科卒、東京銀行に就職。57年財団法人徳川黎明会の評議員、60年から同会理事を歴任。61年東京銀行を退職し、62年徳川黎明会徳川美術館担当理事、67年同会専務理事。東京大学農学部林学科研究生として林業を学ぶ、東京国立博物館研究生となって美術史を学び、学芸員資格を取得。76年徳川美術館館長を兼務、93年徳川黎明会会長。日本工芸会顧問、東京都重要文化財所有者連絡協議会会長、全国美術館会議副会長、漆工史学会副会長、日本博物館協会理事、愛知県博物館協会理事、日本陶磁協会理事、茶の湯文化学会理

事、東洋陶磁学会常任委員。徳川美術館に伝えられた尾張徳川家コレクションの保存に尽力することどまらず、研究を美術館活動の中心に据え、旧大名家コレクションを収集して館蔵品を増強し、87年には地元政財界の協力のもと展示室と研究室を充実させる美術館の増改築を実現させるなど、徳川美術館を個性の際立つ日本有数の私立美術館に育てあげた手腕と実績は特筆される。私立美術館博物館の地位向上ひいては日本の博物館活動の振興に寄与するところが多く、91年には博物館法制定40周年文部大臣表彰と日本博物館協会顕彰を、2002年には文化庁長官表彰をうけた。美術史学や歴史学など幅広い分野に造詣が深く、とくに源氏物語絵巻と徳川家康文書の研究で第一人者として知られた。なお、93年までの履歴と著作は『徳川義宣氏略歴 著作目録』(徳川義宣氏の還暦に集う会編集発行、1994年)に詳しい。東京で没、71歳。徳川美術館館長、尾張徳川家21代当主

峡谷を描くなどして富山画壇に寄与した。36年没、65歳。洋画家、震災画家

#### 徳永幸子 (とくなが・ゆきこ/1938年～)

富山市生れ。1961年 金沢美術工芸大学油画科卒。61～96年神戸市立学校美術科教員。2000～18年 RIC絵画サロン主宰。06～17年北日本新聞文化カルチャー水彩画講師(富山市)。62年より8回、富山市で個展。卓磨・幸子展19回 神戸市、金沢市、18年スペインで開催。洋画家、水彩

#### 徳山 巍 (とくやま・たかし/1903～1991年)

岡山県生れ。1921年川端画学校入学。23年日本美術学校入学。31年第8回白日会展初入選、以後、17回まで出品し、39年第16回白日会展でクサカベ賞、40年同会会友となる。32年第19回光風会展に初入選。52年淡路島美術協会創立会長。63年秋山画廊(日本橋)で個展。65年頃、新構造社委員。75年銀座アートギャラリーで個展。80年台東区文化功労賞。83年新構造社展に出品。長谷川利行と交遊のあった画家。91年没、享年88歳。(佐)洋画家

#### 徳沢隆枝 (とくざわ・たかえ/1920～1984年)

1920年生れ。行動美術協会会員。上流作家協会会員。東京で没、64歳。洋画家

#### 徳田信保 (とくだ・のぶやす/1908～1995年)

名古屋市生れ。1927年愛知県第一師範学校卒。横井礼以に師事。39年新文展入選。春陽会会員の水谷清に師事、48年春陽会展入選、以後同展に出品をつづけ、60年会員。71～77年中部国際形象展招待出品。81年まで稲沢女子短期大学教授。名古屋市で没、86歳。洋画家

#### 徳田宏行 (とくだ・ひろゆき/1938年～)

千葉県生れ。1964年武蔵野美術大学西洋画科卒。76年白日会展出品、ハードコード賞受賞、白日会会友、80年会員。81年現代の裸婦展奨励賞。82年新宿伊勢丹個展、(以後、三越、銀座松屋など、個展多数)。洋画家

#### 徳永仁臣・柳州 (とくなが・ひとおみりゅうしゅ/1871～1936年)

岡山県生れ。1884年松原三五郎の天彩画塾に学ぶ。88年二世五姓田芳柳の画塾入門。93年画塾審美学舎を開設。1904年萬朝報社、画法部主任、挿絵を描いた。11～14年渡欧、アカデミー・ジュリアンでローランスに学ぶ。帰国後は文展、光風会展、国民美術協会展に出品、光風会会員となる。23年、52歳のとき関東大震災に遭い「惨状を記録するのが画家の使命だ」と語り、スケッチに基づき25枚の大作を完成する。作品は、東京都慰霊堂(震災記念堂・復興記念館)に保存されている。24年富山市に移住。黒部

#### 徳力富吉郎 (とくりき・とみきちろう/1902～2000年)

京都市生れ。京都市立美術工芸学校で学び、1923年京都市立絵画専門学校卒。28年国画創作協会博牛賞。29年京都創作版画協会を創立。同年国画賞。木版を始める。平塚運一や棟方志功らと同人誌『版』を創刊する。31年内田美術書肆から『創作版画花尽』版画集刊行。『大衆版画』を創刊。大戦後、版画製作所『まつ九』創設。68年大衆版画制作。個展も開催。72年西本願寺の聖人足跡版画集12点を制作。勲四等瑞宝章、京都市文化功労賞。2000年没、98歳。版画家、日本画家

#### 床次正精 (とこなみ・せいせい/1842～1897年)

鹿児島県生れ。7歳の時狩野派の絵師に学ぶ。幕末イギリス軍艦で見た油絵の写実性に驚き、独学で洋画を学ぶ。1879年来日中のグラント将軍像の写真を見て描く。80年裁判所を辞め画業に専念。伊藤博文、西郷南洲像を描く。89年憲法発布式場、祝宴図を描く。82年官職に復帰、宮内省御用掛、89年司法省に戻って検事・判事。97年没、55歳。洋画家

#### 登崎太郎 (とさき・たさぶろう/1890～1962年)

1890年生れ。自由美術家協会会員、審査員。モダンアート協会展に出品。観世流能誦師範、裏千家茶道家、(英文)美術評論家。1962年没、72歳。1962年大阪府立現代情報センターで遺作展。洋画家

#### 土佐林豊夫 (とさばやし・とよお/1907～1972年)

山形県生れ。1929年東京高等工芸学校彫刻科卒。同校研究科で洋画を学ぶ。30年辻永に師事。31年帝展入選。36年光風会展でK夫人賞、40年光風会会員、42年光風会展で岡田賞、のち評議員。47、48

年日展で特選、66年日展評議員。学芸大学教授。東京で没、64歳。洋画家

のサロン・ナショナルの会員。パリで没、42歳。(出典  
わ眼)彫刻家、水墨画家、日本画家

#### 土佐光起 (とさ・みつおき/1617～1691年)

大阪生れ。光則の子。幼名は藤満。絵所預となり光元以来中絶していた土佐家の絵所を再興する。光長・光信と併せて土佐三筆と称される。1691年没、75歳。江戸前期の土佐派の画家

#### 土佐光貞 (とさ・みつさだ/1738～1806年)

1738年生れ。土佐光芳の次男。土佐光淳の弟。宝暦4年分家して、宗家の兄とともに絵所預(えどころあずかり)となる。寛政2年の内裏造営の際、宗家の土佐光時をたすけ、障壁画の制作にあたった。号は廷蘭。従四位下。左近衛将監・土佐守。1806年没、69歳。江戸時代中期-後期の画家

#### 土佐光則 (とさ・みつのり/1583～1638年)

光吉の子(一説に弟子とも)。源左衛門と称し、宗仁と号する(一説に宗愨・宗思とも)。和泉国堺に父光吉と共に隠棲して土佐派の画系と家系を守っていたが、のち京都に移住した。絵所預となる。「源氏物語画帖」(東京国立博物館蔵)などの作品がある。1638年没、56歳。安土桃山・江戸前期の絵師

#### 戸嶋靖昌 (としま・やすまさ/1934～2006年)

栃木県生れ。1953年武蔵野美術学校油絵科入学。58年同校彫刻科卒。67年サエグサ画廊で個展。74年スペインに渡る。89年清澄画廊で近作展。93年清澄画廊で個展。2000年妻の死をきっかけに帰国。01年スペイン在住経験のある間島一らと「土の会」結成。02年月刊美術の特集号を通じて、執行草舟(バイオテック社長)と知り合う。04年彫刻を手掛ける。06年7月28日没、享年72歳。(佐)洋画家、彫刻

#### 戸田あや子 (とだ・あやこ/生誕年不詳～)

1971年文化庁現代美術選抜展、吉井画廊選抜展、73年みやま画廊企画展。74年現代日本美術選抜展(栃木県立美術館)。76年紀伊国屋画廊企画展。80年第七画廊企画個展、紀伊国屋画廊企画展。89年銀座アートセンター、京都アートセンター個展。女流画家展受賞2回行動美術展受賞3回(行動美術賞他)。行動美術協会会員。洋画家

#### 戸田海笛 (とだ・かいてき/1888～1931年)

鳥取県生れの彫刻家。1909年上京し、米原雲海に入門し内弟子となる。東京美術学校の聴講生となり、岡倉天心の指導も受けた。15年文展にて木彫「サロメ」が初入選、以後入選を重ねる。23年渡仏し、パリ

#### 戸田勝久 (とだ・かつひさ/1954年～)

神戸市生れ。井上直久よりアクリル画を学ぶ、山本六三より銅版画、デッサンを学ぶ。東京、京都、大阪で定期的個展開催。挿絵・装釘等手掛けた。画集に「詩人の休日」1993年「旅の空」(1999年、かとう美術刊)。「旅の手紙」(2006年ぎやらりい思文閣刊)。季刊「銀花」143号に戸田勝久特集記事掲載。与謝蕪村と稲垣足穂をこよなく愛する。洋画家、挿絵

#### 戸高秀夫 (とだか・ひでお/1895～1983年)

大阪生れ。明治末[天下藤次郎]水彩画を学ぶ。後に[赤松麟作]に師事、油絵を学ぶ。1919年早稲田大学文学部入学。阪東妻三郎主演の映画助監督。その後、美術教員として教壇に立つ一方、絵画グループ青人会を主宰、美術教育に尽力。退職後は制作に専念。宮崎各地の風物を描き続ける。1983年没、88歳。水彩画家、美教

#### 戸田謙二 (とだ・けんじ/生没年不詳)

1902年東京美術学校西洋画科選科卒。渡米。04年セントルイス万国博覧会に出品、のちシカゴに住む。洋画家

#### 戸田正寿 (とだ・せいじゅ/1948年～)

福井県生れ。1970年高島屋宣伝部を経て、73年日本デザインセンター入社。76年戸田事務所設立。82～84年サントリーローヤル、缶ビール、87年三宅一生のファッション広告、展示会、86～95年伊勢丹ファッションキャンペーン全般とCI、96年バーバリーブルーレーベル他を手がける。主な受賞はラハチポスタービエンナーレ特別賞、優秀賞1位、グランプリ。東京ADC会員賞最高賞2回、日本アメリカポスターグラフィック84金賞、銀賞、銅賞。第1回リュブリン国際反戦芸術トリエンナーレ優秀賞、ニューヨークADC銀賞、クラコウ国際版画ビエンナーレ美術館賞、フランス国際デザイン展グランプリ、クレスト国際広告賞ポスター部門金賞、第17回ブルノグラフィックデザインビエンナーレ国際展グランプリ。主な展覧会はブラドフォード国際版画ビエンナーレ展、ハラアニュアル招待出品展、ブラッド6展、ユーロパリアジャパンポスター展、X=展シカゴアトニウム美術館他。キュレーターとしてニューヨーク黒澤明ドローイング展。東京ADC、JAGDA会員。デザイナー、版画、ポスター

#### 戸田達雄 (とだ・たつお/1904～1988年)

前橋市生れ。1917年前橋中学校を中退。小林富次

郎商店ライオン歯磨本舗の広告部画室に就職。村山知義の意識的構成主義的小品展覧会を見て衝撃を受ける。23年首都無選展に出品。24年片柳忠男とオリオン社を創立。同年MAVOに参加。47年日本宣伝クラブを組織。58年「日本理科美術協会」創立メンバー。65年「一線美術会会員。88年没、84歳。洋画家、版画

**戸田健夫** (とだ・たてお/1930~1996年)

千葉師範学校卒。水彩連盟会員。千葉大学教育学部教授。1959年MO賞、64年水彩連盟賞、75年渡部菊二賞、79年古川弘賞、88年小堀進賞受賞。1996年没、66歳。著書、共著に「水彩の仕事」「水彩画の基礎」。水彩画家、美術教育

**戸田 定** (とだ・てい/1899~1976年)

東京生れ。藤島武二に師事。光風会会員、樗牛賞、1925年国画創作協会展で奨励賞、国画賞、35年窪田栄らと「フォルム」を結成。54年日展特選、無鑑査。1976年没、77歳。洋画家、水彩

**栃内忠男** (とちない・ただお/1923年~)

札幌市生れ。北海中学校(現北海高校)在学中、同窓の先輩・菊地精二に学ぶ。1941年北方美術協会展協会賞。44年太平洋美術学校に通学。45年札幌女子高等技芸学校教諭。46~68年全道展創立展に招待出品。48年北海高校教諭。54年個展(札幌・大丸ギャラリー)。59年独立展・独立賞。66年渡欧。北海道教育大学(札幌分校)非常勤講師。北海高校で美術教諭・講師、全道展創設参画し、10年間、事務局長を務めるなど美術教育、普及に尽力。洋画家、美教

**鳥取 敏** (とっとり・とし/1906~1973年)

福岡市生れ。旧制山口高等学校中退。上京、二科会美術研究所に学ぶ。1939~43年二科展に出品、47年二紀展に出品、48年同人賞、49年同人優賞、52年二紀会委員。49年新潟大学教育大学教官。73年没、66歳。洋画家、美教

**魚屋北溪** (ととや・ほっけい/1780~1850年)

江戸生れ。本名は岩窪辰行、俗称は初五郎のち金右衛門。字は拱斎、号は葵岡(きこう)。魚屋だったので魚屋北溪と呼ばれた。初め狩野雅信に習い、のち葛飾北斎に師事。狂歌本の挿絵、狂歌摺物(すりもの)にその特色を示した。主要作品『諸国名所』『古今狂歌撰』。江戸で没、70歳。江戸時代後期の浮世絵師

**都鳥英喜** (ととり・えいき/1873~1943年)

千葉県佐倉市生れ。浅井忠に洋画を学ぶ。1891年明治美術会会員。1901年太平洋画会創立会員。06年関西美術院教授。19~21年渡欧。30~41年京都高等工芸学校教授。京都で没、69歳。(出典 わ眼) 洋画家、美術教育

**等々力己吉** (とどろき・みよし/1893~1959年)

長野県生れ。松本教育学校卒。1927年第23回太平洋画会展に出品。宮坂勝の三元社に参加。28年渡仏、アカデミー・ランソンに入学、ヴァロワキエに師事。29年帰国。30年第17回二科展に入選、22回展まで出品。33年上京。35年第31回太平洋画会展に出品、以後38回展まで出品。36年第32回太平洋画会展で中村 彝賞。37年第1回一水会展に入選。40年太平洋画会会員。紀元二千六百年奉祝展に出品。42年第5回新文展に出品。45年郷里に疎開。46年一水会会員。50年第6回日展に出品。59年6月没、享年65歳。(佐) 洋画家

**トーナス・カボチャラダムス** (とーなす・かぼちゃらだむす/1944年~)

鹿児島市生れ。1963年東京大学理科入学。69年東京大学文学部美術史専修課程中退、初作品「かぼちゃ浄土」発表。79年サンシャイン版画グランプリ展銅版画大賞。81年西武美術館版画大賞展優秀賞。退化人類研究所主任研究員。90年詩人:谷川俊太郎との共著『かぼちゃごよみ』を出版。91年絵本『かぼちゃ人類学入門』を出版。2002年門司にカボチャドキヤ国立美術館開館、館長就任。04年北九州市立美術館分館で「トーナス・カボチャラダムスのゆかいな王国展」開催。版画家

**利根山光人** (とねやま・こうじん/1921~1994年)

東京生れ。1943年早稲田大学文学部卒。川端画学校に学ぶ。49、51年読売アンデパンダン展に出品。59年より、しばしばメキシコ訪問、古代マヤ文明に啓示。シケイロスらとの交友でJR横浜駅等大壁画制作。62年メキシコ政府よりアギラ・アステカ文化勲章。76年自宅のアトリエに音楽、絵画研究所開設。79年銀座三越で個展。62年メキシコ、アギラ・アステカ文化勲章。75年日本芸術大賞。東京で没、72歳。洋画家、版画、壁画

**登内微笑** (とのうち・みしょう/1891~1964年)

東京生れ。17歳の時に上京し寺崎広業に師事、1918年京都に移り菊池契月に師事。25年京都市立絵画専門学校別科卒。20年帝展に入選。25、27年特選。帝展審査員や新文展無鑑査。30~45京都市立美術工芸学校で後進の指導。54年日展から同展依頼出品。1964年没、。版画も制作。日本画家、版画、美教

**殿敷 侃** (とのしき・ただし/1942~1992年)

広島市生れ。26歳画家を志。1977年銅版画の制作。被爆体験にもとづいた作品で注目。79、80年に

安井賞連続入選。82年ヨーロッパ旅行で[ドクメンタ7]のボイス作品に衝撃を受け、83年山口県展に約4トンのタイヤなどの廃品でインスタレーションを発表。1992年没、50歳。版画家、インスタ

放で独自の文人画の世界をきりひらいた。皇室技芸員、帝国美術院会員。1924年没、87歳。名は猷輔、百鍊。字(あぎな)は無倦(むげん)。別号に鉄崖、鉄史。作品に「旧蝦夷(えぞ)風俗図」など。生涯一万点以上の書画を残す。日本画家、文人画家、儒学者

#### 土橋 醇 (とばし・じゅん/1910～1978年)

東京生れ。1938年東京美術学校油画科卒。38～40年渡仏、アカデミー・ランソンに学ぶ。46年光風会会員。52年光風特賞。53～73年渡仏、サロン・ドートンヌ、サロン・ド・メ展に作品を発表。53年パリで個展。63年パリ国際現代美術館に出品。67年土橋醇作品集発刊。78年没、68、69歳。洋画家

#### 土味川独甫 (とみがわ・どくほ/1918～1965年)

浜松市生れ。県立浜松工業高校図案科を卒業、川端画学校、本郷絵画研究所等で油絵を学ぶ。1945年日本作家協会会員。45年全日本画人連盟を創設し、委員長。東京美術研究所を起し、その所長。57年新象作家協会の創立委員。64年銀座画廊で画業30周年記念展を開催。東京で没、48歳。日本画家、洋画家

#### 戸張公晴 (とばり・こうせい/1939年～)

ソウル生れ。1963年新潟大学教育学部芸能学科彫塑科卒。日本彫刻会展、日展で活躍。県立新潟女子短期大学等で教鞭をとりながら制作を続ける。2014年地域文化功労者。彫刻家

#### 富沢有為男 (とみさわ・ういお/1902～1970年)

大分県生れ。東京美術学校で岡田三郎助に学ぶ、中退。新愛知新聞の漫画記者となる。1922年帝展入選。佐藤春夫に師事し、37年「地中海」で芥川賞。57年長編小説「白い壁画」を刊行した。1970年没、67歳。洋画家、小説家

#### 戸張孤雁 (とばり・こがん/1882～1927年)

東京生れ。1901年20歳で渡米、アート・ステューデント・リーグで絵学学ぶ。荻原守衛(碌山)交友、06年帰国。挿絵で活躍、太平洋画会研究所彫塑部に入り彫刻学ぶ。17年日本美術院彫刻部同人。19年山本鼎らと創作版画協会創立。「千住大橋の雨」「タンスの前」「玉乗り」などの傑作を遺す。東京で没、45歳。彫刻家、版画、挿絵、浮世絵師

#### 富澤有為男 II (とみさわ・ういお/1902～1970年)

大分県生れ。父の都合で幼少期に名古屋に移住。1919年東京美術学校西洋画科入学。20年同校中退。漫画家として新愛知新聞に入社。中央美術展に初入選。22年第4回帝展に初入選、以後7、8回展に出品。25年同人誌「鷲の巣」を創刊。26年サンパシオン第4回展で同人。27年渡仏。37年小説「地中海」で芥川賞。42年陸軍報道班員として従軍。45年空襲で自宅全焼。福島県に疎開。70年1月15日東京で没、享年68歳。(佐)洋画家、小説家

#### 富岡永洗 (とみおか・えいせん/1864～1905年)

長野県生れ。1882年小林永濯に学ぶ。90年師とともに『風俗画報』の挿絵を描機に画業専念。92年『都新聞』の連載小説挿絵を担当。98年日本画会結成に参加、評議員。98年日本美術院の特別賛助員。日本絵画協会5回・日本美術院第1回連合絵画共進会で一等褒状。出版物の版下仕事は多量で口絵、挿絵に人気があり一世風靡した。博文館「少年文学」シリーズの『太閤秀吉』、『新太郎少将』等の表紙絵・口絵等。門下生に、宮川春江、井川洗崖、谷洗馬などがいる。1905年没、42歳。口絵、挿絵、日本画家

#### 富田温一郎 (とみた・おんいちろう/1887～1954年)

金沢市生れ。1911年東京美術学校西洋画科卒。20年帝展で特選。24年中沢弘光らと白日会結成に参加。第1回白日会展出品。28年帝展再び特選。35年日本橋三越個展。38年数寄屋橋日動画廊個展。極めて温かな外光派風画風。東京で没、67歳。洋画家

#### 富岡惣一郎 (とみおか・そういちろう/1922～1994年)

新潟県生れ。1939年新潟県立高田商業学校卒。54年新制作展に入選。62年新作家賞。63年新制作協会会員。62年サンパウロ・ビエンナーレでサンパウロ近代美術館賞。65～72年渡米。84年安田火災東郷青児美術館大賞。91年新潟県八海山麓にトミオカ・ホワイト美術館が開設。94年没、72歳。洋画家

#### 富田溪仙 (とみた・けいせん/1879～1936年)

博多生れ。1891年頃より元黒田藩御用絵師の衣笠探谷に狩野派を学ぶ。96年京都に出、翌年都路華香に入門、四条派を学ぶ。1912年文展に入選、横山大観に認められた。14年再興院展に出品、院友。15年出品、同人。以後院展内の異色作家として活動。22年仏文学者山内義雄の紹介で駐日仏大使の職にあった詩人ポール・クローデルと親交を結び、詩画集『皇城十二景』などを合作。35年帝国美術院会員、翌年辞退。1936年没、57歳。日本画家、版画、挿絵

#### 富岡鉄斎 (とみおか・てっさい/1836～1924年)

京都市生れ。国学、漢学、仏教、詩文を学ぶ。勤王家とまじわり、維新後、各地の神社の宮司となる。1881年郷里の京都にかえり、読書と画業に専念。自由奔

#### 富田至誠 (とみだ・しせい/1897～1949年)

熊本県生れ。1915年鹿本中学校卒業後、東京美術学校西洋画科に入学。卒業後は熊本に帰り、没するまで御船中学校につとめた。九州美術会後半のメンバーとして活動した。御船中学校時代の教え子に、井手宣通、浜田知明らがいる。1949年没、52歳。洋画家、美術教育

**富田不二夫** (とみた・ふじお/1886～1982年)

福島県生れ。川端画学校で絵画、御茶ノ水の長谷川写真館で写真を学ぶ。1910年油井夫山ら「アートクラブ」を結成。油彩画・水彩画・写真を出品。13年「アートクラブ福島写真研究会」を発足。23年「福島洋画会」の結成に参加。木版画を出品。福島市で没、96歳。洋画家、写真家。版画

**富田通雄** (とみた・みちお/1901～1994年)

神奈川県生れ。1921年日本水彩画研究所に学ぶ。小山良修、中西利雄知り、3人で蒼原会を結成、水彩画の革新を図った。日本水彩画会展や二科展に出品。29年二科展入選。34年日本水彩画会委員。46年一水会会員。その後は一水会、日本水彩画展、日展で活躍。日本水彩画会の理事。1994年没、93歳。水彩画家

**富田有紀子** (とみだ・ゆきこ/1958年～)

東京生れ。1980年女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻卒。東京版画研究所で銅版画を学ぶ。旺玄会へ出品、賞受賞。83年東京セントラル美術館版画大賞展入選。96年昭シェル石油現代美術賞入選。96年VOCA展 奨励賞。2001年バーラト・バアヴァン国際版画ビエンナーレ入選。03年浜松市美術館版画大賞 奨励賞。版画家

**富所龍人** (とみどころ・たつと/1964年～)

新潟県生れ。1988年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。6美大卒業生選抜絵画展(ブロードウェイギャラリー)。2000年白日会富田賞受賞(以降出品'16陽山美術館茂木健一郎ルピック賞)、明日の白日会展('00,'10,'11,'12 松屋銀座)。白日会会員。洋画家

**富取風堂** (とみとり・ふうどう/1892～1983年)

東京生れ。1903年松本楓湖の安雅堂画塾に入門。15年に赤曜会に参加し、15年院展に入選し、横浜の原三溪の援助を受けた。24年日本美術院同人。25年の聖徳太子奉讃美術展、36年改組帝展に入選。50～56年日展に依嘱出品。58年日本美術院評議員。76年文部大臣賞。日本美術院監事。千葉県文化功労者。横山大観記念館常務理事。1983年没、92歳。日本画家

**富永太郎** (とみなが・たろう/1901～1925年)

東京生れ。1919年第二高等学校入学。仙台市内の画塾に通う。22年東京外国語学校仏語科入学。23に留年。休学、川端龍子の画塾に通う。上海への旅

を経て画家として立つことを決心し、本郷洋画研究所に通う。小林秀雄らと同人誌「山繭」創刊。25年没、24歳。詩人、洋画家、版画家、翻訳家

**富永朝堂** (とみなが・ちょうどう/1897～1987年)

福岡県生れ。1915年上京し、山崎朝雲に師事、木彫を学ぶ。19年日本美術協会展に初入選し、29年審査員。24年帝展入選。して以後、帝展に出品し、32、33年帝展で特選。34年帝展無鑑査出品。50年日展で審査員、58年日展会員。戦後は郷里福岡に住み、福岡県文化財調査委員をつとめたほか、地域文化の向上にも尽力。75年西日本文化賞、76年福岡市文化賞、84年地域文化功労者。福岡市で没、90歳。彫刻家

**富永直樹** (とみなが・なおき/1913～2006年)

長崎県生れ。1938年東京美術学校彫刻科卒、40年同校研究科修了。北村西望に師事し、36年文展入選。50、51、52年日展で特選。68年日展文部大臣賞。72年芸術院賞を受賞。74年芸術院会員。79～83年日展理事長、日本彫刻会理事長。84年文化功労者、89年文化勲章。代表作に『原爆殉難教え子と教師の像』(1982)など。東京で没、94歳。彫刻家、日展理事長、日本彫刻会理事長

**富成忠夫** (とみなり・ただお/1919～1992年)

山口県生れ。42年東京美術学校油画科卒。47～57年自由美術家協会会員。58～70年美術グループ「同時代」同人。32歳ころから、写真家活動、昆虫、植物、顕微鏡撮影による微生物を撮る。75年富成写真工房設立。戦後日本の植物写真の創始者。90年絵本にっぽん賞大賞。東京で没、73歳。写真家、洋画

**富本憲吉** (とみもと・けんきち/1886～1963年)

奈良県生れ。東京美術学校図案科建築部を経て、ロンドンに留学して室内装飾を学ぶ。1911年帰国し、12年イギリス人バーナード・リーチと共に六世尾形乾山に師事して陶芸の道に入る。27年国画創作協会工芸部設置。34年帝国美術院会員、37年帝国芸術院会員。戦後、芸術院会員、東京美術学校教授を辞し京都に移り、制作。新匠工芸会(のち新匠会と改称)を結成。京都市立美術大学の教授。最晩年には学長。61年文化勲章。人間国宝。京都で没、77歳。陶芸家、木版

**戸村茂樹** (とむら・しげき/1951年～)

青森県生れ。1976年 岩手大学特設美術科卒。73～75年国画会展。84年版画制作、85年岩手県優秀美術選奨受賞作家展(萬鉄五郎記念美術館)、87年版画「期待の新人作家」大賞展買上賞。89年、91年ウヅ国際小版画展名誉メダル賞。98年ブラティスラヴァ国際エクスリプリストリエンナーレグランプリ。現在は盛岡市在住。版画家

**戸村宇里** (とむら・うさと/1970年～)

東京都生れ。1977年NYに1年間暮らす。ロンドン、パリ、ローマを回り帰国。88年東京都立深沢高等学校卒業。90年桑沢デザイン研究所グラフィックデザイン科卒。店舗企画会社、映画館、印刷会社等に勤務。

渋谷のクラブシーンを中心に照明器具オブジェ等を展開。コミュニケーションツール「bit」を洋書ロゴスにて発売。96年雑誌『POPEYE』等に deaman の肩書きで多数のアイデア作品を掲載。97年 TOKION の創刊に携わる。SHIPS 広告連載 22 回。99年 TOYOTA お台場メガウェブキャラクター トリオ de サンバ。99年 SAZABY ウィンドウディスプレイ。99年 renownlook オブジェ・プレスキット制作。92年 KDCSCrossWorldTable KDS 大賞。洋画家、デザイナー

#### 友川カズキ (ともかわ・かずき/1950年～)

秋田県生れ。能代工高時代バスケットボール選手、全国大会へ。フォーク歌手、詩人。絵画制作も長く、ヨシダ・ヨシエに見いだされ、洲之内徹「きまぐれ美術館」にも取り上げられる。85年銀座で個展をはじめ全国各地で個展開催。洋画家

#### 友添泰典 (ともぞえ・やすのり/1935年～)

福岡県生れ。1956年創元会展で受賞、59年二紀会展に出品、65年二紀会同人。76年二紀会会員、翌年委員。県展で数多くの賞を得、県美術協会会員。安井賞展に4回出品。『病むシリーズ』『刺青シリーズ』はその独自で緻密な作風により高い評価を受ける。洋画家

#### 富永惣一 (とみなが・そういち/1902～1980年)

東京生れ。1926年東京帝国大学美学美術史学科卒、同大学大学院西洋美術史専攻。学習院講師を経て、29年教授、戦後学習院大学教授となる。68年共立女子大学教授。「白樺」派に傾倒し、西欧絵画の紹介につとめ、54～64年美術評論家連盟初代会長。59～68年国立西洋美術館初代館長。国際的経験がかわれて70年大阪万国博美術館長。日仏文化交流の功績でフランスのオフィシエ勲章受章。国立西洋美術館館長。著書に「ロダン」「ギリシャ彫刻」「パルテノン」「ファン・ゴッホ」「ルノアール」など。美術評論家、美術史家、美術館長、美術評論家連盟初代会長

#### 富成忠夫 (とみなり・ただお/1919～1992年)

山口県生れ。1942年東京美術学校油画科卒。47～57年自由美術家協会会員。58～70年美術グループ「同時代」参加。その後、写真の仕事に傾き、植物写真家として活躍した。著書に『日本の花木』『野草ハンドブック』。「週刊朝日百科・世界の植物」の編集委員。東京で没、73歳。写真家、洋画

#### 友寄喜恒 (ともよせ・きこう/1845～1885年)

那覇市生れ。唐名は恵克昌、恵光翰。喜恒に改名

した。友寄地筑登之親雲上喜詳(恵興智)の二男。風俗画、人物画を得意とした。廃藩置県後は県庁につとめ、尖閣列島の調査にも参加している。作品として「按司夫婦図」「田舎夫婦図」「花鳥図」「山桃売娘之図」などがある。1885年没、40歳。沖縄の絵師、風俗画、日本画家

#### 戸谷成雄 (とや・しげお/1947年～)

長野県生れ。1975年愛知県立芸術大学大学院彫刻専攻修了。74年個展を開催し、84年から「森」シリーズ、94年から「《境界》から」シリーズ、2000年頃から「ミニマルバロック」シリーズなど発表。チェーンソーで木材を削ることで成形する彫刻作品を手がけてきた。ポスト・ミニマリズム、もの派以降解体された「彫刻」の再構築と新たな可能性を探る戸谷の作品は、彫刻の定義や構造を骨組みとして提示しつつ、作家によって提示された概念である「表面」「境界」「関係」「影」「存在」といった問題に切り込んでいる。武蔵野美術大学名誉教授。彫刻家

#### 外山卯三郎 (とやま・うさぶろう/1903～1980年)

和歌山県生れ。1928年京都大学文学部美術史学科卒。29年芸術研究会を組織し、「芸術学研究」を刊行。「一九三〇年協会」に参加。戦前から美術評論活動をつづけ、46年社団法人造形美術協会を創立して理事長。美術家の育成に当たった。53・54年に女子美術大学講師となり、66～69年及び71～74年武蔵野音楽大学講師、69～71年同校教授として教鞭をとる。著書多く「南蠻学考」「新構図法の研究」「日本洋画論」「きりしたん文化史」「原始キリスト教の美術」「ヤミ族の原始芸術」「原始芸術論」「日本洋画史」(全5巻)が三巻まで完成していた。静岡県で没、77歳。美教、評論家、版画、洋画家

#### 外山卯三郎 II (とやま・うさぶろう/1903～1980年)

和歌山県生れ。1922年北海道帝国大学予科入学。28年京都帝国大学文学部美学美術史卒。三科、「一九三〇年協会」に参加。戦前から美術評論活動。46年造形美術協会を創立理事長。53～54年女子美術大学で講師、武蔵野音楽大学で講師～教授。著書多し。御殿場市で没。77歳。美教、評論家、版画、洋画家

#### 外山佐傳 (とやま・さぜん/1892～1955年)

熊本県生れ。1910年鹿本中学校卒業後、東京美術学校西洋画科に入学。卒業後は、千葉県、広島県の中学校教員を経て、熊本に帰り、玉名中学校、鹿本中学校で図画を教えた。教員時代の教え子に川本末雄、大塚耕二がいる。晩年は仏画を描いた。左利

きの剣道の名手としても知られた。1955年没、63歳。  
**洋画家、美術教育**

**豊泉朝子** (とよいずみ・あさこ/生年不詳～)

東京生れ。1986年多摩美大学院修士課程修了。88年期待の新人作家大賞展大賞。92年マーストリヒト国際版画ビエンナーレ展/ベルギー日本版画交流展。97年クラコワ国際版画トリエンナーレ展、エジプト国際版画トリエンナーレ展。98年ロシア日本国際版画交流展(ロシア)。2000年Ex Libris in The 21th Century (パルセロナ)。**版画家、水彩**

**豊島弘尚** (とよしま・ひろなお/1933～2013年)

青森県生れ、1952年八戸高等学校卒。東京藝術大学美術学部絵画科油絵専攻卒、安宅賞。56年稲葉治夫、高山尚、渡辺恂三と新表現主義展(60年に新表現展と改称)を結成。個展中心発表。74～75年文化庁在外芸術家派遣員としてNY、ストックホルムに滞在、北欧神話とオーロラに魅せられ作品制作。98年安田火災東郷青児美術館大賞。2002年八戸市美術館で「豊島弘尚展—北の光に魅せられて」開催。2013年没、79歳。14年八戸市に作品寄贈、15年「豊島弘尚展 北の光と三つの故郷」を開催。**洋画家**

**豊田一男** (とよた・かずお/1909～1989年)

札幌市生れ。1931年東京美術学校図画師範科卒。松江市で教職。48年自由美術家協会会員。蠟画技法確立。64年主体美術協会創立に参加会員。高崎女子高校などで教鞭。77年高崎市文化賞。82～88年群馬県美術会会長。1989年没、80歳。91年高崎市美術館で回顧展。**洋画家、美教**

**豊田三郎** (とよだ・さぶろう/1908年～2015年)

福井市生れ。福井農林学校卒。帝国美術学校卒、中島飛行機製作所に勤務。1950～58年に教員。89年サロン・ド・パリ展大賞。豊かな緑の杉の描写を特徴とし、「トヨダグリーン」とも表現される。2001年福井県足羽郡美山町より、名誉町民。06年福井市に「豊田三郎記念ギャラリー」を開設、常設展示。15年没、107歳。**洋画家**

**豊原国周** (とよはら・くにちか/1835～1900年)

江戸生れ。号は花蝶楼、一鶯斎、豊春楼。初め豊原周信、のち歌川国貞の門人となった。美人画、役者大首絵を描く。浮世絵師の最後を飾った人といわれる。東京で没、65歳。**幕末から明治にかけての浮世絵師**

**鳥居清忠** (とりい・きよただ/生没年不詳)

鳥居清信の門人とされる。江戸米沢町(現在の東日

本橋二丁目)に住む。作画期は享保から寛延の頃にかけてとされ、紅絵や漆絵の役者絵、浮絵などの他、肉筆画を残す。一枚摺の役者絵では、享保3年(1718年)から寛保4年(1744年)頃までの作が確認されている。**江戸時代の浮世絵師**

**鳥居清忠 四代目** (とりい・きよただ・よだいめ/1875～1941年)

東京生れ。鳥居清貞の門人でその長男。1892年土佐派の川辺御楯に絵を学び、その傍ら父の清貞にも付いて鳥居派の画風を学んだ。鳥居派六代目の三代目鳥居清満に後継者が無かったため四代目清忠を継ぎ、鳥居派宗家七代目となる。歌舞伎座、新富座の看板絵、番付などを描いた。明治末期には木版口絵も手がける。1941年没、67歳。演劇画に多大な貢献をした家系であった。**浮世絵師。鳥居派七代目当主**

**鳥居清忠・言人 五代目** (とりい・きよただ/1900～1976年)

東京生れ。1915年立教中中退。15年言人と号し鳥居派独特の芝居絵看板を描き、歌舞伎界の重要な存在となる。29年8代目宗家を継承。その後画号を清言と改め、さらに62年5代目清忠を襲名。一方、舞台美術、美術考証家としても活躍。66年には日大芸術学部講師となる。代表作に「髪」(日本画)、「夏妓」(版画)、芝居絵「俊寛」「雷神不動北山桜」など。**大正・昭和期の浮世絵師、舞台美術家 鳥居派八代目宗家**

**鳥居清永** (とりい・きよなが/1752～1815年)

役者絵の名門・鳥居派の四代目として、役者絵と美人画の双方で時代をリードしたのが清長です。若い頃は主に役者絵を描きましたが、天明期に入り、八頭身の健康的な美人を描いて一世を風靡しました。二枚続き、三枚続きのワイドスクリーンに、長身の美人の群像を巧妙に配置した作品が特徴で、多くの傑作を残しています。また、歌舞伎の舞台上の光景を描いた「出語り図」を多く手がけたことでも知られます。天明6年頃に鳥居派四代目を襲名した後は、もっぱら芝居の看板絵などを制作したといわれています。明治のお雇い外国人フェノロサが、浮世絵師の最高峰に位置づけた絵師でもあります。1815年没、63歳。**江戸時代の浮世絵師**

**初代 鳥居清信** (とりい・きよのぶ/1664～1729年)

寛文4年生まれ。初代鳥居清元(きよもと)の次男。鳥居派の始祖で鳥居家初代。父と大坂から江戸にうつり、芝居の看板絵をかく。一枚摺(ずり)の役者絵を考案し、瓢箪足(ひょうたんあし)、蚯蚓描(みみずがき)という鳥居派独自の画法を創造。美人画にもすぐれた。享保(きょうほう)14年7月28日死去。66歳。通称は庄兵



衛。代表作に「上村吉三郎の女三の宮」「風流四方屏風(びょうぶ)」。江戸時代前期-中期の浮世絵師

#### 鳥居清倍 (とりい・きよます/生没年不詳)

初世。俗称、庄二郎。鳥居家 2 代目に擬せられる。清信の長男とも弟とも伝えられる。丹絵(たんえ)・漆絵による、すぐれた役者絵・美人画を残した。主な作画期は宝永から正徳期(1704～1716)とされる。鳥居清信とともに鳥居派の基礎を築いた。大々判丹絵に勇壮な作品が多い。江戸中期の浮世絵師

#### 鳥居清光 (とりい・きよみつ/1938 年～)

鳥居派 8 代目・5 代清忠の娘で、伊藤清永に師事し、油彩画を学ぶ。東京芸術大学日本画科卒、日生劇場のデザイン室や技術部に勤務。父に鳥居派の画法を習得。1976年女性浮世絵師とし、82年鳥居派9代目を襲名し、清光を名乗る。木版画や鳥居派伝統の歌舞伎絵看板だけでなく、歌舞伎の衣裳や舞台美術も手がけ、舞台装置図のような立体図も制作。86年エイボン芸術賞、88年長谷川伸賞、94年日本演劇興業協会賞、2016年松尾芸能賞特別賞受賞。05年黄綬褒章受章。日本の女性画家、浮世絵師、舞台美術家、鳥居派9代目

#### 鳥居言人 (とりい・ことんど/1900～1976年)

東京生れ。鳥居清忠の長男。父の七代目清忠から鳥居派の画法を学ぶ。1914年小堀鞆音塾に師事、土佐派を学ぶ。雑誌の挿絵、家業の看板絵も手がけた。18年鏘木清方に師事し美人画を描く。美人版画制作は29～35年制作。29年には『創作版画／昭和風俗美人集』を創美会(酒井好古堂)から限定300部で刊行開始、41年父(清忠)死去に伴い鳥居家八代目当主。62年、七代目の名跡を継承し、清忠と改称。70年忠雅急逝、歌舞伎座等の看板絵を描いた。1976年没、76歳。浮世絵師、鳥居家八代目当主、版画、美教

#### 鳥居忠雅 (とりい・ただまさ/1904～1970年)

東京生れ。1921年四代目清忠に師事し、鳥居派の芝居絵を学ぶ。43年歌舞伎座などの絵看板や番付を描いており、第二次世界大戦後は主として歌舞伎座、国立劇場、御園座などの絵看板、番付、筋書などを描いた。また渡辺木版美術画舗から新版画の作品を発表している。日本劇画院展にも作品を出品しており、41年木版画「隈取十八番」、昭43年の「続隈取

十八番」、「歌舞伎隈取図説」があげられる。49年鳥居家の姓を許された。52年木版画集『歌舞伎十八番』全三巻を著す。東京で没、65歳。浮世絵師、日本画家、版画

#### 鳥居敏文 (とりい・としぶみ/1908～2006年)

新潟県生れ。1931年東京外国語学校独語科卒。32～35年渡欧。39年独立美術協会賞。43年独立展で岡田賞。46年独立美術協会会員。46年日本美術協会結成に参加。87年新潟市美術館で「鳥居敏文展」開催。89年東京セントラル美術館で「自選展」開催。2006年没、98歳。洋画家

#### 鳥居雅隆 (とりい・まさたか/1914～2002年)

山梨県生れ。甲府一高卒。1938年東京美術学校で藤島武二に師事、本科卒、40年研究科修了。41年応召、敗戦後、抑留されて49年帰国。54年～56年渡仏、アカデミー・グラン・ショメールに学ぶ。56年二紀会同人。57年第11回二紀展で同人賞。65年再渡欧、66年パリのサロン・デ・アンデパンダン展に出品。67年ギャラリー・ラ・カーズ・ダールで個展。同年帰国、銀座松屋で滞欧作品展開催。68年～72年毎年欧州写生旅行。75年二紀会理事、77年理事辞任。82年動く美術展に出品。画壇「野火」展に出品。後期には抽象画に傾倒し作品を制作していた。02年没、享年88歳。(佐)洋画家

#### 鳥居雅隆 II (とりい・まさたか/1914～2002年)

山梨県生れ。東京美術学校入学。藤島武二に師事、40年芸大油絵科 研究科修了。54年帰国後、世田谷にアトリエを構え、画塾を始める。滞欧 パリのアカデミー・グラン・ショミエールに2年間学ぶ。61年二紀会のリーダー、宮本三郎画伯に可愛がられ、二紀会委員。65年滞欧、パリの市民権獲得パリ、サロン・デ・ザンデパンダン展出品。67年パリ ラカーズダール画廊にて個展開催。帰国後 銀座 松屋にて滞欧作品展。75年二紀会 理事に就任。終身審査委員となる。2002年没、88歳。洋画家

#### 鳥毛将宏 (とりげ・まさひろ/1965年～)

大阪生れ。1982年埼玉の彫刻工房に入る。85年第1回デッサン大賞展入選。1987年京都・星野画廊で個展開催。同画廊で毎年のように個展開催、図録も都度制作。88～93年星野画廊で個展を開催。洋画家